

支配者プラネット

彼岸花ノ丘

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

二〇四五年二月十日。

インドネシア諸島に出現した一体の巨大生物が、僅か数時間で百万もの人命を奪った。人類はこの危険な巨大生物の撃破を試みるが、巨大生物は人類の想像を超える力を次々と見せつける。

そして巨大生物に呼応するように、世界各地で異変が生じ始めた。人類は徐々に追い詰められていく……

これは、人類が滅びから逃れる術を探す物語ではない。

粛々と進められる、滅亡の過程である。

休暇	根絶	掃討	代償	自壊	追撃	没収	習得	増員	害悪	本番	秘匿	予防	民兵	奪還	援護	障害	駆除	密告
163	152	140	132	124	115	105	97	87	79	71	62	50	42	33	27	15	5	1

目次

密告

少女は自宅の隅で震えていた。自分の口を両手で塞ぎ、全身をすっぽり覆い隠す布を頭から被りながら。

彼女はインドネシア諸島のとある原生林で暮らしている、マメア族という少数民族の一人だ。少数民族といっても他の民族との仲は良好で迫害も受けておらず、貨幣経済にもまあまあ馴染めたため観光ガイドや出稼ぎによる現金収入もある立場。精々インドネシアに暮らす人々の中で、平均よりちよつと貧しいぐらいだ。村に建つ何十という家は痩せた木と草で作られたものだが、これはマメア族の伝統的住居なので貧しさとはあまり関係ない。

そんなこの村に暮らす人々は、確かに嫌な性格の奴もいるが、それ以上に良い人ばかりだ。例えば少女の友達、友達の親達、少女の親族……他の人から見るとどうかは分からないが、少なくとも少女にとっては、みんな良い人達である。

なのに、みんな殺された。

『化け物』の手によって。

「パパ……ママ……」

両親の名をぽつりと声に出す少女。ほんの十分ぐらい前に父は「助けを呼んでくる」と言っただけを出て、そのすぐ後に悲鳴が聞こえたのに。父の様子を見てくると言った母も、未だ戻ってこないのに。

いや、きつとあの悲鳴は別の村人が出したものに違いない。両親は今頃村を出て、森の外にある町まで辿り着いている筈だ。町の警察は両親の訴えを聞き入れ、今は助けが来ている最中。もうすぐ警察官が何十人も集まり、大きな銃である『化け物』をやっつけてくれるに違いない――

少女はそう思った。それは根拠のない現実逃避であるが、しかし落ち着きを取り戻す上では意味のあるもの。荒れていた呼吸は静まり、身体の震えも収まる。

冷静に考えれば、じつとしていけば問題ないのだ。村人を殺していった『化け物』は屋外を闊歩している。対する少女は建物の中に身

を隠している状態だ。良く言えば伝統的、悪く言えば原始的な家であり、木の板で作られた建物に窓なんてない。外から建物内を窺う事は出来ないのである。

息を潜めていれば見付からない。もしかしたら『化け物』は建物を破壊してでも自分を探し出そうとするかも知れないが、屋根の下敷きになるなりして運良く身を隠せば……少女がそう祈った時だった。

メキメキと、木の板をへし折るような音が聞こえてきたのは。

村の周りにある木々が薙ぎ倒された？ それとも近所の家が倒された？ ——どれもあり得ない。あり得ないと分かるほど、その音は少女のすぐ傍から鳴っていた。

次いで少女の被っていた布が、ゆっくり、だけど力強く持ち上がる。

「あつ……」

突然の出来事に、少女は自分が被る布を咄嗟に掴む事すら出来なかった。布は少女の遥か頭上へと浮かび、もう少女の身体を隠せていない。

少女は自然と顔を上げる。

少女の目の前には屋根が破壊されて見えるようになった大空と、『化け物』がいた。

五十メートルはある身体と、その身体よりも遥かに巨大な四枚の翼。先っぽで器用に布を引っ掛けた一本と、大地を踏み締める五本の、合計六本の脚が胴体から生えていた。口のない頭には家よりも巨大な複眼があり、じつと少女を見つめている。頭・胸・腹の三つに分かれた身体は老いた葉のように濃い緑色をしていて、表面は樹木のようにひび割れていた。四枚の翼には紋様がなく、間近で見れば身体と同じ材質で出来ていると分かるだろう。

動物と植物の要素が混ざり合ったような、異様な外観だった。マメア族の暮らす森には様々な動植物が生息しているが、こんな巨大な化け物を見た事もない。いや、世界の何処にこんな生物がいるというのか。だって、こんなのは、明らかにおかしい。

しかし少女にとって、コイツの正体がなんであるかなどどうでも良い事。

村人を殺しまくった『化け物』が自分の目前に居る事に比べれば、何処までも些末な問題である。

「…………ふ、ふへ…………」

少女は笑った。引き攣ったものだが、自然と笑みが出てしまった。人間の笑顔は、相手に敵意がない事を伝えるためのものだ。あくまで同種のための表情であり、人間以外に笑顔の意味が通じるかは分からない。分からないが、この無力な少女には己の無力さを主張する事しか出来ない。

理解してもらったところで、相手がこちらの意思など気にも留めていないなら無意味な行いだ。

巨大な『化け物』が、布を引っ掛けた前脚を高々と掲げる。少女は笑顔のまま、全身から力を抜いていき——

決るような打撃音と、小さな地震が村の隅々にまで行き渡る。

少女の家の調理場に積まれた、今日収穫したばかりの瑞々しい山菜がごろりと落ちた。

黙示録が始まる。

人の驕りと怠惰の結果として。

ただしそれを理解している人間は、一人としていない。

駆除

「怪獣う？」

人口三十万人以上という、インドネシアの中ではかなりの規模を誇る大都市にて。一人の中年警察官が眉を顰めながらそう言った。

近年インドネシアでは日本の交番システムを手本にした、地域密着型の警察へと変化している最中にある。都市には交番が幾つも置かれ、彼はその一つに勤める身だ。そしてその交番内の人員では——彼含めて二人しか所属していないが——最も高い地位に就いている。

尤も彼の勤務している区画は、都市の端に位置する住宅地。犯罪どころかケンカすら殆どない平和な地域で、もう昼過ぎを迎えた本日二〇四五年二月十日も落とし物が三つ届けられたのみ。警邏の時間を除けば、デスクワークだけで一日の仕事が終わりそうである。

自分達が暇なのは良い事だと彼も思うが、毎日毎日事務仕事というのは飽きが来るもの。だから、とまではいかないにしても、彼は二十代という若い後輩警察官とお喋りに興じる事が日課になっていた。男と長話をする趣味もないので、一日十分程度だが。

そんな今日の十分間のお喋りで出てきたのが、先の『怪獣』発言である。

「ええ。ボクの故郷の村で、そんなのが現れたってメールが先程来まして……」

「故郷って、確かお前ママア族だったか。こう言うのも失礼だが、あんな森の中でもスマホって通じるのか？ 原生林だぞ？」

「通じますよ普通に。というか今時の通信技術なら、森とか関係なく何処でも通じるじゃないですか。ボクの故郷をどんな魔境と思ってるんですか？」

「ははっ。まあ、そうなんだがな……兎も角、その故郷の人達が怪獣云々言ってるのか？」

後輩との話が脱線しそうになったと、彼は元の話題——怪獣について改めて尋ねる。

後輩は困ったように眉を顰めながら、こくりと頷いた。

「ええ、まあ……ただメールしてきたのは村の子供からですし、そのメールも一度来たきりなんです。意味が分からなくて電話も掛けたのですが、誰も出なくて……」

「誰もって、子供以外にもか?」

「そうなんですよ、村に居る友人や自分の親も出なくて。というか全然通信が繋がらないんです。村のスマホが全部一斉に故障しない限り、こんな事起こらない筈なのに……」

後輩は淡々と語るが、身体はそわそわと動かしていた。

どうせ子供のイタズラだ。怪獣なんて、そんなのは映画の中だけの話である。

後輩もそう思っているようだが、村の人々と連絡が取れないのは何故なのか。後輩が語っていたように、現代の通信技術であれば、端末が故障でもしていない限り通信が繋がらないなどあり得ない。偶々ママア族所有のスマホが全て一斉に故障したというのは、確率的にゼロではないが……自然な考え方ではないだろう。

何か、村に事件が起きたのではないか。故郷がどうなったか知りた——後輩の気持ちは凡そこんなものかと彼は考える。故郷を思う気持ちは、ここ数年地元に戻る事が出来ていない彼にもよく分かった。

幸いにして、今日も仕事は殆どない。

「……ま、暇だしな」

「え?」

「村まで見に行つてこい。市民から通報があつたのに無視したら、色々バツシングされて面倒になるからな。んで、無用な心配をさせたガキに拳骨でも喰らわせとけ」

彼が後輩にそう伝えると、後輩は一瞬呆けたような顔になる。されどすぐに彼の意図を察したようで、ぱあっと明るい笑みを浮かべた。ぺこぺこと頭を下げながら、後輩は自分の荷物を手早く纏めていく。

さて、間もなく彼一人になってしまふ訳だが、今日中に後輩の分の仕事もやらねばなるまい。一人分として見れば大した仕事量ではな

いとはいえ、二人分を一人でやるのは中々大変だ。外から聞こえてきた飛行機の音に思考を邪魔されつつ、彼はこの後のスケジュールを考える。

そう、暢気に考えていた。

まるで、その夢心地の時間は終わりだと告げるかのように。

「お、お巡りさん！ 大変だよお！」

一人の老婆が、交番内に駆け込んできた。

老婆が現れた時、彼と後輩はビクリと身体を震わせた。それは、勿論老婆が突然交番に駆け込んできたから、というのはある。しかしそれ以上に、老婆の鬼気迫る顔付きが彼等を驚かせた。

老婆は息を切らし、今にも倒れそうさ。見た目から判断するに老婆の歳は七十代、或いは八十代ぐらいなのに、此処まで全力疾走してきたらしい。この歳だと、それこそ命に関わる暴挙だろう。

その暴挙に出てでも、交番に駆け込もうとした。老婆の伝えたい事が、落とし物や道に迷った程度のものでないのは簡単に窺い知れる。

「おばあちゃん、落ち着いて。ほら、まずは椅子に座ろう」

彼はゆっくりと話し掛け、一端落ち着くよう促す。しかし老婆は首を横に振り、それより私の話を聞けとばかりに口を開く。

「そ、空、空に、化け物が出たんだ！」

そして、警察官二人にそう告げた。

最初、彼は老婆の言い分が理解出来なかった。家で映画でも見ながらうたた寝して、起きた時に見た映像を現実と勘違いしたのだろうか？

きつとそうさ。心の中で彼はそう思った。しかし無意識の領域では違っていたらしく、彼はくるりと後輩の方へと振り返る。

後輩は、顔を青くしながら震えていた。

……老婆は『化け物』と言った。化け物というのはどんな存在かと問われれば、異常な生物と大半の人は答えるだろう。例えば体長百メートルの恐竜とか。

それは『怪獣』と何が違う？

何も違わない。怪獣マニアみたいな偏屈を除けば、怪獣と化け物に

差なんて付けないのだ。

怪獣に襲われたというメール。化け物が現れたという通報。二つを別物と考えるのは、いくらなんでも間抜けが過ぎる。

「……おばあちゃん、化け物は何処に現れたんだい？」

「そ、空だよ……空を、この近くの空を飛んで、えほっ、けほっ！」

「分かった。空だね。見てこよう。おばあちゃんは休んでいて」

老婆を椅子に座らせた彼は、後輩に老婆を任せ、自身は交番の外へと出る。次いで空と周りを見渡した。

彼が務める交番は住宅地にある。都市部といっても何処もかしこもビルが生えている訳ではなく、むしろそうした発展を遂げているのは大きな駅がある中心部だけ。郊外では一軒家やボロアパートが建ち並び、古びた道路の端には逞しい雑草がちらほら生えている。そんな町中を、この時間帯なら住人が数多く行き来しているだろう。

交番に勤めている彼は、この地域の『普段』の姿を知っていた。されど今、この場に彼の知る『普段』は何処にもない。

交番前の道では、たくさんの人が足を止めていた。誰もがざわざわと話し合い、スマホを見せ合っている。不安そうだったり、はしゃいでいたり、反応は千差万別だ。

「す、すみません。何か、あったのですか？」

困惑しながら、彼は交番近くに居た若い女性二人組に話し掛けた。女性達は一瞬警戒したように顔を強張らせたものの、制服を着ている彼が警察官と分かったのだろう。笑顔で教えてくれる。

「なんか、今空を物凄い速さで動物が飛んでいった」

「動物じゃないよ、虫だよー。日本の映画に出てくる『怪獣』みたいだったよね」

「あんた怪獣好きよねえ……なんだっけ、ゴジョラ？」

「名前微妙に違うし、あとそいつは恐竜みたいな奴だし。まあ、虫の怪獣はあの映画にも出てたけど」

女性達はわいわいと話し、彼は二人の会話で身体が強張る。

「どうやら怪獣化け物が出たというのは本当らしい。」

老婆の言葉が真実だと確信する。同時に、後輩が暮らしていた村で

も、大勢の村人と連絡不能になる『何か』が起きたのだと察した。後輩の出立が間に合わなかったのは幸か不幸か……しかしそれを考えている暇はない。

キイインツ、という飛行機の音が聞こえてきたからだ。

「あ、また来た！」

その音に反応して、若い女性の一人が空を指差しながら大声で伝えてくる。

彼は女性が指し示した、飛行機の音が聞こえてくる空を見遣った。次いで、腰が抜けなかつたのが不思議なぐらい驚く。

地上から百数十メートルほどの高さを飛んでいるのは、巨大な『蛾』だった。

大きいといっても十センチもあるという話ではない——体長は推定五十メートル。広がっている四枚の翅はどれも身体より大きく、広げた幅は縦横共に百メートルを超えているだろう。全身が濃い緑色をしていて、まるで植物のような色合いであるが、姿形は間違いなく虫だ。脚は飛ぶ上で邪魔にならないようにするためか、折り畳んで胴体に付けた状態にある。お腹が大きく膨らんでいて、卵を抱えた雌のようにも見えた。

一介の警察官に過ぎない彼は、生物学にさして明るくない。しかしそれでも、昆虫など骨のない生物があまり巨大化出来ない事は知っていた。どれぐらいが限界だとか、何故大きくなれないのかは分からないが、五十メートルという巨躯が『あり得ない』のは理解出来る。

更にもう一つあり得ない事がある。

飛行速度だ。巨大な蛾は、まるで飛行機のような猛スピードで彼の頭上を通り過ぎたのである。それも耳が痛くなるほど甲高い、飛行機とよく似た音を奏でながら。巨大な翅は殆ど動かしておらず、少なくとも羽ばたきで浮力と推進力を得ている訳ではないらしい。

何がなんだか分からない。分からないが、絶対ろくなもんじやない。万一市街地に降り立とうものなら、それだけで大きな被害が出るだろう。

市民生活を守るのが警察の仕事だ。彼はその職務を果たすべく、頭

を働かせる。まずは此処に居る人達を安全な場所に避難させよう。しかしあの巨大生物から身を守る安全な場所とは……

しばし考え込む中で、ふと交番に居る老婆について思い出す。彼女は酷く不安がっていたので、自宅まで送っていく方が良いだろう。

「すみません、今戻りました。確かに、虫の化け物が出たみたいですね」

「そ、そうだろう！ わたしや、どうしたら……」

「ご自宅までお送りしましょう。何をするにしても、家族と一緒にが良い」

「あ、ああ。そうだねえ……息子夫婦がいるし、家に帰りたいよ……」
「分かりました……すまないが、この人を自宅まで送ってくれないか。

俺は上に掛け合つて、今後の方針を確認したい」

「……分かりました」

彼が指示を出すと、後輩は少し迷いながらも受け入れた。故郷を想う後輩の不安はとて大きくなっている筈だが、それでも警察官としての仕事を優先したのだろう。

後輩は老婆の手を掴み、立ち上がった老婆と共にゆっくり交番の外に出る。息を整えた老婆の歩みは歳の割にはしっかりとったもので、あれなら無事に家まで辿り着くだろうと彼を安堵させた。

「ひっ！ ま、また出た！」

……老婆の悲鳴が聞こえたのは、それから間もなくだったが。

彼は念のため交番の外に顔を出す。すると腰を抜かしたようにへたり込む老婆と、その老婆を立ち上げらせようとする後輩……そして大空には、先の巨大な蛾が自分達の方へと来るように飛んでいた。

何度見ても大きい。飛行機のような音にも異質さを感じ、ぞわぞわとした悪寒を覚えてしまう。しかし二度目の目撃であれば、精神的ショックは一度目よりもずっと小さい。

そもそも、あの巨大な蛾はただ飛んでいるだけだ。地上に降りてきたら被害が出ると考えたが、しかし逆に言えば、降りてこなければなんの被害も出ない。精々飛行機のように五月蠅いぐらいか。警戒はすべきだが、恐れる必要はない――

まるでその考えを否定するかのようになり、巨大な蛾は『行動』を起す。

巨大な蛾は、腹から黄色い『煙』を出し始めたのだ。生物としてあまりにも奇怪な行動に、外に居た誰もが呆けたように空を見つめる。彼も思わずぼんやりと巨大な蛾を眺めてしまう。

蛾の腹から放出された煙は、薄まりながら広範囲に広がり、そして地上に落ちてくる。量は凄まじいものがあり、いくらその腹が大きく膨らんでいたとはいえ、一体何処にしまっていたのかと疑問に思うほど。彼の直感だが、このままあの蛾が煙を出し続けながら前進すれば、交番一帯は黄色い煙に飲み込まれるだろう。

煙がどんなものか、彼には分からない。しかし何か、見覚えがあるような気がした。

確か、テレビで見た。アメリカの農場で、飛行機からばら撒かれる……

「に、逃げろ!? みんな逃げろオー！」

気付けば彼は、無意識に叫んでいた。

殆どの人々はキョトンとしていた。巨大な蛾の撒き散らした煙が何か分からず、戸惑っていたのだらう。しかし逃げると、危険だと言われて、確かにそうかも知れないと思いついたに違いない。疎らに、だけど全員が煙から逃げるように走り出す。

走り出さなかったのは、腰が抜けてしまった老婆と、その老婆を立ち上げさせようとする後輩だけだった。

「おい！ 早く逃げろ！」

「は、はい！ ほら、おんぶするから諦めないで！」

彼は十数メートルと離れた後輩に、逃げるよう大声で促す。後輩は老婆をおんぶし、一緒に逃げようとした……が、空から降ってきた黄色い煙が二人を包み込む方が早い。

煙は空高くから降りる中で、随分と薄くなっていた。後輩と老婆の姿は煙に包まれてもよく見える。一足先に蛾の進路から退避していた彼の下に煙は届かず、彼は足を止めて二人の無事を確かめようとした。

しかし声を掛ける前に、後輩は倒れた。老婆も投げ出されるように地面に転がる。

続いて二人はのたうち、数秒と経たずに動かなくなった。何が起きたのか、煙から逃れた彼には分からない。されど若い後輩どころか、年離れた老婆すら釣り上げられた魚のように暴れたのだ。相当の、この世のものとは思えない苦痛があった筈である。

そして動かなくなった二人の姿から、彼は確信した。

巨大な蛾が散布していたのは、『毒ガス』だ。まるで害虫を殺すためにばら撒かれる農薬のように、人間を殺すために撒かれた有害なガス。成分は不明だが、非常に強力なものらしい。

「……クソー！」

悪態を吐き、しかし彼は後輩達の下には駆け寄らない。薄くなった煙でも、吸い込めば一瞬でああなるのだ。ガスマスクのような装備なしで突っ込んでも犬死にするだけ。

それに、町にはまだ大勢の人々が居る。『町のお巡りさん』である彼には、より多くの人々の安全を守るといふ責務があるのだ。

「みんな煙から離れろ！ 吸うな！ 吸い込んだら死ぬぞ！」

必死に訴えながら、彼は人々に煙の危険を周知する。警察官からの警告というのもあつてか、黄色い煙を前にした人々はパニック状態で逃げ出した。

彼も勿論走って煙から逃げる。それも巨大な蛾の飛ぶ方向と直角だと思われる進路を取って。市民のために身体を張るつもりではないが、むざむざ死ぬ気はない。煙を形成している粒子は軽いものなのか中々の速さで拡散しているが、今日は幸運にも無風状態。日頃から鍛えている彼ならば、走れば煙から逃げるのは難しくなかった。

遠くへ遠くへ、兎に角市民達を安全な場所へ。彼は危険を訴え続け、微力ながら人々を助けようとした。

その彼の後ろを、巨大な蛾が通り過ぎる。

彼のすぐ後ろに、また煙が降ってくる。彼よりも足の遅かった子供がばたりと倒れ、子供に駆け寄り母親がひっくり返った。老人が泡を吹き、肥えた男がのたうち回り、痩せた女性が失禁し……地獄絵図が

彼の後ろで繰り広げられる。助けたいのに助けられない事に、涙が出てきた。

悔しさの余り、彼は背後に広がる大空へと振り返る。もう何度目かも分からない、彼の後ろを横切るように飛ぶ巨大な蛾の姿を目の当たりにした。

直後、彼は大きくその目を見開き、絶望に震える。

巨大な蛾が、近い。

このままでは毒ガスに巻き込まれる……彼が気付いた事は、そんな些末なものではない。彼は逃げるため蛾の飛行方向とは直角に走っているのに、蛾との距離が縮まっていくのだ。つまり巨大な蛾は、正確には横方向に飛んでいるのではない。

円を描いているのだ。毒ガスをばら撒きながら、段々とその半径を狭めつつ。

もしも毒ガスが途切れず、延々と撒かれていたなら？ それも交番がある都市の端っこ……外側から始まっていたなら？ 考えるまでもない。毒ガスは既に都市の周りを包囲し、逃げ場などなくなっている。頑張って逃げてても都市中心に集まるしかなく、最後は真ん中に毒ガスを一振りすれば纏めてあの世行きだ。

奴は人間を一人たりとも逃がさず、全員殺すつもりらしい。

「……は、はは、はははっ！」

気付いてしまった彼は足を止め、笑った。くるりと振り返り、今まで背を向けていた空と正面から向き合う。

そして腰のホルスターにある拳銃を取り出し、空に向けて構えた。銃を使えば、あの蛾の化け物を止められるか？ 無理だと彼は考える。彼が装備している拳銃の加害射程——当たれば人間を殺傷出来る距離——は精々五十メートルしかない。仮に真下から撃つたとしても、蛾との距離は高度である百数十メートルも離れている。弾丸が届くかどうかすら怪しく、命中したところで掠り傷を負わせるのが精々だろう。ましてや飛行機染みた速さで飛んでいる相手だ。いくら巨体とはいえ、当てる事がそもそも難しい。

それでも、もしかすると風とかの影響で届いて、奇跡的に当たり所

が良くて、なんだか分からないが倒せるかも知れない。万に一つ、億に一つだとしても、可能性はゼロではない。

だから彼は、頭上を通り過ぎようとした蛾に向けて、撃てるだけ銃弾を放った。

……蛾は平然と飛んでいた。弾が当たったのかどうかすら分からない。

棒立ちする彼に、空から黄色い煙が降ってくる。息をしていた彼は、次の瞬間苦しさを覚えた。何度息を吸い込んでも、まるで酸素が入ってこない。喉を掻き雀り、足に力が入らなくなった結果ひっくり返り、数秒と経たずに意識が遠退く。

「ご、ぼ、ぼ」

やがて顔どころか全身を赤色に染め上げた彼は、掠れた断末魔と共に失神。そのまま二度と目覚める事はない。

この都市に暮らす三十万以上の人々が辿る未来を、一足早く、彼は味わう事となった。

障害

「ふんふんふーん」

海上自衛隊の制服を着込んだ若い男が、鼻歌を歌っている。片耳にはイヤホンを嵌め、音楽を聴いていた。

彼は現在、自室のベッド上で休憩中の身。自室と言っても、海上自衛隊が保有する護衛艦——世界的には駆逐艦と見做せる——の一隻『げつふう』にある船員用の部屋だが。

『げつふう』は二〇四〇年に就航した新型艦であり、現代戦を想定して様々な機能が備わっている。彼は『げつふう』の乗組員であり、即ち自衛隊員なのだが……些か不真面目な人間だった。具体的にはちよつと時間が空いたからといって、勝手に休憩を取るぐらいの。

「おい！ またサボってるな！ 作戦時刻になるぞ！ さっさと持ち場に行け！」

『休憩』を上官に見付かり、彼はやれやれとばかりにイヤホンを耳から外す。ベッドから軽やかに降り、言われた通り持ち場へと向かった。ただし命じられて行く割には、足取りは軽やかで楽しげ。

事実、彼は少しワクワクしていた。

不謹慎なのは分かっている。それを口に出したら勝手な『休憩』どころでない懲罰がある事も。廊下を歩き交う他の乗員達は表情を強張らせ、全員が真面目さを取り繕っている。これを楽しんではいけない、怒りと憎しみを燃やせと言わんばかりに。

されど彼は思うのだ。もつと正直に生きようぜ、みんな本当はワクワクしてるんだろう？ 大体肩の力を抜かなきゃ勝てるもんも勝てないし、使命に燃えたって負ける時は負けるのさ。

だから彼はニヤリと笑みを浮かべる。

自衛隊員となったからには、怪獣との対決なんて夢そのものの筈なのだから——

艦長と副官、操縦士、通信士……他にも様々な仲間達が集まった操舵室。正面に甲板が見渡せる大きな窓ガラスのある一室にて、彼も席

の一つに腰を下ろした状態で居た。彼は手を組んで指の柔軟体操をし、恋人からもらった小さな花の鉢植えが邪魔にならないよう目のモニターの前から退かしてから、此度の作戦を頭の中で復唱する。

インドネシアに『怪獣』が出現した。

怪獣といったが、自衛隊、或いは日本政府が用いる正式名称は異なる。正しくは『超巨大昆虫型生物一型』だ。一型と名付けたのは二型や三型が現れる可能性を考慮したからであり、現れるという確信がある訳ではない……等々彼的には七面倒な想定があつたらしい。尤も日本国民の大半は、国が付けた名前を使わないのだが。

何しろその生物は全長五十二メートル、翼長百三十三メートル、推定体重三千トンという巨躯の持ち主なのだから。こんな非常識な存在を、超巨大なたらかんたらと呼ぶ者はいない。怪獣という表現こそが、最もその存在の異質さを伝えるだろう。

インドネシアではこの怪獣が、三十万人以上の市民が暮らしている都市を四つ、僅か三時間のうちに襲撃した。都市の外側からぐるぐると回り、包囲するように毒ガスを散布。単純ながら効果的な行動により、都市の人間達は殆ど逃げられず……怪獣による犠牲者は百万人を超えると思われる。

人類史に残る大量虐殺を僅か数時間で成し遂げた怪獣は、大海原に向けて飛翔。飛行機のような速さで渡海を始めた。

そして次の目的地として定めたかのように、日本へと真っ直ぐ進んでいる。

インドネシア政府より情報連携を受けた日本政府は、この怪獣の上陸は日本国民の生命と財産に危険をもたらすと判断。また警察や猟友会の手にも負えるものではないと考えられる事から、直ちに海上自衛隊と航空自衛隊に出動要請を出した。一昔前の日本なら一悶着あつたかも知れないが、今の日本人はかつてより自衛隊への好感が強い。他国で暴虐を尽くした怪獣の退治に反対する国民は殆ど居らず、ごく少数の野党以外の賛成を得られた事もスムーズな作戦進行の一因だろう。

海上自衛隊と航空自衛隊は共に出撃し、日本近海で怪獣を迎え撃

つ。これが大まかな作戦だ。『げつふう』はこの作戦に参加する一隻。『げつふう』以外には七隻の護衛艦が出撃しており、航空自衛隊の戦闘機も数十機出撃する。陸上自衛隊も、万一に備えて海岸線に戦力を集結させていた。

百万の人命を奪った虐殺者に容赦など必要ない。とはいえ此度の相手は生物。少々過剰な戦力のようにも思えてくる。

そう、本来なら過剰だが……

「レーダーに反応！ 南南西距離約二万五千に飛行物体あり！ 目標の全長は推定五十メートル！ 時速九百キロで当艦に向けて飛行中！」

僅かに彼の意識が逸れた時、一人の乗組員が大声を上げた。レーダー担当、つまり四六時中レーダーを見張っている隊員が『何か』を発見したようである。

その『何か』は当然、怪獣でないと困るのだが。

「(ついにおいでなすった)」

彼は自身の座席にある器機を操作し、モニターを起動。『げつふう』正面の映像から、南南西に現れた物体を確認する。

映像を拡大すれば、その姿はハッキリと見えた。大きな翅を広げた、巨大な蛾……何処からともなく突然現れた二体目でない限り、コイツこそがインドネシアに惨劇をもたらした怪獣だと彼は確信した。

「照準、用意」

艦長からの『指示』を受け、彼はモニターの傍にある桿……照準器を握り締める。相手の動きをよく見て、未来の軌道を彼は頭の中で思い描く。

怪獣は人間達の事など気付いていないのか、或いは気にも留めていないのか。悠々と飛び続け、『げつふう』との距離を詰めてきた。

「攻撃開始」

そして怪獣が射程距離に入った瞬間、艦長からの命令が出た。照準は既に合っている。彼は引き金を引いた。

『げつふう』の装備は対艦戦闘を想定している。

現代の対艦戦闘は、ほんの二十数年前のものから大きく様変わりし

た。それまで戦場の主役だったミサイル兵器が急速に衰退を迎えたからだ。

原因は高出力光学兵器、つまりレーザーの発展にある。光速で飛んでいき、また空気抵抗などで『曲がる』事のないレーザーは、音速で飛ぶミサイルを容易く迎撃した。おまけに一発数千ドルのミサイルを破壊するのに僅か数ドル程度の電力で十分。機銃のように連射する事も可能だ。相性・コスト共に、ミサイルにとって最悪の迎撃システムが登場したのである。

無論ミサイルを使用する側も対抗しようとしたが、必ず命中する攻撃をやり過ぎすには、装甲を厚くするしかない。空を飛ぶため軽量化を重ね、中に出来るだけたくさん爆薬と燃料を積み込まねばならないミサイルにとって、それは相反する性質だ。かつては『ミサイル万能論』などが語られたものだが……今でもそれなりに有効だが、考えなしに使って勝てる時代は終わった。

現在艦隊戦における主武装は、レーザーの『低出力』では撃墜不可能な巨大質量攻撃——艦砲となっている。『げつふう』の主砲は二十七センチ砲だ。

第二次大戦時に開発されたものと比べて、砲の性能は格段に向上している。衛星通信や友軍艦との情報連携により、有効射程は二百キロを超えた。特殊な溝を刻む事で貫通力を増し、一メートル近い厚さの装甲も貫通可能だ。

唯一の欠点は放物線運動な上に誘導性能がなく、何より『遅い』ため、命中率が射手の技量に大きく左右されるところ。コンピュータによる補助があるため素人でもそこそこの命中率は出せるが、それでも人間の力が必要になる事も多々ある。相手が素早ければ素早いほど、人間の勘が頼りだ。

故に照準器を握り締める彼は、この船の船員に選ばれた。確かに彼は不真面目だ。不真面目だが、それに目を瞑らざるを得ないほどの特技がある。

艦砲射撃の名手なのだ。遙か二百キロ彼方を飛行機並みの速さで飛ぶ物体にも当てられる、非常識で出鱈目な。

彼が撃った砲弾は寸分の狂いなく空を駆け抜け、飛行する怪獣の頭部に一発目から命中した。画面でそれを確認した彼は命中報告を行い、操舵室内の自衛官達が感嘆とも呆れとも取れる息を漏らす。

砲撃するのは彼が乗る『げつふう』だけではない。共に参戦している七隻の艦船も砲撃を始め、無数の砲弾が飛んでいく。超人的射手である彼のような百発百中は無理でも、最新鋭電子機器による補助を受けた砲撃の精度はスナイパーのよう。八割以上の砲弾が命中し、爆炎が怪獣の全身を包み込む。

現代の艦砲は一発当たれば巡洋艦でも大ダメージ、五発も当てれば沈められるのが一般的だ。第二次大戦の戦艦を引っ張ってこようと、砲弾が進化しているため左程耐久力の違いは出ないだろう。

そんな砲弾を百発近く受ければ、耐えるどころか跡形も残らないのが普通である。

——怪獣が『普通』の存在と思う奴は、日本人にはいないだろうが。

「……当艦の攻撃は全弾命中。目標に未だ損傷なし」

彼は画面から確認出来た事実を、淡々と艦長に報告した。

そう、損傷なし。

『げつふう』だけで十六発の艦砲が命中、友軍艦七隻が放ったものを命中八割と計算して八十九発命中とすれば、合計百五発。これだけの艦砲射撃を浴びながら、怪獣は死なないどころか傷一つ付いていなかったのである。フィクションの怪獣と思えば当たり前の展開だが、現実の生物でこんな事があり得る筈がない。分厚い金属装甲すら易々とぶち抜く砲弾を弾き返すなんて、一体あの怪獣の身体はどんな材質で出来ているというのか。

もしもこの光景を事前情報なしで目の当たりにしたなら、現場は混乱に包まれた筈だ。しかし彼を含めこの場を集った自衛隊員達にとつては、勿論望んではいなかったが、想定内の出来事である。

インドネシア軍とおめおめと怪獣を逃がした訳ではない。自国民の危機を見逃さず、直ちに攻勢に出た。日本と比べれば規模も技術も未熟ではあるが、士気と練度は負けていない。生半可なゲリラや軍

隊ならば一瞬で撃退出来ただろう。

しかし怪獣はどんな銃撃も砲撃も通じず。相手にするのも面倒だとばかりに、反撃すらされる事なく領海外まで飛んでいってしまった。

むぎむぎ逃げられたと、恥を忍んでインドネシア軍は自衛隊に教えにくれた。これまで友好的に接してきた国同士の関係が実を結んだのか、形振り構っていられないほど危険な存在だからか——彼は後者だと思った。

ともあれ予想通りであるが故に砲撃は躊躇いなく続けられ、距離が狭まるほど命中率は上がっていく。『げつふう』の砲撃能力は高く、十秒で十六門一斉射が可能だ。友軍艦も似たようなもので、数分と撃ち続ければ砲撃数はあつという間に一千を超える。

しかしこれだけの猛攻を受けても、やはり怪獣はビクともせず。悠々と飛行し続けていた。人類側の航空機はたった百キロワットのレーザーすら耐えられず、撃ち落とされるというのに。

艦砲ではいくらやってもダメだろう。悔しいがもつと強力な攻撃が必要だ……そう考え始めた彼の見つめるモニターに、新たな飛行物体が十ほど映った。

ただし敵ではなく、航空自衛隊の戦闘機だ。凄まじい速さで怪獣に接近していく彼等は、不意に白く伸びる白煙を飛ばす。

撃ち出したのはミサイル。

レーザーにより無敵でなくなったミサイルだが、しかし価値がなくなった訳ではない。高い誘導性、地球の裏まで飛んでいく射程、そして何より圧倒的な破壊力は今でも他にはない強味である。二〇四五年現在でも大型軍事拠点への攻撃にはミサイルが用いられているし、ほぼ一撃で巡洋艦を仕留められる事から対艦ミサイルも現役で活躍。撃ち落とされる心配さえなければ、やはり圧倒的に『強い』兵器なのだ。

戦闘機達が撃ち出したのは、対艦ミサイルだろう。単純な比較は出来ないものの、一撃で巡洋艦を沈められるという点で考えれば、艦砲の五倍近い破壊力がある代物である。

艦砲射撃すら躲せない怪獣は、対艦ミサイルの雨を全身で浴びた。するとこれまで悠々と飛んでいた身体を、大きく仰け反らせたではないか。

「ペキ、ギギイイイイギイイイイイ！」

次いで聞こえてくる、巨木がへし折れるような雄叫び。

これが痛みで苦しむ声だとすれば、それは怪獣がミサイルでダメージを受けている証だった。

「砲手、目標の状態を確認しろ」

「了解」

艦長から指示を受け、彼はモニターに映る怪獣の姿を注意深く観察。怪獣は爆炎の中からのたうつように飛び出し、怒りを示すように全身を震わせていた。

身体に傷はなく、ミサイルでも殆どダメージは与えられていない様子である。どうやら先の叫びは悲鳴ではなく、怒りの咆哮らしい。しかし怒るといふ事は、傷は付かずともそれなりには痛かった筈だ。これは明白な『戦果』と言える。

「超巨大昆虫型生物一型に損傷なし。ですが戦闘機に反応を示しました」

「ミサイルならギリギリ通じるのか……」

彼が報告すると艦長はぽつりと呟き、されど攻撃を艦砲射撃からミサイルには切り替えるような指示は出さない。怪獣が見せたのはあくまで痛がっているような素振りだけ。本当に痛いのかは、まだ分からないのだ。

しかし少なくとも怒っているのは間違いない。でなければ六本の脚を大きく広げながら、戦闘機の編隊を追い駆けようとはしない筈だ。

怪獣は飛行機のような速さで、戦闘機達を追跡。物理的に叩き潰すつもりか、巨大な前脚二本を掲げた……が、しばらくすると苛立つように前脚を暴れさせる。

戦闘機と怪獣の距離は段々と広がっていく。戦闘機達の方が遙かに速かったのだ。

戦闘機は悠々と旋回し、安全な距離を取った上でミサイルを撃ち込む。怪獣の胸にミサイルが当たり、その体勢が崩れた。怪獣は怒り狂うように脚を振り回すが、全く届かない。届くような距離まで、戦闘機達は怪獣に近付かなかった。

確かに怪獣の飛行速度は飛行機並みだが、たったの時速九百キロ程度しかない。勿論普通の生物から見れば驚異的な速さであるが……航空機として見た場合、それはプロペラ機の最高速度にすら劣るもの。ジェットエンジンを搭載した現代の戦闘機ならば、その二・五倍の速さが標準的だ。航空自衛隊の最新鋭機に追い付こうなど、夢のまた夢である。

相変わらず怪獣に傷は見られないため、ミサイルが有効とは言いきれない。しかし体勢を崩す程度には通じているのだ。恐らく怪獣は何かしらの『インチキ』によりダメージを防いでいるが、攻撃を続ければやがてインチキを破る事も出来るだろう。そして戦闘機相手にわざわざ追い駆け、腕を振り回すばかりなのだから、あの怪獣にレーザーなどの対空攻撃は出来ないと思われる。

彼は戦闘機達の活躍を照準越しに見て、そのように感じた。自分が怪獣を仕留められないのは悔しいが、怪獣と交戦するという『遊び』は十分堪能したのだ。如何に彼が不真面目でも、人の生命を脅かす化物が死ぬのなら止めが自分でない事は構わない。

——彼は勝利を確信していた。

否、彼だけではない。船内でこの戦闘を見ていた誰もが、戦闘機達が勝利すると考えていただろう。僅かに弛んだ口許、力が抜ける肩、解すように踊る指先……決して油断とは言えないが、誰もがほんの少し気を弛めていた。悪いものではないが、否定出来ない事実でもある。誰一人として知らなかったのだから、致し方ない。

自分達が怪獣と呼んでいる生物が、本当に『怪獣』たり得る存在である事を。

「……なんだ……？」

最初に異変を察知したのは、照準越しではあるが生身の怪獣を見ていた彼だった。

怪獣が、不意にその動きを止めたのである。つい先程まで散々戦闘機を追い回していたのに、脚を振り回すどころか、時速九百キロで飛ぶ事すら止めてその場で浮いている状態だ。翅を羽ばたかせる事もなく浮遊する姿は奇妙であるが、それ以上に『動かない』事が不気味であると彼は感じる。

度重なるミサイル攻撃で、ついに飛び回るだけの力がなくなったのか？ そう思いたいのは山々だが、彼の頭は現実を直視した。怪獣には未だ傷など一つも付いていない。

何より昆虫から発せられる闘志に陰りは見えない。

無論闘志なんて非科学的なものは、数値的に表れはしない。それでも訓練などで様々な相手と戦っていると、ひしひしと感じられるものがあるのだ。彼はそのような闘志を感じ、弛みかけた気を引き締める。奴は何かやってくるつもりだと覚悟した。

だけど。

飛んでいた戦闘機の一機が突然バラバラになるところを目にしたら、覚悟なんて吹っ飛んでしまったが。

「……は？」

「どうした、何があった！」

「ほ、本部より伝令！ 戦闘機一機が墜落！ 原因不明！」

「原因不明とはどういう事だ!! 詳細に報告しろ！」

「本部からの通信にはこれ以上、あつ！」

艦内で慌ただしく情報がやり取りされる中、通信士が不意に声を引き攣らせる。通信士が見ているのは操舵室正面にある窓ガラス。艦長含めた多くの人員がその視線を追い、通信士と同じく言葉を失う。

雨のように、何かが『げつふう』のすぐ近くに降り注いでいる。

だが雨粒ではない。雨粒は直径数十センチもないし、色も銀や黒なんかではないし……一緒に生身の人間が落ちてくる筈がない。

雨の正体は、戦闘機だった。また一機、バラバラに砕け散りながら落ちている。部品も人も海に落ち、『げつふう』に直接的な被害は恐らく出ていない。が、すぐにでも損傷を確かめ、墜落したパイロットの救助に向かうのが合理的選択の筈だ。

ところが艦内の誰もが、なんの行動も起こさない。艦長すら喘ぐように口を開閉させるだけで、言葉が出ない有り様。戦闘機が突然砕け散るといふ、非現実的な光景を突き付けられて全員が呆けていた。

例外はこれが二度目の目撃である、砲手の彼だけ。

二度目だから、今度はよく観察出来た。戦闘機は確かにバラバラになっっているが、燃えている様子はない。怪獣もじつとしているだけで、レーザーや火の玉などは出していない筈だ。直接的な攻撃が加えられたとは思えない。

なら、整備不良などで機体強度が弱くなっており、激しい空中戦に耐えられなかったのだろうか？ あり得ない、とは言いきれない。高品質が謳い文句の日本の自衛隊だって、人間がやる以上ミスや不法は起こり得るのだ……二機立て続けに、という可能性は、限りなくゼロに等しいが。

ましてや三機目、四機目と落ちていけば、偶然と考えるのは最早ただの現実逃避。

怪獣が何かしていると考えの方が遥かに自然であり、尚且つ勝ち筋を探るにはそれしかなかった。

「艦長！ 航空機部隊が次々と落とされています！ 当艦もミサイルによる援護を行いましよう！」

「あ、ああ……許可する！ 総員、ミサイル攻撃態勢に入れ！」

堪らず彼がミサイル攻撃を進言し、我に返った艦長がそれを認めた。ミサイル攻撃の許可は、此度の作戦開始の段階で既に政府から出ている。運用に問題はない。

三十秒で用意が終わり、発射準備完了のアイコンが彼の見るモニターに表示された。ミサイル攻撃はお手軽だ。ターゲットをロックして、ボタンを押せば良い。彼はアイコン表示から十秒と経たずに、発射ボタンを押した

瞬間、鼓膜が破れそうな大爆音と共に『げつふう』を激しい衝撃が襲った。

「うわああああ!?!」

「な、なんだ?! 何が起きた!?!」

「か、確認します！ ……嘘、だろオイ畜生っ！ ミサイル格納庫から爆発です！ ミサイルが爆発した模様！」

「なっ……!?!」

艦隊のモニタリングを行っていた船員が、悪態の後に声を荒らげながら報告。艦長は勿論、ミサイル発射を行った彼も啞然となる。

ミサイルが格納庫で爆発したからには、当然『げつふう』には大きなダメージが入っただろう。ミサイル格納庫は砲撃などで貫通・誘爆が起きないよう、分厚い装甲で守られている場所の一つだが……ミサイルが一機でも内側で爆発すれば、そんな装甲は簡単に吹き飛ばす。ミサイルの破壊力とはそういうものだ。

そしてミサイル格納庫にあるミサイルは、一基だけではない。爆発事故が起きれば誘爆は確定的だ。恐らく格納庫は付近に居た整備士諸共吹き飛び、『げつふう』には大きな傷跡が出来ただろう。まず間違はなく、このまま沈没する。

まさか『げつふう』と自分の最後が自爆だなんて……ミサイルの整備不良に、彼は大きく項垂れた。

彼が顔を上げたのは、遠くから別の爆発音が聞こえてから。

「な、なんだ、今の爆発は……」

「……『ごち』から通信。ミサイル格納庫で爆発あり」

「……は？」

そして恐怖を知るのは、間もなくの事だった。

船の外から幾つもの爆発音が聞こえてくる。どーん、どーんと続くそれは、船員達を恐怖と絶望に突き落とす。

次々と船が自爆している。

あり得ない。どんなに雑なミサイル整備をしても、こんな立て続けに自爆が起きるなんてあり得ない。おかしい。異常だ。異常だから特別な原因がある。

この戦場で、異常の原因となり得るのは――

『事実』に気付き始めた彼だったが、それを言葉に出す事は叶わなかった。操舵室内で突然爆発が起きたからだ。ミサイル事故の火が砲弾の火薬にも移り、爆発。操舵室を襲ったのである。

彼は爆発から離れていたもので、大怪我を負いつつも一命は取り留めた。しかし艦長は跡形もなく吹き飛び、副官は部屋の隅で肉塊と化している。他の船員も、形が残っている方が少ない。

動けるのは自分だけだと、彼は理解した。その動ける時間も、あまり残されていない。燃料タンクに引火したら、いよいよ『げつふう』は爆沈だ。

この時間ですべきは、逃げる事ではない。

「……遺言とか、俺のキャラじゃねえなあ」

悪態を吐きつつ、通信士の下へと這いずりながら寄る。動かなくなった仲間を彼は無造作に動かし、自分の担当ではない、けれども扱い方ぐらゐは知っている通信機を手にした。通信機は今のような致命的事態を想定し、独立した電力でも動いている。ざっと調べた限り器機はまだ生きていて、通信は行える筈だった。

なのに、通信機の向こうから聞こえてくるのはざあさあというノイズばかり。ひっきりなしに飛んでくる筈の指示・現状確認の声が何も聞こえてこない。

「……ああ、分かったぜ。ようやく、種が……畜生が」

ぼつりと漏らす、悪態。

連鎖する爆発により、『げつふう』が粉微塵に吹き飛んだのは直後の出来事。七隻の仲間達と全ての戦闘機が海の藻屑と化したのは、そこからほんの少しだけ後。

そして無傷の怪獣が悠々と日本を目指し始めたのは、交戦開始から僅か二十五分後だった。

援護

「自衛隊が負けちゃったから、遠くに逃げないといけないの……良いわね？」

母から宥めるように伝えられ、彼女は無言のままこくりと頷いた。彼女は小学一年生の女の子。まだまだ幼いとはいえ、世の中の事をそれなりには知っている年頃だ。例えば今日何処か南の国に現れた『怪獣』が、その南の国でたくさんの人を殺し、日本に向かっている事も知っている。自衛隊がそれを食い止めようとしていると――「だけでももしかしたら避難しないといけなくなるかも知れないから、家の人が心配しないよう寄り道せず真っ直ぐお家に帰りましょう」という小言付きで――学校でも先生が話していた。

そして家に帰ってからしばらく経った頃、自衛隊が怪獣に負けたとテレビのニュースで報道された。好きなアニメが中断された怒りでそのままニュースを見たところ、アナウンサーの人が海沿いにあるこの町は怪獣が日本で最初に上陸する場所で、すぐに逃げないと危険であると言った。

そしてこのニュースを共に見ていた母は荷物なんてろくに持たず、すぐに彼女の下にやってきて、遠くに避難しようと言ってきた……というのがつい先程の出来事だ。

母は酷く動揺している様子で、わたしを宥める事で自分も落ち着かせようとしているのだと彼女は感じた。テレビの人達も、自衛隊が負けた事を話す時に酷くそわそわしていたと彼女は感じている。

何故大人達はこんなにも動揺しているのだろうか。まるで自衛隊が怪獣をやっつけてくれると信じていたみたいだ。アニメや映画だと、自衛隊は何時も怪獣にやられているのに。

「大丈夫、安全なところへすぐ避難するからね」と語る母は、目に涙を浮かべていた。彼女は泣かなかった。怪獣が日本に向かっていてと聞いた時から、きつと自分は殺されるのだと思っていたから。痛いのは嫌だけど、毒ガスですぐに死ぬのなら多分そんなに痛くはないだろう。やりたい事はまだまだいっぱいあったが、ママと一緒に天国へ

と行けるなら問題ない。仕事に行っているパパも、多分そのうち天国に来る筈。

それよりも本物の怪物を見てみたいわ、なんて思っていたり。

「さ、出発よ。道が混雑してるだろうから、車じゃなくて歩きでね」
「ん。分かった」

だけど無事逃げきれぬなら勿論それで構わないので、彼女は母に言われるがまま、帰ってきたばかりの家から出た。

鮮やかな夕日に染まり始めた自宅の外は、酷く騒がしかった。怒鳴り声や泣き声があちこちから聞こえ、ガシヤンという何かが壊れるような音もしょっちゅう耳に届く。道路では大人達が駆け足で前へ前へと向かっていて、道が埋め尽くされていた。全員戸惑い、我先に逃げようとしている。

死ぬのは怖くないが、独りぼっちは怖い。もしも離れ離れで死んでしまったら、一緒に天国に行けなくなってしまうかも知れない。彼女は何があっても離さないよう、母の手を両手でぎゅっと掴んだ。母も彼女の手を強く握り締め、二人は一緒に自宅である一軒家の敷地から出た。

道路は人でごった返し、思うように前には進めない。どうにか人の流れに押し入る事は出来たが、彼女の身体には潰れそうな圧迫感が加わった。母は苛立つように唇を噛み締め、身体がそわそわと震えている。周りの大人達も同じで、「何してんだ!」とか、「早く前に行けよ!」と叫んでいた。殴り合う音が近くで聞こえてきて、怪物よりもこっちの方が怖いと彼女は感じる。

それにしても人が多い。道の全てが埋め尽くされ、子供故に背が低い彼女の視界を大人達の背中が塞ぐ。この道は通学路でもあるため彼女もよく通るが、何時もなら目の前に見える山が全く見えない有り様だ。尤も杉林など眺めても、あまり楽しくないが。

「おい、ちんたら歩いてるんじゃないよ!」
「ぎゃつ!」

ぼんやり考えながら歩いていたら、背後から罵声と、突き飛ばすような衝撃を感じた。彼女が振り返ると、怖い顔をした老人が睨み付け

ている。

どうやらこの老人に蹴飛ばされたらしい。ちんたら歩くなと言うけれど、前が詰まっているのにどうすれば良いのか。彼女には分からず、ぽかんとしてしまう。

「ちよつと！　うちの子に何するのよ！」

対して母は、老人に向けて吼えるように怒りをぶつけた。

ぎゃあぎゃああと二人は怒鳴り合う、老人が掴み掛かり、母も掴み掛かり、周りの人も掴み掛かり……なんだか大変な事になってきた。だけど彼女に大人達の争いを止めるだけの力なんてない。大人達の矛先が自分に向かないよう、母の背中に隠れるだけで精いっぱいだ。

騒ぎに驚いたのか、赤ん坊の泣き声が離れた場所から聞こえてくる。すると同じぐらい離れた位置から罵声が響き、悲鳴と叫びも上がった。人混みは全然前に進まないのに、動きはどんどん激しくなっていく。こんなケンカをしても仕方ないと彼女は思うが、それを口に出せば怒られるような気がして何も言えない。痛くない毒ガスは怖くないが、痛くて堪らないケンカは嫌だ。もう何も見たくないと思えば、彼女は母の背中に顔を埋める。

「ひい!?　か、か、怪物が来たぞ！」

大人達のケンカが治まったのは、誰かがそんな大声を上げてからだった。

先程まで罵声と悲鳴を上げていた口を誰もが閉じ、一瞬にして静寂が広がる。尤も静寂が続いた時間も同じぐらい一瞬。殆ど間を置かずに全員が後ろを振り返り、間もなく誰かが悲鳴を上げるや、一斉に前へと走り始めた。

人々は最早後ろで待つなんてせず、前の人間を突き飛ばしてでも進もうとする。罵声や殴り合いがお行儀良く見えてくる有り様だ。突き飛ばされた老人が倒れたが誰も助けず、それどころか踏み付けていく。老人の呻きは、すぐに聞こえなくなった。

「ふんっ！」

彼女の母も、ちんたら子供の手を引いて歩くつもりはないらしい。彼女を抱きかかえると、猛然と駆け出した。彼女の母は元スポーツ選

手であり、一般的な女性どころか男性と比べても力は勝る。老人や若者を押し退けながら前へと進む事が出来た。

彼女は母にしがみつきつつ、高くなった視界で辺りを見回した。周りの大人達は全員恐怖で顔を引き攣らせている。目に涙を浮かべている人も少なくない。大人が子供のようには恐怖に慄く姿は、彼女にはちよつと新鮮な光景に思えた。

そして自分達の後方に、大人達を震え上がらせる存在が飛んでいる。

背中側に広がる空にぽつんと緑の物体が浮かんでいた。視力一・二の彼女でもよく見えないくらい遠いが、大きな翅が四枚あり、飛行機のような速さで飛んでいるのは分かる。高度は、百メートルぐらいだろうか。以外と低い位置を飛ぶのだなと彼女は思った。

あれが噂の怪獣なのだろう。本当にそうなのかは分からないが、大人達が逃げ出すからにはきつとそうなのだ。

怪獣は毒ガスで人を殺すと、学校の先生は言っていた。その毒ガスは黄色をしているらしい。じいっと見てみたが、怪獣の身体から黄色いものは出ていない様子。なら、まだ毒ガス攻撃はしていないのだろう。

思い返すと、怪獣好きなクラスメートの男子が話していたが、怪獣は毒ガスを撒く前に町をぐるぐると周回していたらしい。曰く、たくさんの人を殺すために良い場所を探していたのではないかとか。その男子はスマホを持っていて、ネットで調べた情報との事だ。もしこの話が本当なら、怪獣がこの町で毒ガスを撒き始めるのは町の上空を何周かした後の筈。殺戮が始まるのはもう少し後である。

母も周りの人も凄く速さで前に進んでいる。ケンカをしなければこんなにもスムーズに進めるのに、大人も案外バカなのねと彼女は思った。今の調子で走り続ければ、町の外へと出るのに三十分も掛かるまい。案外このまま町の外へと出られるのではないか……

そう思い始めた、刹那の事だ。

「だ、駄目だあ！ この先に毒ガスが来てるぞ！」

誰かがそう叫んだのは。

走り回る集団が足を止めたのは、それから数秒ほど後の事。悲鳴とどよめきが始まったのは、足を止めて間もなくの事だった。

母に抱きかかえられている彼女にも、『毒ガス』の姿は見えた。自分達が目指す先……その正面に位置する山から、朦々と黄色い煙が舞い上がっているのだ。煙の範囲はゆっくりとだが拡大していき、少しずつ麓、もつと言うなら自分達の方へ流れようとしている。煙の色は濃く、如何にも毒々しい。

「嘘だろ……なんでこっちからも毒ガスが!？」

「と、兎に角逃げろ! こっちは駄目だ! 押すな! あっちに行かせろ!」

怪獣が出す毒ガスは黄色。その情報はテレビやネットなどで広まっております、誰もがそれを知っていた。黄色い煙を見た人々はパニックに陥り、来た道を慌てて引き返す。今まで押し退けてきた人達を、また押し退けて後退していた。押し退けられた人達は怪訝としていたが、黄色い煙を目の当たりにすれば事情を察し、同じく身を翻す。彼女の母も同じだ。いや、誰よりも必死かも知れない。

「ママ。ねえ、ママ」

「大丈夫! 大丈夫だから!」

彼女が呼び掛けても、母は壊れた機械のように同じ言葉を繰り返すばかり。普通の女性と比べて屈強な身体は、どんどん周りの人を押し退けた。

親の心子知らずということわざがある。だけど今の彼女は、母の気持ちがよく分かった。きつととても怖いのだ。あの毒ガスに飲み込まれたら、みんなバタバタ死んでしまうと不安なのだろう。

彼女は教えてあげたかった。そんな心配なんてしなくて良いんだよ、と。

だけど母は耳を貸してくれず。必死だからそれも仕方ないなと思つて、彼女は口を閉ざすしかない。それに大人達がみんな毒ガスだと言うのだから、きつと自分の勘違いなのだろうとも思った。

黙った彼女を抱えたまま走り続ける母。だけど来た道には怪獣が飛んでいて、何処に逃げれば良いのか分からない。周りの人も同じよ

うで、今まで一方向に逃げていた人混みはばらばらと散っていく。母の走りを邪魔する者はいなくて、母の足はどんどん加速していた。やがて母は足を止めた。

空に浮かんでいる怪獣が、お腹の辺りから黄色い煙を出し始めたからだ。彼女と母の居る場所からはずっと離れていたが、怪獣は飛行機のような速さで飛んでいる。彼女達が町の外へと出るよりも、怪獣がぐるりと町を一周する方がずっと早いだろう。

「ああ……ごめんなさい、ごめんなさい……」

母は膝を付き、泣きながら彼女の頭を撫でる。母は逃げるのを諦めてしまったようだ。周りには自分達以外にも何人かの大人や子供が居て、母と同じく泣いていた。

彼女も、今更あの怪獣から逃げられるとは思えない。だけど最初から駄目だと思っていた彼女は、あまり気にしていなかった。

それより、ここだめめそめる方が勿体ない。

「気にしないで、ママ。ねえ、わたしケーキ食べたいの。冷蔵庫にあったやつ。全部食べていい？」

死ぬ前にしたい事を母親に伝える。母は泣きながら、にこりと笑った。彼女の手を掴み、とぼとぼと歩く。他の人達も立ち上がり、のろのろとした足取りで各々歩き出した。きつとみんな家に帰るのだろうと彼女は感じた。

この歩く速さじゃ、家に着く前に怪獣の毒ガスに巻き込まれてしまいかも。そう思う彼女だが、しかし母と一緒にだから問題ない。パパと一緒になら最高なのには思うけど、夕飯の時のように天国で待てば良いだけ。

それに怖い大人に囲まれるのはもう嫌だ。家でママと一緒に遊びたい。

空に撒き散らされる毒ガスと、山からやってくる黄色い煙に挟まれて、彼女はうきうきした足取りで家路に着くのだった。

奪還

怪獣は神の裁きだ、という声が上がった。

その声はネット上の、自称アメリカ在住の誰かさんから。その誰かさん曰く、人類の自然破壊は神への反逆うんたらかんたら、聖書の記述がどうたらこうたら、近年の異常気象はなんたらかんたら、異教が蔓延しているインドネシアと不信心な日本があたらどうたら……

要約すると、「怪獣がどれだけ暴れ回ろうとも敬虔なキリスト教徒である自分達は助かる」というもの。

「なんだ、何時もの勧誘じゃねえか」

ツッコミどころ満載な論調に、彼は思わず独りごちた。

彼は五十代の社会人。今は休憩時間を迎え、現場の同僚と共に休憩室で過ごしていた。休憩室と言ってもテレビも雑誌もなく、精々小さな観葉植物の鉢植えがあるだけ。暇潰しは自分で用意する必要があり、彼にとつてそれはスマホでのネット巡りだった。今日は昼頃から話題になっている『怪獣』について情報を集めており、その結果先の話に辿り着いたのである。

「お。なんか面白いネタでもあったかい？」

彼の独り言を聞いた同僚が、興味津々で尋ねてくる。彼はスマホを弄りつつ、同僚の問いに答えた。

「おう。熱心なキリスト教徒様によると、日本に来たあの怪獣は、自然破壊をする人類に神が裁きとして遣わしたものらしい」

「へえ。神様云々は兎も角、自然破壊が怪獣出現の理由というのはお約束だね」

「だから敬虔なキリスト教徒は助かるそうだ」

「成程。二十世紀にキリスト教徒達が世界中の大型動物を絶滅させたのはノーカンという事か。神様は身内には心が広い訳だね」

同僚は皮肉めいた言い方をしながら、ネット上の誰かを馬鹿にする。彼もげらげらと笑って、その意見に同意した。

「はははっ！　これが本当に神様の裁きなら、此処で働いている俺等の身も安泰だろうな」

「あはは。確かにね。怪獣が僕達を殺したら、他ならぬ神様の手で環境破壊を推進する訳だし」

それから彼がジョークを言えば、今度は同僚が笑う。

「実際問題、あの怪獣はどんな理由で誕生したんだろうね。本当に環境破壊が原因なのかな」

「それはないだろ。環境破壊なんて、今は回復傾向にあるじゃないか。特に地球温暖化はな」

「そうだよねえ。自然の裁きとやらは、今の状況も見えていないのかな?」

「所詮畜生だ。出たい時に出るんだろうさ」

つらつらと無駄話をしながら、彼はスマホの時間をチラリと見る。

まだ休み時間だが、もう少ししたら終わる頃。彼と同僚はこの職場ではそこそこの地位のある身だ。少し早めに戻り、時間ピッタリで仕事を始めるところを部下に示さねばならない。

「さて、そろそろ休憩時間も終わりだし、神様に怒られないよう仕事をするかね」

「そうだね」

彼は机の上に置いていたヘルメットを被り、着ていた作業着の乱れを整える。同僚も同じくヘルメットを被り、二人して休憩室から出た。部屋の外にある殺風景な廊下を渡り、突き当たりにある扉を開ければ――

そこは大勢の人々が椅子に座りながら大きな機器と向き合い、備え付けられたキーボードやコンソールを用いて作業している部屋だった。

部屋は大きく、三十人ほどの作業員と、その作業員の操作している機械があっても広々としているように感じられる。作業員は誰もが分厚い作業着を着て、ヘルメットを被っていた。作業員達の見ている器機は主にメーターや温度、気圧などが表示されている。

作業員達はキーボードを打ったり、マイクで何処かと連絡を取り合うばかり。その姿は技術者というより、事務員のようなものだ。実際上から物が落ちてくるような環境ではないし、大概の事は機械の操作で終わ

るため肉體作業もなく、此処にいる人員はほぼ事務職のようなもの。だからスーツ姿で仕事をしても効率や安全上の問題はないのだが、しかし此処は所謂土木系の現場であり、ならばヘルメットと作業服は『作業員』としての制服のようなものだろう……と此処の一作業員にして現場監督である彼は思っている。

部屋の奥には横幅二十メートルはあろうかというガラス窓があり、窓の先に広がるのは、土を削って作られた何百メートルにも渡る空洞だ。空洞には五十メートルもある四角い機械が一台とその機械につながる巨大パイプ数十本が通り、ヘルメットを被った職員が行き来していた。この部屋で行うのは主に管理業務で、実務はあちらの空洞側である。

穴の中とは如何にも土木系らしい作業環境。しかし此処は工事現場ではないし、採掘現場でもない。やっているのはあるものを埋める事だ。

そのあるものの名は二酸化炭素。

此処は関東圏の地下百メートル地点に建設された巨大施設。発電所や工場などで排出された二酸化炭素の埋め立て場所——CCSと呼ばれる『二酸化炭素の回収・貯蔵』を行うための場所なのだ。

数十年前より問題視されていた地球温暖化は、二十一世紀半ばを迎えた現在少しずつだが解決に向かっていた。温室効果ガスの一つである二酸化炭素を、効果的に回収・地中に封入する技術が確立されたからである。この技術により石油や石炭などを燃やして排出された二酸化炭素は大気中に放出されず、石油などが元々存在していた地中へと帰っていく。二酸化炭素は大気中を漂うから温室効果が生じるのであり、存在する事自体は問題ではない。地中に埋めてしまえば温室効果はなくなる。

かくして先進国では現在、二酸化炭素の排出量はほぼゼロとなった。中国や米国もこのCCSを行っており、現在世界の二酸化炭素排出量は全盛期の十分の一以下にまで抑えられている。CCSには非常に金が掛かるため途上国では普及しておらず、未だ大気中の二酸化炭素濃度は上がり続けているが……あと三十年も経った頃にはゼロ

となり、以降はマイナスに転じる見通しだ。二〇七〇年代、ようやく地球温暖化は本当に解決へと向かうのである。

地球温暖化は、今やのつぴきならない状態だ。災害は年々巨大化し、技術発展の速度すら追い抜こうとしている。高度な技術には多くのエネルギーを使う、つまり大量の二酸化炭素を排出する必要があるのだから当然の事だろう。二酸化炭素の排出そのものを減らさねば、いずれ人類文明は崩壊するに違いない。

この施設が地中へと戻している二酸化炭素の量は日本国内で最大、世界で見ても五本指に入る規模のもの。もしも此処の機能が停止すれば、日本の二酸化炭素排出量は一気に二〇一〇年代の水準に戻るだろう。

当然そのような施設で異常が起きれば、それは日本国のみならず、地球に住まう全人類の危機だ。彼は常にそう考え、日々誠実に職務に取り組んでいる。他の作業員も似たような気概だろう。

「現状を報告してくれ」

「地中温度、圧力共に問題ありません……少し、注入量が予定より遅れています」

「どれぐらいだ？」

「二パーセントです。加圧しますか？」

二酸化炭素の注入状況を監視している部下に尋ね、作業状況を把握。彼は顎を擦りながら考える。この施設は二十四時間稼働しており、夜勤と交代するまであと一時間に迫った現時点で二パーセントの遅れなら、普段なら夜間作業で遅延を解消出来るだろう。

しかし今日は普段に非ず。

怪獣という非常識が日本に現れているのだ。現代兵器の主役であるレーザーは大量の電気を使う。怪獣相手に使われるかは分からないが、もしたくさんのレーザーが怪獣に撃ち込まれば、発電量 Ⅱ 二酸化炭素排出量が増大するかも知れない。なら、早いうちに遅れは取り戻した方が……

「監督、少しよろしいでしょう」

考えていたところ、部下の一人が声を掛けてきた。

彼は声がした方へと振り返り、部下の顔を見る。禿げ頭の中年。彼の後輩であり、主に施設内外の連絡を担っている身だ。

その彼が話し掛けてきたからには、何か連絡があったという事。十中八九悪い連絡だ。頭の中の考えを一旦脇に退けた彼は、眉を顰めつつ後輩の話に耳を傾ける。

「ああ、どうした？」

「実は通信で不具合が……外部、内部共に全て繋がりません。施設内作業員の通信端末も不通になっています」

「何？」

後輩からの報告に、彼は一層眉を顰めた。しかしそれは、報告された事態を問題だと感じたからではない。

あり得ない、と思ったからだ。

「通信が通じないって、そんな馬鹿な。どの機械でも通信は全て『酸素通信』だろ。不通になる訳がない」

「ええ、そうです。その筈なんです」

彼は思った事をそのまま伝え、後輩はこくこくと頷いた。

酸素通信とは二〇二八年に実用化された、最新鋭の通信技術だ。酸素に情報伝達能力があるという論文が発表され、その理論を元に作られた……らしい。彼は専門家ではないので詳しい原理は理解していないが、この酸素通信に三つの利点がある事は知っている。

一つは大気に存在している酸素を媒介にしているので、衛星や中継基地を介さず、気候や遮蔽物の影響を殆ど受けずに情報を飛ばせるという点。

二つ目は酸素がある限りどんな方法を用いても、通信を遮断出来ないという点。

そして三つ目の利点は通信波形により通信先を特定の一つに絞れるため、秘匿性が高い点だ。

現在では非常に普及した技術であり、スマホの通信にも用いられている。彼が地下百メートルに位置する休憩室でネットが使えたのも、この酸素通信のお陰だ。施設の通信機器も全て酸素通信を使用しており、電波のように通信状態の悪化はないし、施設の周りを真空パツ

クにでもされない限り遮断もされない。通信先・通信元の機械が故障すれば流石に途絶えるが、本社及び施設内の通信機器が全て同時に故障などあり得ない。

どう考えても通信が途切れる理由などないのだ。とはいえ後輩がこんなしようもない嘘を吐くとも思えず、だからこそ一層困惑するのだが。

「……分かった。整備班を呼んで、通信機を調べさせよう。通信以外は問題が起きていないんだな？」

「ええ、はい。そうだと思います。ただ通信が使えないので、注入装置近くの人員には確認が取れていなくて」

「すぐに確認してくれ。平行して進められない作業は夜勤に回しても良いから、現場の把握を最優先にするんだ」

後輩に指示を出しつつ、彼は自分のスマホを取り出す。現場の通信機が使えないなら、スマホで直接整備班を呼べば良い。

そう思ったのだが……

「……？　なんだ、ぷつぷつって……」

電話から奇妙な音がする。

電波に代わり、酸素通信になってから聞かなくなった音。そうだ。

これはスマホの通信が電波で行われていた頃、アンテナが立たない場所によく聞いた――

自分のスマホに起きた『異常』。だがそれを理解する暇は、彼にはなかった。

突然の轟音と振動に見舞われたからである。

彼は体勢を崩し、思わず近くの機器に手を突いた。他の職員も体勢を崩し、中には椅子から転がり落ちる者も居る。怪我人も出たかも知れない……しかし窓の向こう側に広がる空洞にて、二酸化炭素貯蔵作業をしていた作業員に比べれば、室内に居る自分達は遙かにマシだ。

空洞内で作業していた者達は、頭上から落ちてくる大岩の雨を受けたのだから。

窓ガラスは分厚く、空洞内で働いていた職員の悲鳴は聞こえてこない。或いは上げる暇もなく生き埋めか。なんにせよこんな地下深く

で起きた崩落となれば、救助されるのは何十時間、何百時間も後になるだろう。まず間違いない、あそこで働いていた何百という職員は助からない。

その尊い人命を奪ったのは。

【ペギギイイイギギギギイイイ！】

まるで樹木をへし折るような鳴き声と共に、崩落する岩盤を押し退けて現れた『怪獣』だった。

怪獣はのたうつように暴れながら、天井の岩を粉碎して空洞内へ入り込んでくる。次々と岩が崩れていき、怪獣の身体にも当たっていたが、されど巨大な怪獣は何処吹く風。まるで気にも留めず、施設内にどンドン押し入ってきた。最後にぶるりと身体を振るえば、傷一つない身体が見える。

恐らく地下百メートルの施設まで掘り進んできたというのに、怪獣は全く平然としているようだった。

「か、怪獣だ!？」

「なん、なんで……」

突然現れた怪獣に、室内に居た職員達に戸惑いが広がる。職員達も怪獣の存在はニュースなどで知っていた。人間が暮らしている都市を次々に襲う凶暴性と、毒ガスで百万以上の人々を殺した事も。

怪獣がこの近隣に来ていたのに、どうして本社からの連絡がなかった？ 彼の脳裏を過ぎった疑問の答えは、すぐに思い至る。酸素通信が不通になっていた所為だ。今時の通信は全て酸素通信で行われている。酸素通信の途絶により、怪獣接近の知らせを受信出来なかったのだ。

不意を突かれた理由は分かった。しかしまだ疑問は残る。ここはCCSを行ってるだけの現場であり、都市部から遠く離れた平原地帯、ましてや地下百メートル地点に作られた施設だ。野生動物が本能のままろうろ動き回るだけでは、絶対に辿り着く事は出来ない。

そう、怪獣が此処を襲ったのは偶然ではない筈。ならば答えは偶然の逆。

「(狙われた、という事か……!?)」

どうして？ 何故？ どうやって？ 自分の脳裏を過ぎった『回答』に、次々と新たな疑問が噴き出してくる。しかし彼は自らの顔を力強く横に振り、頭を満たす考え全てを捨て去った。

疑問はある。されどその疑問は安全な場所で考えれば良いのだ。それよりも優先すべきは避難。五十メートルはあるという怪獣が暴れたなら、こんな施設簡単に壊されてしまう。

「全員避難しろ！ 通信は使えない状態だ！ もしも他の職員を見付けたら、怪獣の襲撃を教えるんだ！」

彼はすぐ避難指示を出した。本来なら本社に指示を扇ぐところだが、生憎通信が使えない現状独断で決めるしかない。規定違反で懲戒免職かも知れないが、命を失うのに比べれば、職を失うぐらいどうという事もない。

彼の指示を受け、作業員達はのろのろ立ち上がりながら部屋から出て行く。同僚に先頭を歩かせて避難誘導、彼自身は殿を受け持つ。

彼は後ろを振り向き、窓から怪獣の姿を見遣る。

【ベキキギギギギッ！ ミギギイ！】

怪獣は身の毛もよだつような声色で吼えながら、何度も何度も空洞内に置かれた機械に前脚を打ち付けていた。四枚の翅も地中であるにも関わらず羽ばたかせ、壁にある機器も全て破壊していく。空洞内に設置晴れた機械は完全に壊され、二酸化炭素を送るパイプがへし折られる。

この施設での惨状を知らせる術はなく、今も日本中から大量の二酸化炭素がこの施設に送られている筈だ。折られたパイプからどんどん二酸化炭素が溢れ出し、大気中に放出されているだろう。この施設で処理している二酸化炭素が一日垂れ流しになった程度で、致命的な温暖化進行は起きないだろうが……良い影響は与えないだろう。

どうしてこの怪獣は此処を襲撃した？ どうしてこの施設を破壊した？ もしもコイツが環境破壊により生まれたものなら、どうして環境破壊を促進させるのか？

「…………お前は…………一体…………」

ぼつりと、彼は声を漏らす。

瞬間、怪獣はまるで彼の言葉を聞き付けたように振り向く。彼は心臓が跳ねたように感じ、慌てて職員の逃げ終えた部屋から自分も脱出しようとした。もう頭の中にあつた疑問は彼方に吹き飛び、上司としての使命感も失われている有り様。

死にたくない。その一心で駆け出した彼だが、生憎怪獣から見ればア리가ジタバタしているようなもの。

頭から部屋目掛け突撃してきた怪獣から逃げるのに、彼の全力疾走はなんの役にも立たなかつた。

民兵

「日本が怪獣で壊滅、ねえ。映画のタイトルルみたい」

今朝の新聞を読みながら、彼女は眉を顰めて独りごちた。

カナダのとある小さな町に建つ安アパート一階にて、一人暮らしをしている彼女は朝の自由時間を新聞片手に過ごしている。朝食も身支度も済ませ、スーツ姿でいる彼女は今年で三十半ばになる身だ。周りからは妙齢の美女や美人過ぎるキャリアウーマンという評価をもらっており、それ自体は大変嬉しく思うが、そろそろ恋人いない歴史

Ⅱ 年齢を終わりにしたいとも思っている。

そのような個人的事情はさておき。新聞の見出しにある『日本、怪獣により壊滅！』の文言は、中々センサーシヨナルなものだ。記事によれば怪獣は自衛隊の攻撃をもともせず、日本の大都市を襲撃。壊滅した都市が四つあり、死者は凡そ三百万人との事。日本政府は世界各国に支援を求め、怪獣に対する情報連携も積極的に行うという。尤も、支援については「人口の三パーセント近くを僅か一日で失った国など例がない。全面的な支援を受けても、社会システムが崩壊するのは避けられない」との意見が専門家から出ているようだが。

そして当の怪獣は、今はカナダに向かつてきているという。カナダ政府は米軍と協力して怪獣に対処すると発表しているようだが……
「自衛隊の武器って、世界でもかなりしつかりしている方よね。うちの国とアメリカが協力しても、倒せるのかしら」

彼女の個人的見解では、あまり成果は期待出来ないと思つた。二〇四五年現在、カナダの軍事費は日本よりやや少ない程度。兵器の質も互角であり、世界でもかなりの『戦力』を誇るが……自衛隊が一方的にやられた怪獣に対し、自衛隊と互角のカナダ軍が致命傷を与えるのは難しいだろう。

協力してくれるという米軍は『世界最強』と名高いが、だからといって配備されている銃の威力がカナダ軍の百倍ある訳じゃない。軍隊とは対人間を想定したもので、人間相手にそんな出鱈目な威力は要らないからだ。大半のミサイルや爆弾、最新鋭のレーザー兵器でも、量

は兎も角性能的には日本やカナダと大差あるまい。怪獣相手に効果が期待出来るのは、地中貫通弾と大規模爆風爆弾ぐらいか。

もしもそれすら通じないなら、人類の残る手立ては『アレ』しかない。『アレ』は出来れば使ってほしくないところだが……

……軍才だから恋人が出来ないのかしら、等との考えが過ぎる彼女だったが、友人や同僚の前で披露した覚えはないのでこれは違うだろうと考える。決して、趣味を止めるぐらいなら結婚出来なくても良いやと思った訳ではない。

ともあれ一般人に出来るのは、人口二万人のこの町が戦場になった時さっさと逃げ出す事だけだろう。怪獣は人口の多い大都市を狙って襲っているようなので、果たしてその時が来るかも怪しいが。

「……そろそろ家を出ないとね」

時計を見て、程良い時間である事を確認。新聞を畳んでテーブルに置いた彼女は、朝食時に煎ったコーヒーをぐっと飲み干す。空になったカップを適当に水で濯いだら、軽やかな足取りで玄関へと向かう。壁に掛けてあるコートを羽織り、最近買ったばかりの靴を履き——カナダは室内で靴を履く派と脱ぐ派がいる。彼女は脱ぐ派だ——、外へと出た。

今日は天気予報通りなら一日中晴れ。冬のカナダはとても寒く、彼女が暮らす集合住宅一階の外には、たくさんの雪が積もっていた。道路に並ぶ街路樹も雪を被り、真っ白なオブジェと化している。数十年前までこの地域では雪など殆ど積もらなかったらしいが、温暖化の影響で降水量が激増し、昨今では毎年大雪だ。温暖化が解決に向かうだけでもあと三十年掛かるそうなので、自分が生きてる間はこの雪と付き合わないといけないのかと思えば彼女は肩を落とす。

朝から気が滅入ってはいけない。コートとスーツを手で整え、靴の踵をコンコンと慣らして気持ちを整理。最後に眩い空を見れば気持ちちはスッキリ切り替わる。

その頭上を巨大な影が横切らなければ、であるが。

「……は……え……!?!」

何が通ったのか。一瞬考え込んだ後影の正体に気付き、彼女は顔を

青くしながら影が飛んでいった方を見遣る。

影は数十メートル程度の、人間からすれば極めて危険な高度を飛んでいた。しかし『人間』ではないそいつにとっては、ちょっとした低空飛行に過ぎないのだろうか。背中から生えている巨大な四枚翅は羽ばたかず、滑空するようにゆったりと飛んでいる。六本の脚も垂れ下がり、楽な姿勢でいるようだ。

時速九百キロで飛ぶ、という新聞情報とは異なるが……五十メートル近い巨軀と蛾に酷似したフォルムは新聞の記述と重なる。

間違いない。『怪獣』がこの町にやってきたのだ。

「嘘っ、もう軍はやられて……っ！」

新聞に書かれていた通りなら、軍は怪獣撃破のため向かった筈。よもや戦つてもいないとは思えず、ならば足止めすら出来ずに一瞬でやられてしまったしか考えられない。

米軍もやられたのか、どれだけの兵力を投じたのか、被害はどの程度か——軍事に詳しいからこそ様々な不安が過ぎり、故に彼女は自分の身を守る事が少し遅れてしまう。

怪獣が毒ガスを撒き散らす事を思い出したのは、怪獣が頭上を通り過ぎてから数秒も経つてからだった。

彼女は慌ててハンカチで口を塞いだ。一呼吸で死に至るガスがこれで防げるとも思えないが、三呼吸ぐらいには耐えられるかも知れない。後は部屋の扉と窓を閉め、新聞紙で玄関戸の隙間を塞げばなんとか……

「(あれ? 黄色いガスが、ない?)」

そこまで思考を巡らせ、彼女はまたしても今更気付く。

怪獣の通り道に、ガスなど撒き散らされていなかった。視界は黄色く染まっておらず、よく見れば通行人達は呆然としつつも普通に立っている。小学生ぐらいの子供が怪獣を見てはしゃぎ、傍に居る親がおろおろしながら窘めていた。

彼女も恐る恐るハンカチを口から退かし、ゆっくり息を試みる。このままでは死ぬ! ……というような感覚は、一向に訪れない。

次いで彼女は、怪獣が飛んでいった方角を再び見る。怪獣の姿は地

平線近くに見えた。真つ直ぐ、のんびりと飛んでいるようである。

怪獣は毒ガス攻撃を仕掛ける際、都市の外側をぐるぐると周り、高度百メートルほどの位置から散布するという。その意図は明白で、ガス攻撃で都市の住人全員を効率的に殺すため。町をガスで囲えば人間に逃げ場はなくなるし、僅かな濃度でも致死性があるなら高高度からばら撒いて拡散させた方が費用対効果は高いからだ。

ところが今の怪物は、ほんの数メートルの高さをのんびり飛んでいた。しかも彼女の自宅である安アパートは、この町の中心部に位置している。怪獣が通るのは、毒ガス散布の最後の筈。

怪獣は毒ガス攻撃を仕掛けにきた訳ではなさそうだ。彼女がその結論に至るのに、さして時間は掛からなかった。

しかし、ならばアイツは何をしにこの地を訪れたのだろうか？

空飛ぶ姿を見る限り、怪我などはしていない様子である。自衛隊と同じく、カナダ軍と米軍は易々と蹴散らされたのだろう。だから傷を癒やすためではない。攻撃、逃走以外でこんな小さな町を訪れる理由があるとすれば……

「(もしかして、補給に来た、とかかしら)」

最初に思い至るのは実に軍オタらしい発想。しかしなんとなく過ぎった考えにしては、的を射ていると彼女は思う。

どんなに精強な軍隊でも、補給が出来なければ暴徒以下だ。弾のない銃なんて棍棒程度にしか役立たないし、動かない戦車など置物ではない。弾薬・燃料・食糧・医薬品……あらゆる物資が滞りなく前線に届いて、始めて軍は全力を発揮出来る。アメリカ軍が世界最強と謳われるのは、この補給線の強さも理由の一つだ。

フィクションならば兎も角、現実の存在ならば如何に怪獣でも質量保存の法則に縛られる。無から有が生じない以上、撒けば撒くだけ体内の毒ガス備蓄は減るのだ。それに生き物なら食糧が必要だろう。何時か必ず補給が必要になる。むしろインドネシアと日本で合計七ヶ所も都市を襲い、自衛隊・カナダ軍・米軍と戦いながら、よく今まで毒ガスと体力が持ったものだと言うべきか。

降下してきたのは、地上から物資を得るためかも知れない。蛾のよ

うな姿だし木や草をバリバリ食べるのだろうか、それとも人間を頭から丸呑みにするのか……興味はあるが、それは命知らずなカメラマンにでも任せてしまえば良いだろう。一般人に過ぎない彼女は、自分の命を優先する。

会社には向かわず、兎にも角にも町から逃げるのだ。

「……OK、落ち着きましょう」

すべき方針を決めた途端、心臓がバクバクと鼓動を始めた。脂汗も出てくる始末。

「危ないから逃げよう」と具体的に考えて、ようやく身体が危機感を覚えたのか。長年の文明生活で人間の野生が退化しているという話は、どうやら本当らしい。でなければ、危険を感じるのにこんな長々としたプロセスは必要あるまい。

『人間本来の生き方』なんてものがあるとはこれまで思わなかったが、案外そのような意見も正しいのか……等とまた思考が逸れそうになった。彼女は首を横に振り、兎に角今は逃げようと、早歩きで郊外に向かう。

町の人々も、とぼとぼとした歩みだが歩き出した。行く先は怪獣が飛んでいったのとは逆方向。はしゃいでいた子供達も、大人達の反応から喜んでいる場合ではないと気付いたらしい。静かに、暗い顔と なっている。

日本では怪獣が現れた際、殺されるといふ恐怖から町がパニックに陥ったという。この町ではそうしたパニックはなく、町人は静かに歩いている。それは日本よりこの町の民度が上だから……という訳ではなく、人口が少ないので道が詰まる心配がなく、怪獣が頭上を通り過ぎた時点で色々吹っ切れたというのが大きいだろう。この町が人口十万人以上の大きな町で、遠くにちよつと姿が見えるぐらいの位置に怪獣が現れたなら、生き延びようとする人々で大混乱になった筈だ。

人の少ない道を歩きながら、彼女は懐からスマホを取り出し、万に備えて家族に遺言を伝えようとした。が、メッセージを送ろうとしても『通信出来ませんでした』というエラーが出るばかり。アプリの

問題かと思いいメールや電話も使ってみたが、どれも通じなかった。

こんな時に故障？　とも思ったが、周りの人々もスマホ片手に困惑している姿を見て、自分のものだけがおかしいのではないと彼女は知った。そういえば今朝の新聞に、怪獣の通り道でスマホなどの通信端末が使えないという証言があったという記載があったのを思い出す。酸素通信の妨害など人類でも出来ていない事。実に怪獣らしい、とんでもない能力だと彼女は思う。

仕方ない、スマホにはメモだけ残そう。会社には、生きていたら明日連絡しよう……そう考えながら、もう一度視線をスマホに戻そうとした。

「うっ……うっ……」

その時、ふと真横から呻き声が聞こえる。

思わず声が出た方を見れば、女子高生ぐらいの少女がお腹を抱え、蹲ろうとしていた。何をしているの？　と一瞬思う彼女だったが、すぐに少女の体調が酷く悪いのだと察する。彼女は逃げるのを止め、少女の身に寄り添った。

「どうしたの？　大丈夫？」

「か、ら……しび……」

「え？　何？」

容態を尋ねようとしたところ、少女の口から出てきたのは途切れ途切れの言葉。何を言っているか分からない、が、喋れないぐらい酷い状態なのは理解した。

この少女は一刻も早く病院に連れていくべきだ。そう思う彼女だが、しかしスマホは使えない。他の人達のスマホも同じだろう。なら、病院まで徒歩で連れていくしかあるまい。

「頑張つて。肩を貸すから、病院まで行きましょう」

「あ、が……かつ……」

なんとか少女を助けようとする彼女だが、少女の容態はどんどん悪化していく。目を剥き、明らかに息が出来ていない。喉を掻き箸り、苦しさに藻掻いていた。

新聞に書かれていた、怪獣が撒き散らす毒ガスの症状とよく似てい

ると感じた。しかし自分はなんともない。これは毒ガス以外に原因があるのか？ 疑問に思っている間も少女の苦しみはどんどん強まり、ついに蹲る事すら出来ず、ぱたりと倒れてしまう。

「っ！ しっかりして！ ねえ！ 誰かこの子を——」

あまりにも急激な悪化に、自分だけでは手に負えないと判断。彼女は周りに助けを求めようとして……されどその言葉は、詰まってしまう。

彼女の周りには、助けてくれる人など誰もいない。

殆どの人が、道路の上で寝転がっているのだから。

「おい!? しっかりしろ! どうした!？」

「お願いします! 息子が、息子が息をしてないの! ねえ! あなた助けてよ!」

「俺だってダチが大変なんだ! 一人でなんとかしてくれよ!」

僅かに残っていた人達も、自分の親しい人を助けようとするので手いっぱい。下手に声を掛ければ、助けるどころか助けを強要されそう。

想像もしていない光景。何故こんな事が起きている? 原因を探ろうと、彼女は倒れている人達の共通点を探ろうとした。されど男も女も、大人も子供も関係ない。肥満か痩せ形かも無関係なようである。無事な人にも共通点が見られず、精々大人の男性が多いぐらいか。しかし今が通勤時間帯である事を思えば、外を出歩いている人の成人男性比率が高いのは当たり前で、ごく自然な光景でしかない。

原因が、理由が分からない。未知というのはそれだけで人を恐怖に突き落とし、心身に異常を生じさせる。彼女も息が乱れ、足腰が震え始めて……

「あ、か……!？」

これが恐怖によるものではないと気付いた時には、何もかも遅かった。

両足から力が抜け、腰砕けになる。なんとか立ち上がろうとしても、足の次は手が、身体が震えてしまう。ついに倒れてしまうと、息までも詰まってしまう。呼吸をしようとしても喉が震えるばかりで、

全く空気を吸い込めない。

「嘘、やだ、やだやだやだ死にたくない誰か、誰か……！」
思えども、出てくるのは掠れた声すら出せない震えのみ。

その必死な震えも、今まで立っていた人々が次々倒れる中では誰にも届かない。

五分。

彼女の中から苦しいという感覚すら失われるのに、それだけの時間が必要だった。

予防

被害国インドネシア・日本・カナダ。

犠牲者と思しき人数は七百万人以上に到達。

民間人に『怪獣』と呼ばれている生物が現れてから僅か二十時間……たったの二十時間で、全人類の〇・〇一パーセントが殺された。恐るべき殺戮速度であり、核戦争でも起こらない限り、今後の人類史でもこれ以上の惨劇はないだろう。

恐ろしい災禍であり、この惨事を引き起こした生物は驚異的な存在である。しかしもしもこれがただの準備運動、本気とは程遠いものだとしたら？

「そしてそんな存在が、アメリカ本土に上陸しようものなら？」

……米国政府が焦るのは尤もだと、生物学者である彼は思った。ましてや現在進行形で『怪獣』——米国政府が付けた正式名称は巨大飛行生物だ——が時速九百キロで飛んできていて、米軍の猛攻を受けても全く進行速度が落ちていないのだから尚更である。もしも自分が米国大統領や將軍の立場なら、酷く動揺しているに違いない。

だからと言って、自分のような科学者を急遽集めて「打開策を考えてくれ」と言われても困るのだが。

「あの生物を駆逐出来るか否か。それは米国の、ひいては世界の命運を左右する事だ。困難なのは重々承知しているが、打開策を考えてほしい」

しかし米国大統領自らが、その困った事を言ってくる。

何十という人が集まっている会議室の中から、反対意見が出る事はなかった。

此処はホワイトハウスにある会議室。部屋の四隅に花の咲いた観葉植物が置かれ、少しでも柔らかな雰囲気にしようという心配りが見えたが……どうやら殆ど効果はないようで、場の空気は非常にピリピリしている。

彼含めた三十人の科学者、それと『実働部隊』である軍関係者と政府関係者（大統領と副大統領を除き殆どが官僚だ）が十人ずつ、合計

五十もの人間がこの部屋に集められている。政府と軍の関係者がどんな人物か彼は知らないが、科学者の方は顔見知りが多い。いずれも米国を代表する、優秀な科学者だ。彼自身、生物学者としてはかなり有名な方である。

そうした『優秀』な人々を招集した目的は勿論、米国に接近する怪獣を倒す、駆除作戦を立てるため。

怪獣は現在、米国目指して直進中らしい。米軍はカナダ軍と共に総力を結集し、あらゆる兵器と作戦で打倒を目論んでいるが……未だ怪獣に傷一つ付けられない有り様との事。怪獣の反撃により数多くの命が失われているが、打策は見付かっていない。

このまま直進を続けた場合、怪獣は幾つかの州を横断し、三時間後にはニューヨークに到達すると予測されている。人口密集地を狙うように攻撃している事から、恐らくニューヨークも毒ガス散布のターゲットになるだろう。しかし二〇四五年現在のニューヨークは、人口一千万人に迫る大都市。二時間で全員を逃がすなど不可能だ。

ここで怪獣を倒せない事は、大勢の、国家にとって致命的な数の人命を失う事を意味している。大統領も無茶は承知で、専門家達に頼まねばならないのだろう。

とはいえその専門家達は誰も口を開かない。重大だからこそ、迂闊な事が言えないのだ。

「……あー……まずは、巨大飛行生物の基本をおさらいしてはどうでしょう。大きさや生態だけじゃなくて、被害についても」

生物学者としてここは自分が先陣を切るべきか。そう思った彼は、強張った声で周りに提案する。

積極的な賛成の声は上がらなかったが、こくりこくりと、消極的に頷く姿は散見された。

「……基本的なスペックとしては、体長五十二メートル、翼長百三十三メートル。体重は推定三千トン。時速九百キロで空を飛び、腹部より毒ガスを散布する能力があります」

「その毒ガスの成分は、まだ分かっていないのですか？」

生物学者である彼の提案により、大統領達の傍に立つ官僚から怪獣

の身体的なデータが提供された。すると会議に出席している学者の一人、薬理学者が詳しく尋ねる。官僚は薬理学者の質問にすぐさま答えた。

「詳細は不明です。ですがインドネシアや日本の犠牲者では、急速な酸欠に見舞われた事が分かっています。日本の解析では青酸系の薬物と予想されているようです」

「青酸……植物でよく見られる毒ですね。梅や桃など、バラ科のタネに多く含まれている事は有名です。反面動物では、あまり見られないのですが……それはそうと、インドネシアと日本の犠牲者では、という話ですが、カナダはどうなのですか？ 十の市町村で住人が大量死したのでしょう？」

「現在調査中で確たる事は言えません。ですが巨大飛行生物が散布した毒ではなく、シアノトキシシンが原因と見られています。上水道で検知された事から水源が汚染されていたと見られ、その所為で被害が拡大したようです」

「シアノトキシシン……ですか？」

官僚からの説明に、生物学者である彼はその言葉の意味を慎重に考える。

シアノトキシシンとは、シアノバクテリアという細菌が作り出す毒素だ。シアノバクテリアという細菌自体は珍しいものではなく、そこらの河川や湖に普通に、というよりかなりの数存在しているもの。有り触れたものだけに一般的な水準の個体数ならなんの問題もないのだが……大量発生した場合、生産する毒素が様々な被害を生み出す。水源が汚染された事で人が死亡した事例は幾つかあるし、水溜まりの水を飲んだ家畜が死亡するのも珍しくない。食用具が毒化する原因の一つがシアノバクテリアの毒を取り込む事なので、そういう意味では先進国でも多くの死者が出ている自然毒と言える。

しかし家畜や貝毒は兎も角、水源の汚染というのは余程管理が杜撰でなければ見られない。少なくともカナダのような先進国の浄水場であればその危険性を知っており、対策を取っているのが普通だ。そこが汚染され、上水道にシアノトキシシンが入り込むというのは違和感

を覚える話である。

いや、そもそも……

「……つまり、カナダの件は巨大飛行生物とは無関係？」

「断定は出来ません。ですがカナダ政府の情報では、巨大飛行生物は被害地域の水源や浄水場の三十キロ圏内には近付いていないようです。巨大飛行生物にシアノトキシンを散布する能力があったとしても、それが水源に混入する事はありません」

「単なる事故、という事か」

「そんなまさか」

会議室がざわめく。怪獣がやったとは思えない状況だが、怪獣が関与していないと考えるのも納得がいかない。矛盾した現象に、誰もが困惑した。

彼としても戸惑う。怪獣のおさらいをしたつもりが、謎が深まってしまった。勿論事態の解決には、全ての謎を解かねばなるまい。しかし深過ぎる謎を覗き込んでしまった科学者達は、皆平静を失い、やがて黙ってしまう。

「……巨大飛行生物の生態や被害は、平和になった後で調べれば良いだろう。軍として知りたい事は一つ。何故あの巨大飛行生物は、我々の攻撃を受けても傷を負わないのか、だ」

専門家達が口を閉ざすと、軍の責任者である陸軍将軍が次の話を切り出した。我に返った科学者達は全員が陸軍将軍の方へと振り向き、続いて物理学者が手を上げる。

「確かに、一番の謎はそこでしょう。米軍は様々な攻撃を行ったと言いますが、具体的にはどのような攻撃をしたのですか？」

「陸軍は最新鋭の戦車砲を秒間二十五発、それを十五分間浴びせ続けた。歩兵部隊による対物ライフル一千丁の集中射撃、三十門のロケット砲斉射、対空迎撃レーザー……使えるものはなんでも、だ。だが奴は平然としている」

「海軍はミサイル投射を現在も続けています。対艦ミサイルだけでなく、対地も全てです。効果は、ありません」

「空軍はバンカーバスター及びMOABを使用。命中後僅かに巨大飛

行生物の活動が鈍りましたが、肉体に損傷はなし。その後十数秒で活動は攻撃前の水準に回復しています」

陸軍将軍に続き、海軍将軍、空軍将軍が続く。文字通りの総攻撃に彼は啞然となり、そしてそれでも傷付かない怪獣に恐れを抱いた。

物理学者も顔を顰める……尤も歪んだ口許は、少し楽しそうでもあったが。

「実に興味深い。現在米国が保有するMOABはTNT換算で二十トン……八十四ギガジュールものエネルギーがある。単純計算で、二百トン以上の水が一瞬で沸騰する威力だ。無論全てが熱に変わる訳ではないが、三千トンの身体の表面ぐらいは蒸発させられるだろう。恐るべき耐熱性だ」

「どれだけ耐熱性が高くても、衝撃の方で普通は壊れるでしょうよ。何もかもおかしい」

物理学者の意見に続いたのは、若い昆虫学者。昆虫学者の意見に、他数名の学者も頷く。

「生物学者さんの意見も聞きたいですね。あんな硬い生物、あり得ますか？」

その昆虫学者に突然話を振られて、彼は少し言葉を詰まらせた。ただし、本当に少しの間だけ。

難しい質問ではない。答えそのものはすぐに言えるのだ。人類にとって、不都合な事に。

「あり得ません。生物種によって耐熱性には違いがありますし、人間では一秒と居られないような高温環境を好む微生物もいますが、いずれも二百度にもならないような環境が限度です。数百度、時には一千度を超える炎を浴びて無傷の生物など考えられない。強度に関しても同様です。アルマジロの皮は銃の弾を跳ね返すと言いますが、戦車砲を耐え抜くような代物じゃない。軍事攻撃に耐えられる生物など、少なくともこれまで知られている中にはいませんよ」

「ですが、ヒロシマやナガサキでは、核兵器使用後に植物がすぐ芽吹いたという話がありましたよね？」

「スギナは地下莖と呼ばれるものを地中に張り巡らせる性質がありま

す。核兵器で地上が焼き尽くされても、この地下茎が残っていた事で素早く再生した、と考えるのが自然です。核の熱を耐え抜いた訳じゃない」

「あり得ないと言うのは分かったが、現実にも目を向けてもらいたいものだ」

彼が一通り説明すると、陸軍将軍がぼつりとぼやく。これまでの説明を馬鹿にされたようにも彼は感じたが、しかし実際怪獣には攻撃が通じていないのだ。あり得ない、という否定は、確かにあまりにも『馬鹿馬鹿しい』。

「……巨大飛行生物の強度も疑問ですが、もう一つ疑問があります。かの生物の近くでは、酸素通信が使えなくなる点です」

陸軍将軍に続き、空軍将軍が新たな疑問を呈する。陸軍将軍と海軍将軍も頷き、それが空軍だけの問題ではないと示す。

これに反応したのが米国大統領。米軍総司令官でもある大統領が、『部下』に質問する。

「通信が使えない範囲は？」

「半径百二十キロ前後です。範囲内では使用出来ませんが、範囲外に出ると使用可能である事から、機械は故障してはいないと思われます」

「ですがこの影響により、射程が短い陸軍の統制は一時崩壊寸前でした。今は一世代前の電波通信機を持ち出して対応していますが、酸素通信に慣れた兵士達の混乱は残っています」

「海軍は幸い通信不能範囲より外から攻撃していますが……百二十キロ離れると地平線の向こうになってしまうため、付近の観測者からの着弾及び目標観測が必要です。電波通信機へ交換していますが、時間が掛かり、全艦対応は翌日未明になります」

軍部の苦々しい報告。通信技術は戦争と共に進化し続けてきた分野であり、今や通信が行えない戦闘は想定されていない。何をすることも高度な情報連携が行われる必要があるのに、怪獣の傍ではそれが出来ないのだ。ただでさえ強敵だというのに、実力を十全に発揮出来なければ勝ち目などない。

「……実は、一つ、気掛かりな事が、ありまして」

軍人達の嘆きが終わった時、一人の学者が掠れた声を出す。

気象学者だ。痩せた眼鏡の男は、ぼそぼそと話し始める。

「アメリカ全土、いえ、世界中で大気の動きが活発化しています……その、どうやら大気中の酸素分子が、強く活動しているのです」

「……まさか、それが酸素通信が不通の原因か？」

「いえいえ！ そうではないです！ その、これは酸素通信が始まる前から時折観測され、酸素通信が一般化してからは、度々起きている事象でして……無関係とも、言い難いのですが……」

「……何が言いたいんだ？」

痺れを来したのか、大統領が問う。気象学者はごくりと息を飲み、にへらと笑って、

「……何処かの誰かが、とんでもない出力で、酸素通信をしています。そして多分、巨大飛行生物は発信源兼受信元の一つかと」

その場に居た全員が息を飲む発言をした。

「巨大飛行生物が、人間側と通じているというのか!？」

「いえいえ！ そ、そうとは限りませんが……巨大飛行生物を中心に、大きな大気の活動があるのは、事実ですので、可能性はゼロではない、かも」

「何処かの組織、或いは国と通じているとすれば……生物兵器なのか？」

「ど、どうでしょう。例えば真犯人が、このアメリカだとしても、此度の事象を起こすには、エネルギーが全く足りません」

「具体的には？」

「計算上は一日当たり、三・五×十の十六乗ジュール必要です。合衆国が一日に生産するエネルギー量に匹敵します」

さらにと語られた言葉は、会議室に再び沈黙を呼ぶ。

生物学者である彼にも、そのエネルギー量の非常識さは分かる。米
国並みの巨大国家が、突如地球上に出現したようなものなのだ。まさ
かファンタジー小説よろしく、異世界の帝国がやってきた訳ではある
まい。

しかしそれでも考えないと、この出鱈目なエネルギーの出所なんて

想像も付かない。

「まさか宇宙人の円盤が来てるとか」

「あり得ない。何故宇宙人がわざわざ酸素通信なんて用いる？ 宇宙空間じゃ使えないだろ」

「そもそも通信目的で使用しているなら、そんな巨大なエネルギーなんていらぬ。スマホ一台分の電力で十分な筈だ」

「酸素の活性化はあくまで結果であり、原因は酸素通信以外なんじゃないか？ 例えば新兵器の開発とか」

「だとしても出鱈目過ぎる。水爆だとしても、このエネルギー量では強過ぎて使い物にならない」

「大体何処の国ならそんなエネルギーを捻り出せるといふんだ。先進国も途上国も、自国経済のエネルギーを賄うだけでいっぱいなんぞ」

「兵器にしるなんにしる、そんなものを動かそうとしたら大量の物資を輸入してる筈だ。おかしな動きのあった国はないのか？」

「自然現象しか考えられない。破局噴火クラスなら、そのエネルギーとて微々たるものだ」

気象学者の発言により、会議室内がいつきに活気付く。専門的な用語が飛び交い、議論が一気に活性化していた。

生物学者である彼としても、周りの学者と意見を交わしたい。米国が丸一日掛けて作り出すようなエネルギーが何処から湧き出したのか、どうして世界中の酸素を活性化するという形で使われているのか、何処からそのエネルギーがやってきたのか……

「知的好奇心も結構だが！ 現状を忘れてはいないか？」

しかし彼が口を開く前に、陸軍将軍が大きな声を上げた。

一瞬でしんとする会議室。忘れてはならない。今正に米国民の命が脅かされ、軍人達の命が散っているのだ。必要な議論ならば兎も角、脱線は許されない。

「……奴を打開する術がないというのなら、残す手段は一つです」

「なっ!? それは——」

海軍将軍がぼつりと語ると、科学者の一人が声を荒らげる。顔立ち

からして日系人の男。その日系人科学者が真つ先に反応した『残す手段』など、それこそ一つだけ。

核兵器だ。

「MOABやバンカーバスターの直撃で怯む事は確認している。ならばこれを上回る威力の攻撃であれば、致命傷を与えられる可能性が高い……これが軍部の見解です」

「ですが！ 核は、水爆の使用は……アレだけは使うべきでない！ 環境への影響も大き過ぎる！ それだけは」

「人命と環境、どちらが大事なのです？」

海軍将軍に問われ、日系人科学者は口を開けつつも言葉が出ない。

生物学者である彼もまた、口を閉ざす。核兵器による自然破壊は、非常に大きな問題だ。爆風で環境を根こそぎ破壊するのは勿論、放射能汚染も深刻である。回復するのにどれだけの年月が必要になるのか、想像も付かない。

人命を守るためとはいえ、そのために地球環境に傷跡を残して良いのか。怪獣がどんな理由で生まれたのかも知らず、大きな火の玉で焼き尽くすのは正しいのか。

……疑問を呈したところで、じゃあ市民を見殺しにするのは正義かと問い返されれば、今度はこちらが口を閉じるしかない。結局のところ此度の議題は如何にして米国民を怪獣の脅威から守るかであり、その案がないのであれば何も言えないのだ。

核兵器といえども、それで守れる人命があるのならば——どうして使うべきでないと言えるのか。

「……やはり、核の力に頼るしかないか」

「米国内で使用する分には、国際的な問題はないでしょう……米国民の支持は、巨大飛行生物を倒せさえすれば上がると思われます」

「選挙などどうでも良い。国民の生命と財産の問題だ」

官僚達からの見解を、大統領はすっぱりと切り捨てる。それは極めて愛国的な発想で、だからこそ誰にも止められそうにない。

「……核ミサイルの発射シーケンスには大統領の署名が必要です。こちらの紙にサインを」

海軍将軍はそう言うと、一枚の紙を大統領の前へと出す。大統領はその紙にさらりと名前を書き込み、海軍将軍に紙は戻された。海軍将軍は立ち上がり、通信端末を用いて何処かに連絡をする。

あまりにも呆気なく、核の使用が決まった。誰にもそれを止められなかった。

「次はあの巨大飛行生物を倒した時、また会議を開こう……集まってくれた者達全員に感謝している」

大統領はそう語り、席を立つ。科学者達は、全員何も言えなくなっていた。小さくないため息があちこちから聞こえてくる。

彼も仕方ない事だと頭では分かっていた。しかし感情面では受け入れ難い。何か他に手はないものか……

「し、失礼しますー！」

考え込もうとした時、会議室に誰かが飛び込んできた。何事だと思いながら振り向けば、そこに居たのは一人の若い軍人。息を切らし、顔を真っ青にしていた。

「きよ、巨大飛行生物が進路を変更！ このホワイトハウスに向けて直進中！ 現在も軍による攻撃が続けていますが、動きが止まる可能性は極めて低いです！ いずれ此処も戦場となります！ 直ちに避難を！」

そして彼の発した言葉は、この場に居る全員の顔を青くさせるに足るものだった。

どうして怪獣がホワイトハウスに？

彼は困惑した。突如進路を変更したというのもあって、まるで此処で怪獣の会議が行われている事を知ったかのように思えたからだ。一体どうやってそんな事を知ったのかと考え、ふと一つの可能性が過ぎる。

全世界規模の酸素通信。

まさか怪獣は、その酸素通信でこちらの会議を全て聞いていたのではないか？ そんな考えが過ぎったのだ。しかしならば何処かに情報発信者がいる筈。一体誰が？ まさかこの会議室内に人類の裏切り者が……

「巨大飛行生物との距離はどの程度ある？」

「凡そ九十キロ。飛行速度から算出して、到達まで六分です。酸素通信の妨害圏でもあるため、酸素通信は使えません」

「念のため電波通信に切り替えておいて正解だったな……大統領、時間がありません。科学者達と共にホワイトハウスを脱出します」

やってきた軍人に陸軍将軍が問い、告げられた情報から大統領に逃げるよう促す。大統領はこくりと頷き、科学者達も逃げるため席から立ち上がった。彼もまた逃げるために立ち上がり、

がくん、と膝を折った。

「む……失礼」

椅子に座り過ぎて上手く力が入らなかったのか。歳だなど思いなから、彼は立ち上がろうとする……が、上手くいかない。

それどころか、段々と状態が悪化する。

目眩がした。吐き気もある。胸に不快感が生じ、視野が狭まる。

おかしい。明らかに異常だ。まさかこんな時に何かの発作を起こしたのかと思い、彼は助けを求めようと顔を上げた。

会議室では、大半の者が膝を折り、一部は床の上に倒れていた。

彼はゾツとした。

怪獣からホワイトハウスまで、兵士の報告が正しければまだ九十キロも離れている。毒ガスがどれだけ霧散したとしても、此処まで届く筈がない。会議室には水も出されたが、カナダでの一件があったのだ。水は嚴重に検査されていたに違いない。

これを引き起こしたのは青酸系の毒ガスでも、シアノトキシンでもない。もつと根本的に違う、何か、とんでもないものが原因だ。

「か……あ……が……い……」

考える彼の横で、一人の科学者が痙攣しながら呻く。伸ばされる両腕は助けを求めるようだが、彼だつて助けが欲しい側だ。科学者の求めには応じられない。

「や、さん……そ……」

しかし科学者は、彼が求めていたもの……疑問の答えを提示した。そうだ。自分達の身を襲うこれは、高圧の酸素を取り込んだ時の症

状だ。ならばこれは、怪獣の力とは――

疑問の答えは得た彼は、されどそれを言葉にする事も叶わず意識を手放す。大統領も軍人も官僚も、誰ももう動けない。

襲撃してきた怪獣によりホワイトハウスが崩落したのは、兵士が告げた通り僅か六分後の事だった。

秘匿

一時間前に大統領が死亡した。

陸軍所属の一兵士に過ぎない彼女でも、その話を聞けば事の重大さはすぐに理解出来た。

軍という組織は武力で国防を担う性質上、時には非情とも取れる合理的動きをせねばならない。町を死守しろと命じられればそうするし、逃げろと言われたなら住人が残っていても逃げる。そうして最終的に国を守り、敵を打ち破るのだ。

なのに複数の上官から様々な指示を出されたら、合理的動きを妨げられてしまう。町に迫る敵軍を前にして、逃げろと守れを同時に命じられたなら、一体どちらに従えば良いのか。逃げた結果敵に重要拠点を奪われるかも知れないし、守りを固めた結果より重要な地域の援軍に行けなくなってしまう可能性もある。

そうした混乱を防ぐためにも『誰の指示を聞くべきか』『自分は誰に命令出来るのか』『自分はどんな命令をして良いのか』——所謂指揮系統をしっかりとらせねばならない。

そして米国において大統領は、政治的トップであるのと同時に、米軍の最高司令官でもある。実態は兎も角として、米軍は大統領の指示なしに動いてはならない……故に大統領の死というのは、米軍そのものの機能停止を意味していた。

無論戦争において指揮官の『喪失』という事態は、ある程度避けられないもの。極端な話、自殺でもされたらどんなに守りを固めても無意味だ。故に指揮系統には『順位』が付けられ、司令官が死亡しても作戦に支障が出ないよう工夫されている。米国でも大統領死亡時は副大統領がその任を引き継ぐようになっており、大統領だけが死んだのならなんとかなるようになっていた。

しかし此度死んだのは、大統領だけではない。副大統領以下、十数名の閣僚達も死亡した。原因は巨大飛行生物……巷で怪獣と呼ばれている生物の襲撃によりホワイトハウスが倒壊し、瓦礫の下敷きになったから。されど脱出には十分な時間があつた筈であり、何故全員

逃げ出せなかったのかは未だ不明である。誰が生き残っているかも分からず、そのため『最高司令官』が誰なのかも分からない。

おまけにその時、ついでとばかりに將軍など軍上層部の者も多数殺された。最高指揮官^政の命令を受け取るのは軍上層部だが、その上層部も誰が生き延びているのか分からない訳だ。現状なんらかの指令が飛んできたとしても、何処の誰が、一体どんな立場から出したものなのか判断が付かない。

そのような状況下で、「核兵器を怪獣に撃ち込め」という命令が来たなら？

「……大統領の署名は本物だった。故に作戦は間もなく実施される」部隊の隊長から説明を受けても、彼女には納得出来なかった。

怪獣の進路上に位置するとある公園。そこに作られたテント内に、彼女は作戦の説明を受けていた。作戦とはつまり、「何処の誰が出したかも分からない核攻撃」の事。彼女が属する部隊は、この作戦に参加するのだ。

正直な事を言えば、彼女としては拒否しなかった。彼女と同じ小隊に属している六人の兵士達も同様だろう。男女混合の部隊であるが、性も年齢も関係なく表情が厳しい。核兵器が恐ろしいものである事は誰もが知るところであり、ましてや本当に出されたどうかも分からぬ作戦で、しかも自国内で使うなど拒否感が出て当然である。

しかし、戦車砲も艦砲射撃も空爆も通じないあの怪獣を倒す術は、もう核兵器しかないのも事実。

核兵器への『嫌悪』を理由に、三億人以上の米国市民の命を脅かすのは正しいのか？ 作戦の真偽が不明確だからといって、大都市が襲撃されるのをただ見ているだけなのが正解なのか？

誰も、そうだとは言えないのだ。

「今回使われる核兵器は『ガーディアン』。総出力四百キロトンの熱核兵器であり、海軍保有の潜水艦より発射される……が、これは遠く離れた海の話だ。我々の任務ではない」

部隊の隊長はテント内に設置されたホワイトボードに書き込みながら、彼女達が為すべき任務について話す。

彼女達の任務は、端的に言えば『死亡確認』。

核兵器の熱量により怪獣を焼き尽くす、というのが此度の作戦だ。生半可な生物、いや、存在ならばこれで跡形もなく消し飛ぶだろう。しかし怪獣は謎の原理により身を守り、これまであらゆる攻撃に耐えてきた存在。MOABすら少し怯ませるのが限度なのだ。ガーディアン出力はMOABの四万倍もあるが、その防御能力の原理が不明である以上、もしかするとなんらかの方法で生還する可能性も否定出来ない。もしも肉体が残れば、生死確認が必要だ。

その危険な作業を行うのが、彼女達の役目。

生死確認はある程度詳細な調査を行うため、怪獣と肉薄する必要がある。悪足掻きで暴れ出せば呆気なく踏み潰され、命を落とすかも知れない。それ以前に水爆の使用直後となれば周辺には放射性物質が拡散し、多かれ少なかれ被曝もあるだろう。無論防護服は装備しているが……どれほど信用出来るのやら。

命懸けの任務だ。しかしそれ自体は、彼女達を怯ませるものではない。軍に入隊した時から命を賭けるのは覚悟済みである。

「危険な任務に参加してくれる、諸君等の愛国心に感謝する」

説明を終えた隊長は敬礼し、彼女達小隊員達も敬礼を返す。

愛国心。

本当に愛国心があるなら、核使用の指令書を破り捨てているところだと、彼女は内心毒づくのであった。

幅十メートルはあるモニターに、雲一つない青空の映像が映し出される。

画質はかなり荒い。酸素通信が使えないため、電波通信で撮影した映像データを飛ばしているからだ。酸素通信による高解像度の映像に慣れていた彼女は、少し違和感を覚えてしまう。全身を白くて分厚い防護服で身を固め、ガラス製のマスク越しに見ているから、というのもあるだろう。

しかし、大空を飛ぶ『怪獣』の姿を見るのに支障はない。

怪獣は悠々と空を飛んでいた。周りではぼろぼろと戦闘機が落ち

ていき、まるでクラツカーのように怪獣の周りを飾る。死の間際戦闘機達は全てのミサイルを放ち、全弾命中するが、怪獣は微動だにしないかった。

その怪獣の周りから戦闘機達がいなくなった頃、空の彼方から一つの眩い明かりが現れる。

光の正体はミサイル。戦闘機達が撃ち出したそれとは比較にならない巨大さの代物で、大きな炎を噴き出しながら直進していた。怪獣の視力がどの程度のものかは不明だが、真つ正面から飛来するそれが見えていないという事はあるまい。

だからなんの手立ても打たなかったのは、そんな攻撃など怖くないと考えていたからだろう。事実怪獣は、これまでその身に受けたどんな攻撃でも傷を負っていない。今更ミサイルが一基飛んできたところで、わざわざ撃墜する必要などないのだ。

そのミサイルがただのミサイルならば、の話だが。

一瞬だった。

一瞬にして、モニターいっぱい広がっていた空が、光に飲み込まれた。爽やかな青空が、地獄のように赤く染まる。何秒かした後、映像が激しく震え、ビリビリという地鳴りのような音が鳴り響いた。赤い光はすぐに消えたが、代わりに空を満たすのは白煙。モニター全域を埋め尽くし、何時まで経っても消えやしない。

これが、核兵器の爆発なのだ。

核兵器が使われる『映像』なんて、ただの一般人の生まれである彼女でも幾度となく見てきた。それは映画やゲームで出てくるフィクションのものだけでなく、核実験の映像のような『本物』だってある。そうした本物の、もう百年近い大昔の映像と何が違うかと言われれば、何も違わないのだろう。ただどアメリカ国内で、ほんの今さつき使われた事を示すこの映像を見た時——彼女は、自分達のことの大きさを突き付けられた気がした。

されどこれ以外の手があったかと言えば、やはり今でも案は浮かばない。

ならば今はこの作戦に全力を尽くすべきである。とはいえ『普通』

ならば、彼女の任務は行われる事などないのだが……やはり怪獣は普通ではなかった。

核兵器の爆発により生じた白煙から、何かが落ちてきたのである。白い煙を纏い、その姿はハッキリとは見えない。だが、答えは明らかだ。

落下物体は地面に墜落。轟音と共に、樹木がへし折れるような、不気味な鳴き声を上げた。

「よし、Aチーム出撃する！」

「……了解！……」

隊長の指示を受け、彼女達小隊員は走り出す。

公園内に建てられたテントから出た彼女達は防護服姿のまま、外に駐車されている三台のジープに分かれて乗り込む。彼女は助手席側に座り、後部座席にもう一人乗る。勿論運転席にも一人座り、彼が車のエンジンを掛けた。どるんどると響く車の駆動音を感じて間もなく、ジープは走り出す。他二台も同じく走り出し、安全かつ最高速度で『目的地』——怪獣の墜落現場へと向かった。

怪獣からテントまでの距離は二十キロほど離れている。乗り込んだジープの速度は凡そ時速八十キロのため、単純計算で十五分、曲がり角などの存在を考慮しても二十分ほどの道のりだ。走らせるのは閑静な住宅地の中だが、通行を妨げる車も人もいない。町の人口が少なかったため、避難はどうか間に合ったのである。

予定通り二十分で、彼女達の部隊は目的地に辿り着いた。

事前の打ち合わせで決めていた三人が運転席で待機し、彼女や隊長を含めた五人が車から降りる。そして彼女達は、『そいつ』と向き合う。

「……凄い」

彼女は思わず独りごちた。

現場は市街地のご真ん中。一軒家を複数巨体で押し潰し、芝生に覆われた庭は捲れ上がるように歪んでいた。ただ落ちただけでこの被害。『そいつ』の圧倒的な存在感を物語るよう。

そして地面に横たわる、この惨事の元凶——怪獣は、まだ生き

ていた。

大空を羽ばたいていた翼は核爆発により吹き飛んだのか、半分以上失われている。ホワイトハウスを踏み潰した足も三本が関節とは違う場所から曲がり、大地に立てる状態ではない。全身が焼き溶けたように爛れ、所々黒いタールのようになっていた。

しかしそれでも怪獣は生きていた。彼女達が前に立てば、微かに頭を動かしてこちらに視線を向けてくる。口なんてないのに木が軋むような声を出し、へし折れた足をゆつくりと、藻掻くように動かす。

核の直撃を受けても死なないなんて！ 現在のアメリカ軍でも、核兵器の直撃を耐える装甲など作れない。核シェルターのように、分厚さで耐え凌ぐのが精いっぱいだ。一体この生物の身体は、何で出来ているというのか。なんらかの未知の現象が起きているとしか思えない。

正しく、『怪獣』だ。

「ぼうっとするな。作戦を続けろ」

「！、了解」

フィクションだけの存在と思っていたものを目の当たりにした彼女は、隊長に言われるまで啞然としてしまった。我を取り戻すや、他の隊員と共に怪獣の下へと駆け寄る。

本来最初の任務は死亡の確認だったが、怪獣は間違いなく生きていた。これによりどれを『最優先』の任務とするかが決まる。

生体組織の回収だ。死んでから行う方が安全ではあるが、生きている時にしか分からない事も多い。或いは時間経過で反応が変わる事もあるだろう。そうした情報から得られる知見が、この怪獣の正体を焙り出すヒントとなるかも知れないのだ。死ぬ前に調べられる事は徹底的に調べておかねばならない。

無論、生きている怪獣に接近するのは非常に危険である。如何に弱っていようと、推定体重差五万倍超えの相手である。成人男性に重さ一グラムちよつとのコガネムシが接近するようなもの。向こうにその気がなくても殺されかねない体格差であり、ましてや敵意を剥き出しにされたなら……

恐る恐る、彼女は近づく。幸いにして踏み潰されはせず、怪獣の頭の表皮に触れる事が出来た。

「……ゴツゴツ、いえ、ザラザラとした手触りをしています。まるで、大きな木を触っているみたい」

彼女は大きな声で自分の感じたものを口に出す。彼女達小隊員は集音器を装備しており、常に情報収集が行われているのだ。話した内容はリアルタイムで基地に送られ、データとして蓄積されていく。これなら彼女達の身に『万一』が起きても、最低限の情報は収集出来る。彼女は怪獣の肌を触り続けながら動き、今度は折れた足に近付いた。

「足も、頭と同じようにザラザラしています。あ、此処はべとべと……いえ、これは恐らく、熱で溶けた部分です。火傷のような症状を負っています」

一度足から手を離し、彼女はナイフを取り出す。火傷のように溶けた部分にナイフを突き立てると、少し弾力があるものの、簡単に削れた。一センチほどの欠片が切り出せたので、それを腰に備え付けてある試験管に入れていく。

「……火傷のように溶けた部分の表皮はナイフで削れました。火傷で溶けていない部分も試します……少し硬いですが、人の手で削れる強度です。どうやら、皮膚そのものは硬くないようです」

淡々と報告する彼女は、しかし自分の言葉に違和感を覚える。

何故怪獣の表皮は、ナイフなんかで削れたのか？ 相手は砲弾どころか核兵器にも耐えた存在だ。ナイフなんか通じない筈であり、仮に削れたとしても粉のように細かなものが精々だろう。

ところが実際に試せば、大した苦労もなく欠片を切り出せる。例えるなら、パイナップルの皮よりは硬い程度か。ナイフでなくとも、ちよつと頑張れば歯でも削り取れそうだ。

水爆の高熱で、体組織が変性したのだろうか。しかし熱で変化したと思われる場所は、どろどろのタール状になっている。そうでない表皮は核攻撃前と変わっていない色合いだ。分子構造や化学反応が起きたとは考え難い。

やはり核攻撃前までは、何かしらの『インチキ』が行われていたようだ。核によるダメージが大きく、今はそのインチキが使えなくなつたと考えるのが自然。どんなインチキなのかは、一兵士に過ぎない彼女には想像も付かないが。

「……ナイフで突けた傷から、体液などは出ていません。もつと深く傷を付けてみます」

次にナイフで、より大きな傷を付けてみる。体液は重要なサンプルだ。どんな栄養が流れているのか、どんな仕組みで呼吸をしているのか、そうしたメカニズムが一気に明らかとなる可能性がある。生きている時のものは特に重要であり、採取出来次第すぐにジープ内に置かれていた冷蔵装置で保管する手筈となつているほどだ。

ところがいくら傷を付けても、怪獣から体液は全く出てこない。

一メートルはある足の太さだから、数センチ削つただけでは血管に辿り着かないのか。そう考えた彼女はナイフで削るのは止め、縦に構えたナイフを突き立てた。ドスツ、という手応えと共に、ナイフの刃が十センチほど怪獣の足に刺さる……のだが、これでも体液は全く出てこなかった。

「……体液が出ません。深さ十センチぐらいの傷は付けたのですが」

人間の皮膚の場合、一ミリに満たないような傷でも真皮に達し、血が滲み出る。大量出血ではないのですがすぐに止まるが、皮膚というのはそれだけ表面近くまで血管が来ているのだ。いや、そもそも表面近くまで血管が来ていないと、栄養が届かない筈である。身体が大きいからといって、血の通わない場所を厚く出来る訳ではない。

毛細血管でも良いから『血』が来なければ動物の組織は駄目になる筈。何故血が出ないのか。ナイフで切り取った組織は中まで硬く、これは肉というよりは木部に近いような……

「まさか、コイツ動物じゃなくて植ぶ——」

脳裏を過ぎつた一つの推測。されど彼女が自分の考えを口にする時は来ない。

その前に、怪獣の身体がじわりと光り出したからだ。

「えっ、何が」

起きたのか。思わず眩こうとした次の瞬間、光は一気にその強さを増す。

その後起きた出来事を、彼女とその仲間達は知る事がない。

何故なら赤く発光した怪獣の身体が半径百メートルを吹き飛ばすような大爆発を起こし、周り諸共粉微塵に吹き飛んだのだから。

本番

怪獣。

少し前までフィクションに出てくるモンスターを示す言葉だったそれは、今では『インドネシアから出現した巨大生物』を指し示すものとなっていた。怪獣はインドネシアを飛び立ち、日本、カナダ、そしてアメリカを襲撃。毒ガスの散布や謎の攻撃により、多くの人命を奪った。

死者数は推定一千万人。僅か二十四時間以内の出来事としては、人類史上最悪の惨事なのは間違いない。怪獣は最終的にアメリカの核兵器で葬られたが、核兵器使用に反発を覚える者は殆どいなかった。それほどの恐怖を、一匹の獣は人類に刻み付けたのである。

しかし怪獣が倒されてから三日が経った今、世界は落ち着きを取り戻しつつある。勿論爪痕はあまりにも大きい。何百万という国民を失った日本とカナダでは混乱が今も続き、飛び交うデマで社会情勢が不安定化している。アメリカは大統領を失い、政治的な混乱が治まるのは数年先だと言われていた。これら国内問題から派生する国際社会の動揺も無視は出来まい。

それでも怪獣の事は段々と忘れられていき、やがて『なかった』事になるだろう。怪獣はもういないのだから。その事に誰もが安堵していた。

ガツカリしているのは、アメリカ在住のとある怪獣大好き少年ぐらいなものだ。

「全くガツカリだよなあ。怪獣なのに核兵器で死ぬなんて」

エレメンタリースクール
小学 校の教室にて彼は大きな声でクラスメートの男子にそう語り、男子は困ったような表情を浮かべる。男子は自分とは違う意見のようだと知り、彼は眉を顰めた。

同世代の痩せ形と比べ三倍近い恰幅の彼が迫れば、男子は怯んだように身を仰け反らせる。しかしそれでも困ったような顔は止めない。やはり、彼とは違う意見のようだった。

「なんだよ。お前ガツカリしてないのかよ」

「そ、そりやすする訳ないだろ。毒ガスをばら撒く怪獣なんて怖いじゃんか。退治されて良かったよ」

「良くないね！ もっともつとバンバン人を殺さなきゃ面白くないだろ？」

如何にも悪ガキらしい物言いに、男子が声を詰まらせる。怯えだけでなく、軽蔑の意思もひしひしと感じる表情も浮かべた。

しかしその反応は小さな暴君に喜びを与えた。彼は悪ぶりたいタイプの問題児であり、悪者に憧れる子供なのである。

言葉を詰まらせた男子に代わり、彼に反発したのは、クラスメートの中でも特に気の強い女子だった。女子は彼から見て二つ前の席に座っていたが、力強く立ち上がり、鋭い眼差しで彼を睨み付けてくる。彼が無反応でいると、女子は大きな声で怒鳴った。

「ちよつとアンタ！ 不謹慎よ！ たくさんの人が死んだのよ！」

「全然足りないね。折角の怪獣なんだから、何億人も殺さなきゃ面白くないだろ？」

「アニメとか映画じゃないのよ！ 悲しんでる人がいるのに、楽しむなんて酷いでしょ！」

「そいつらが悲しんでいてもオレには関係ないだろ。ガァー！ 殺したりないいいー！」

「……ほんと最低！」

怪獣の物真似をしてみれば、女子があからさまに嫌悪を剥き出しにし、他のクラスメート達も女子に同調する。が、彼を怖がらせるには全く足りない。この無鉄砲で高慢ちきな少年は、クラスメート全員とケンカしても勝てるという、なんの根拠もない自信を持っていた。

彼があまりにも怯まないものだから、女子としても話しても無駄と思っただろう。軽蔑の眼差しを残してそっぽを向き、もう話し掛けてこない。それを『勝利』と感じた彼は、ますます粹がった。自分の席に座るとふんぞり返り、ニヤニヤと笑ってみせる。

……その中で、ふと時計を見た。

既に朝のホームルームが始まる時間だった。このクラスの担任は時間に五月蠅く、何時もホームルームの時間キツチリにやってくる。

なのに今日は時間が過ぎてても来る気配がなく、こんなのは初めての事だった。

「先生、来ないね」

「どうしたんだろう？」

彼より遅れて、周りの女子や、真面目な男子が彼と同じ事に気付き始める。ホームルームの時間は一分、二分と過ぎたが、やはり先生はまだ来ない。

彼としてはラッキーだと思った。先生の長々とした話も嫌いだし、一時間目の算数も大嫌いなのだ。先生が来なくてどちらかの時間が短くなるなら大変喜ばしい。或いは今日の遅刻をネタに、自分が遅刻した時の言い訳に使えるかと思った。

勿論ぼうつとして時間が経つのを待つのも、授業を受けるのと同じぐらい退屈だ。親に買ってもらったスマホを取り出し、ゲームでもやろうとする。隣に座る男子は彼が始めようとしている『悪事』に気付いたが、咎めても無駄と思ったのだろう。気の強いクラスメートの女子は席が前の方であり、彼の姿は見えやしない。

彼は悠々とゲームを始めた。

……始めたのだが、始まらない。

ロード画面から先に進まないのだ。この手のスマホゲームは最初にサーバーの読み込みが行われるものだが、その読み込みが進まないのである。

彼は舌打ちをした。今時のスマホが全て酸素通信であり、酸素通信に不通があり得ない事は彼も知っている。つまり故障しているかと思えない。買ってもらったばかりなのに、今度パパに頼んで店に文句を言っただけ——

「み、皆さん！ 居ますか！」

そう考えていた最中、突然の大声が教室内に響いた。

女子の怒号に怯まなかった彼も、流石にこの大声には驚く。思わず声の方へと振り向けば、そこにはクラスの担任である老いた女性教師が居た。

もしも来たら遅刻してる事を揶揄しようと考えていた彼だが、女性

教師の顔があまりにも鬼気迫るもので声が詰まる。しかしそれがなんだか癪で、彼は一発言つてやろうと口を開けた

「皆さん！ 怪獣が、また現れました！ すぐに避難を始めます！」

直後、女性教師がそう叫ぶ。

出そうとした声が詰まり、彼は何も言えなくなった。

「い、いやあああ!？」

代わりに、怯えきった女子の悲鳴が教室に木霊した。

その叫びを境に、教室内が一気にざわめく。混乱が混乱を呼び、泣き出す生徒も現れた。

彼は言葉を失った。怒鳴られても、睨まれても、嫌われても、全く怖くなんてない。だけどみんなが不安で、パニックになっているところを見ると……凄く、大変な事が起きているような気がして、胸の中がざわざわしてくる。

「落ち着いて！ 怪獣が現れたのは、遠い隣の州の出来事です！ 今から逃げれば大丈夫！ 落ち着いて、すぐに行動しましょう！」

今の彼に、女性教師の『指示』に歯向かうような意識は全く湧かなかった。

クラスメート達が次々に席から立ち、教室から出る。通学鞆は持たないよう女性教師に指示された。彼も大人しく鞆を置いていき、教室から出る。

学校の廊下には、たくさん生徒が居た。階段からは下級生が降りてきていて、びーびーと五月蠅く泣いている。何時もならちよっかいを出そうと思えるのに、今の彼にはその泣き声が酷く不安を煽った。

廊下の生徒達は先生達に指示され、五列に並んで歩かされた。彼も列に並ばされ、有無を言わず歩かされる。綺麗に並び、落ち着いて歩くよう五月蠅く言う教師達は、だけど今すぐ自分が逃げたような強張った顔をしていて、本当に恐ろしい事が起きたのだと伝えているよう。

何時ものようにからかいたい。だけどからかえない。

それがとても居心地が悪くて、彼は行列の正面から目を逸らす。歩き続けながら、彼は廊下にある窓から外の様子を眺めた。まだまだ朝

のホームルームの時間帯。外の太陽は元気に輝き、芝生に覆われた校庭と、白い雲が映える青空を照らしている。

故によく見えた。

大空を飛ぶ、巨大な『蛾』の姿が。

「ひっ」

思わず彼は声を漏らしてしまう。あまりにも唐突、そして予想外であつたがために。

先生は隣の州に現れたって言ったのに。それとも真つ直ぐこの町に飛んできたのか？ いや、いくらなんでもこんなにも早く——

「何よ、あんだだけ強がつてたのにビビってるの？」

混乱のあまり足が鈍っていたのか、後ろから煽るような声を掛けられる。彼が振り返ると、そこには朝の教室で口ゲンカをした気の強い女子が居た。

心底軽蔑した眼差しは朝に向けられたものと変わりないが、一つ決定的に違うところがある。彼が、本当にビビっていたところだ。そしてこの少年は悪に憧れ、ビビるなんて弱虫のする事だと思っている身。

「び、ビビってねえよ！ あ、あそこに怪獣がいて、ちよつと驚いただけだ！」

弁明するために、彼は本当の事を叫んだ。

大人であれば、自らの失態にすぐ気付いたかも知れない。

しかし彼はまだ子供であり、自分のちっぽけなプライドを守るために必死だった。怖がっていると他人に思われるのが我慢ならないという、ただそれだけの理由の行動。その先に起こる事など何も考えていない。

「キヤアアアアアアアアアアアアッ!?!」

だからその後、彼の言葉の真偽を確かめるべく窓を見た気の強い女子が、悲鳴を上げるなんて予想もしていなくて。

女子の悲鳴を境に、避難中の生徒達がパニックに陥るなんて考えてもいなかった。

「うわあああああん!?!」

「助けてえ！」

悲鳴を上げながら、今まで大人しかかった生徒達が走り出す。

彼は恰幅の良い生徒だ。同級生だけでなく上級生でも、身長は兎も角体重で自分より大きな生徒なんてあまり見ないほど。そんな身体付きだから歯向かうクラスメートなんて殆どいなかった。下級生なら尚更だ。

だけど今はそのクラスメートが、同級生が、下級生が、自分を突き飛ばすほどの勢いで走っている。

怖い。彼はハッキリと己の心境を自覚した。それを恥ずかしいとも思わなかった。もう此処は、自分の知っている『世界』ではないのだから。

自分も逃げないといけない。頭ではそれが分かっていたが、だけど怖さに慣れていなかった彼は身体が動かず。

だからこそ、彼は逃げようとしていた方角から聞こえた崩落音に驚く事が出来たのだが。

彼は反射的に音がした方へと振り返る。

校舎の壁が崩壊していた。

……一目で分かる事実を理解するのに、彼は短くない時間を必要とした。分かってしまうと、今度はべたりとその場にへたり込んでしまう。

倒れた校舎の壁、それが崩れて出来た瓦礫の山を境に、生徒の行列が途絶えていた。否、途絶えている訳ではない。行列は確かに続いているのだ。その瓦礫の下に。

海外の事故で、○○人が生き埋め、なんてものはネットやテレビで何度も見てきた。その度に悪ぶりたい彼は「なんだ十人しか死んでないのか」などと心の中で煽っていた。

この瓦礫の下敷きで死んだのは、十人？ それとも二十人？ 少なくとも普段の彼なら満足出来るような数字ではない。

だけど彼は、涙が出てきた。

【ペキ、ペギキギイイイイイ……】

その涙を止めたのは、巨木が軋むような声。

彼は声が聞こえてきた、校舎の窓側を見る。

そうすれば、窓のすぐ近くに居る怪獣の顔がとてもよく見えた。余程至近距離に居るようで、顔で窓ガラスが埋め尽くされている。外の景色が見えない。

代わりに、怪獣の顔がとてもよく見えた。昆虫のような見た目なのに、その目は複眼ではなく、丸みを帯びただけの出っ張りに過ぎないと分かる。体表が木の表皮みたく凸凹していて、近くで見ると動物らしさはあまり感じられない。触角の付け根が動く度、ペキペキと小さな音を鳴らしていた。

そういえば、コイツの正体って植物なんだっけ。ネットに書いてあったな。

至近距離で怪獣を目にした彼は、そんな悠長な事を思えるぐらい、不思議と頭の中が落ち着いていた。股はぐっしりと湿り始めたが、そんな事はどうでも良いと感じる。この怪獣が校舎の壁を倒し、たくさん生徒を生き埋めにしたという事実にも気付いたが、特に恐怖は感じられなかった。

これが達観という感情なのか。漫画に描かれていて、だけど今まで理解出来なかった感覚を、始めて理解した。彼以外にも下敷きを免れた生徒は居て、悲鳴と共にわたわた逃げ出していたが、彼は身体に全く力が入らなかった。

彼と目が合った怪獣は、やがてくるりと身体の向きを変えた。頭が窓から遠退き、外の景色がよく見える。

窓から見えた空には、『怪獣』が飛んでいた。

だけど一匹二匹じゃない。戦闘機のように隊列を組んだ十匹ほどが、びゅんつと空を横切る。そして怪獣の編隊は一つでなく、次々と大空を飛んでいった。少年が目にしただけで五十匹はいるらしい。

怪獣はたくさんいた。軍が核兵器で倒したのも、校舎を襲ったのも、そのうちの一体に過ぎない。

怪獣は、まだ滅びていないのだ。

「……やべえ。すげえ強いじゃん」

ぽつりと出てきたのは、怪獣に対する称賛。死んだと思ったら死ん

でない。それは彼が思い描く、理想の怪獣像なのだから。

ぼんやり見ていたところ、崩れた壁の方からずると音が聞こえてくる。何も考えずその音の後を追えば、巨大な昆虫の『腹』が校舎に射し込まれる最中だった。天井よりも高いその腹は更に校舎を砕きながら、奥へ奥へと侵入してくる。

彼は知っていた。怪獣が腹から毒ガスを撒き散らす事を。何故わざわざ校舎の壁を砕いたのか？ きっと校舎という密閉性の高い建物の中に隠れようとしている人間を確実に殺すため、内側から毒ガスを放出し、校舎内を満たそうとしているのだ。

ならこれから自分は、嘔き出した毒ガスに飲み込まれて死ぬのだろう。

「ひっ……ひい！」

彼はようやく立ち上がれた。プライドも意気地も全部投げ捨て、ただ死にたくないという一心だけで身体が動く。目からぼろぼろ涙を零し、這いずりながら少しでも遠くへ行こうとする。

されど、最早何もかもが手遅れ。

怪獣の腹から大量のガスが放出され、校舎の中が黄色く染まったのは、それから間もなくの事であった。

害悪

数日前インドネシアより出現し、核兵器で倒されるまでの間に一千万もの人命を奪った存在——怪獣は、どうして誕生したのか。科学者は未だその答えを出せていない。こんなにも明白な事は無いのに、自分達のしてきた誤りを認められないからだ。

一部のキリスト教徒はそれが神の裁きであり、故に敬虔なキリスト教徒である自分達は助かると宣っていた。思い違いも甚だしいとはこの事。神が裁きを与えるための存在が、核兵器一発で倒されるとは。天地を創造した神の力は、存外大したものではないらしい。

他にも様々な意見が出ているが、どれも的外れ。答えは明白だ。

自然環境を破壊した事による、自然からの裁きだ。神は神でも宗教家が想像したものではなく、そこに存在する、肉体を持つ神。肉体があるからこそ、核というおぞましい力により討たれたが……されど自然の恐ろしさは、圧倒的な強さなどではない。本当の怖さは何度でも巡り、幾度でも蘇る事。

事実怪獣は昨日、見事復活を遂げた。それも何千という数に増えて。

アメリカは大発生した怪獣に対抗しようとしたが、ここまでの大群を全て核攻撃で倒そうとすれば放射性物質により米国そのものが人の住めない大地と化すだろう。故に通常兵器で対抗するしかなく、しかし通常兵器が通じなかったから核を使った訳なのだから勝てる筈もない。

数の力で圧倒されて米軍は壊滅。人口密集地は毒ガスに汚染され、たった一晩で大勢のアメリカ国民が殺された。犠牲者数は不明だ……数えていられるような暇人がいないのだから。

アメリカを一夜で壊滅させた怪獣達は一部を残してあちこちに飛び去り、世界中に分散。全世界の人間を殺すためだろう。核保有国は他にもあるが、アメリカでも止められなかった相手である。怪獣達を駆逐出来る国などある訳ない。虐殺は世界中で行われ、多くの人が死ぬ。

しかし恐れる必要はない。

怪獣達は地球を汚染する者だけ殺すだろう。何故なら自然には、人間のような無駄はないのだから。ならば地球を汚染していない、自然を守り続ける人間がどうして殺されるというのか。そんな『無駄』な事を彼等はするまい。

故にイギリスの山奥で、自然と共生している自分達は安全なのだ。「だからお前達もこっちに來なさい……と。ふう。歳を取ると、手紙を書くのも一苦労だね」

そうした旨を手紙に書き連ねた老婆は、一筆終えたところで息を吐いた。

……そのままぼうつとしていたら、お昼寝しそうになった事に気が付き、慌てて首を横に振る。机の上に置いてある封筒に手紙を入れ、宛先を書き込み、糊付けすれば準備良し。

老婆は椅子の傍に置いていた杖を手に取り、ゆっくりと立ち上がる。最近痛くなってきた腰をとんとんと叩きながら玄関へと向かい、戸を開けて外へと出た。

老婆の家の外は、森のように無数の木々が立ち並んでいる。

否、森のようなという表現は正しくないだろう。事実此処は森の中なのだ。イギリスでは国土の僅か一割しか残っていない、大変貴重な森林である。

彼女の家はこの森の景色によく溶け込んでいた。屋根から土台まで、全てが木で作られている。塗装などはしておらず、木材の色がそのまま露わとなっていた。雲一つない空からの陽光を浴び、優しい色合いで艶々と輝く。作られた物という意味では間違いなく人工物だが、『自然』を失っていないもの。

先進国では早々お目に掛かれない、素朴な建物だ。尤も、この地域においてこのような家は、数こそ疎らだが珍しいものではない。十数メートルも歩けば、隣の家が見付かる。

「よお、婆さん。何処かに出掛けるのかい？」

故に外へと出れば、こうして通りすがりの人に声を掛けられもするのだ。

老婆は話し掛けてきた三十代の男——筋肉質で如何にも『山男』といった様相だ——に、につこり微笑みながら答えた。

「ああ、息子家族に手紙を出そうと思つてね。こつちに来なさいって伝えるのさ」

「おいおい、大丈夫か？ いや、婆さんの息子が悪い人つて意味じゃないが、その」

「心配するのは分かるさ、どう取り繕ったところで『余所者』には変わりないからね。なあに、向こうも私がどんな生活をしているか知っているんだから、納得した上で来るだろう。そもそも物資以外は、割と都会と変わらん生活さ。案外私みたいにすぐ馴染むんじゃないかね？」

「そういう事ならオレは構わんが……」

肩を竦めてあまり納得していない事を示しつつ、男はそれ以上強く言わなかった。

老婆としても、男の言いたい事は分かる。都会暮らしをしている老婆の息子夫婦も、この地域の住人からすれば、良くて『余所者』なのだから。そしてこの地の住人は、一般的な英国市民とは言い難い存在だ。

実のところ老婆の家があるこの地域は、イギリス政府に行政区として認められていない。

此処はある考えを持った人々が集まり、自らの手だけで作り上げた集落なのだ。その考えとは、「人はもつと自然と一体になるべきだ」というもの。即ち現代のように森を切り開いて開発するのではなく、森と共に生きていく道を選んだのである。

この考えを立ち上げた者——今はこの集落の『村長』をしている男は、この生き方を自然人ネイティブと呼んでいる。老婆や、話し掛けてきた男も、村長が語る自然人としての生き方が正しいと感じ、こうして集落で暮らしている身だ。集落には現在五十人ほどの自然人が生活している。

此処での暮らしは基本的に自給自足だ。森の中で野ウサギや鹿を狩り、山菜や果実を収穫し、川では魚を釣る。畑や畜産もするが、そ

れは自然を傷付けない範囲の、ごく小さな規模で留めていた。老婆も自宅の庭で少しだけ野菜を穫り、山菜と果実、そして川の魚で日々を生きている身だ。

この生き方に近いものを挙げるなら、アーミッシュだろうか。しかし彼等が移民時代……古来の生き方を理想とするのに対し、自然人の生き方は未来へと向かうもの。新しい技術であつても、自然との共生を可能とするものなら取り入れる。集落中心に置かれた太陽光発電施設は、正に最新技術の筆頭だろう。アレのお陰でテレビやラジオ、冷蔵庫や電子書籍も使える。生活水準は都会とそう変わるまい。

とはいえ維持費もただではなく、集落の人々の年金や収入は『集金』され、こうした最新技術の維持に使われていた。快適で自然に優しい生活には、多少お金が掛かるもの。むしろ自然との共生が完全に成し遂げられた日には、自然から生きる糧が得られるため、資本経済が成り立たなくなる。故に今あるお金は、村の皆のためにどんどん使うべきだ。集金額が多い人には何か恩恵があるという訳ではないが、集落の人々からの感謝は得られる。使う事で人に感謝されるのだから、最高の金遣いというものだろう。

これらは村長からの受け売りだ。息子夫婦に宛てた手紙の内容も、村長が語っていた話である。村長は何時も朗らかで優しい人であり、まだ若いのに老人の話にも耳を傾けてくれる。こんな良い人が誰かを騙す筈がないし、誤つてもいないだろう。

……都会の人間にはこうした生き方や考え方が怪しく思えるように、自然人は『自然派カルト』というレッテルを貼られているが。息子夫婦からも騙されているとよく言われたが、少なくとも此処での生活は自分に合っていると老婆は思っていた。正しい事をしていてという実感があると日々を満ち足りた気持ちで過ごせるし、お金の心配をしなくて良いのは楽だ。病気になつたらどうすると息子達は言うが、それで死ぬのは『寿命』だろう。薬という自然にないものを使うと、自然な死に方すら出来ないのだ。

「さてと。それじゃあ私はそろそろ行くよ。私の足腰じゃあ、ちんたらしてたら夕方になつちまう」

「おう、そうか。難ならオレが出してきても良いぞ。ポストまでひとっ走りだ」

「遠慮しとくよ。甘えてばかりで歩かずに行ったら、都会人みたく寝たきりになっちまう」

「ははっ！ それもそうだな」

じゃあな、と手を振りながら別れを告げる男に、老婆も手を振り返す。杖で身体を支えながら、ゆったりとした歩みで老婆は集落外側にあるポストを目指した。

ポストは集落の最も外側に存在している。老婆の家からは、ぎつと五百メートルほど離れた場所だ。ポストと言っても正規のものではなく、集落が独自に置いたもの。日に一度集落の若者が回収し、麓の町へと運んでくれるという仕組みだ。

木々の枝葉の隙間から降り注ぐ光を浴び、ぽかぽかと身体が温まってきた。老婆の足は調子を取り戻し、軽快に道を行く。やはり自分はこの自然の中の生き方が向いていると、老婆はますます実感した。

やがてポストの前へと辿り着いた老婆は、手にしていた手紙をポストに投函。ようやく一仕事を終えた彼女は、視線を高く上げた。

ポストのある場所は小高い丘になっていて、家を建てるために木を切った場所でもある。持続可能な生活のため伐採後はすぐ若木を植えたが、そんなのは精々数年前の事。視界を遮るほど育ってはいない。

お陰でポストの場所からは、遙か彼方にある麓の町が見えた。町と言っても老婆の故郷ではないし、息子夫婦が生活している訳でもない。

しかし自然の中でずっと暮らしていると、人間の世界である『町』がなんとなく気になる時もあるもので。

「……やれやれ。この生活を続けて二年ぐらいじゃ、性根の方は中々変わらんね」

自分が未だ自然人として未熟だと思いつつながら、老婆は踵を返そうとした。

丁度、その時である。

麓の町の上空を、大きな何かが飛んでいる事に気付いたのは。

「……………」

違和感を覚えた老婆は足を止め、改めて町の様子を凝視。

見間違いではない。確かに、町の上空を何かが飛んでいた。遠いが故老婆にはそれがなんであるかよく見えないものの、しかし飛行機にしては随分と低い位置を飛んでいるし……数も多い。十は飛んでいるようだ。航空機の知識など殆どないが、あまりにも密度が高いような気がしてならない。

違和感は疑念へと変わり、老婆は更に注意深く空に浮かぶ影を見る。年老いたとはいえ視力はまだまだ健在。凝視を続ければ、老婆はやがて影の正体に気付く。

怪獣だった。

テレビで散々やっていた、蛾のような姿をした怪獣が町を襲っていたのだ。よく見れば町の上空を飛んでいる影は、黄色いガスを大量に撒き散らしている。あのガスが猛毒である事はテレビでもやっていた。今頃町の中は大惨事を迎えているだろう。いや、もしかするともう誰も生き残っていないのではないか。

だとすれば、今になって彼方から飛んできた戦闘機達は、あまりにも遅過ぎる到着だ。

それでも戦闘機達はミサイルを発射し、怪獣に戦いを挑む。やってきた戦闘機はざっと三十機。数の上では圧倒しているが、怪獣からしたら羽虫の群れでしかないだろう。勝敗は明らかである。

しかし戦闘機達が負ける事は大した問題ではない。そう、本当の問題は別にある。

町を襲っていた怪獣の一匹がこちらに目指すように進んできている……これこそが最大の問題なのだ。

「ひ、ひいつい！」

ついに怪獣は老婆の目前まで迫り、驚いた老婆は腰を抜かしてしまった。尻餅を撞いた影響で腰がぴきりと鳴り、やってしまったと老婆にも分かる。

身動きが取れなくなってしまうた老婆だが、怪獣はその老婆を無視するように頭上を通り過ぎた。まるで目に入らなかつたかのような怪獣の動きに、老婆は一瞬呆けてしまう。が、すぐに得心がいった。自分達は自然と共生している。

怪獣は自然から人類に下された罰だ。ならばどうして自分達が攻撃されるといふのか。自然の恵みに感謝し、自然を壊さぬよう生きていく自分達が殺されるなどあり得ない。

そうだ、あの怪獣は森を飛び越えようとしているだけ。何もしなければ自分達に危害など加えられない。村長もそう言っていて――

老婆は自分が襲われない理由を、頭の中で並び立てる。それら一つ一つに『説得力』を感じ、老婆は少しずつ落ち着きを取り戻した。とはいえ痛めた腰は治らず、夜までに誰かこつちに来てくれないかしらと悩ましく思い始めた

瞬間、爆音が轟く。

老婆は後ろへと振り向いた。何故振り向いたのか？ 背後から音が聞こえてきたからだ。

では、何故音が背後から聞こえてくる？

背後にあるのは麓の町ではなく、自分達が暮らす、自然と共生している村なのに。

「あ、ああ……」

振り返った老婆は、掠れた声を漏らす。

彼女の目に映るのは、地上に降り立った怪獣の姿。テレビで約五十メートルと言っていた身体は、想像よりも遥かに大きなものだった。怪獣は四枚の翅を閉じた状態で、殴り付けるように大きな腕を大地に振り下ろしている。何度も何度も、執拗に。

そして腕が上がる度に、ガラスのようなパネルが空を舞う。

太陽光発電のパネルだ。飛んできた怪獣が真っ先に降り立ち、猛然と壊し始めたのは、この村の生活基盤である太陽光発電装置だったのである。怪獣の攻撃は徹底的なもので、叩き割ったパネルを更に細かく砕くように殴り続けていた。絶対に再利用させまいという強い意

志を感じさせる。

老婆は混乱した。怪獣が壊しているものは、確かに人間が豊かな生活を送るために作り出した、完全な人工物であるが……だけどそれは太陽から降り注ぐ光により発電するもの。二酸化炭素などの温室効果ガスなんて出さないし、放射性物質だって使っていない。自然の力を借りているだけの、自然を傷付けない発電だ。

なのに、どうして怪獣はそれを目の敵にする？

「ペキ、ペキイイイイイイイイイイ……！」

呆然と眺めていると、やがて怪獣は高らかな鳴き声を上げる。喜びに満ちたその叫びに、自分のした事への後悔や悩みは一切感じ取れない。

そして一通り鳴き終えた怪獣は、くるりと老婆の方を振り向く。

それはきつと偶々か、或いは飛んだ時に偶然目に入ったのを覚えていたとか……そういった理由なのだ。老婆は思った。怪獣と向き合った老婆は、自分の心の中からずっと恐怖心が消えていくのが分かる。

老婆は悟つたのだ。此処が自分の死に場所なのだ。

諦めてしまえば、怖くなかった。村の中では混乱した人々が逃げ惑っている姿も見えたが、ああして恐怖に震えるより、余程充実した死を迎えられるだろう。

ただ一つ、未練があるとすれば。

「何が、気に入らないんだい……？」

怪獣が自分達に向けてくる、『不満』のような感情。

自分の感じた感情が、本当に怪獣が抱いているものかどうかわかるには分からない。怪獣は言葉による返答は行わなかった。

代わりに返されたのは、羽ばたきと共に舞い上がる黄色いガス。

老婆の意識は答えを知る事なく、この世から消え去った。

増員

イギリスが怪獣に襲われた。

その一報を聞けば、大陸側に暮らすヨーロッパ人は誰もが恐怖に震えた。いくら海を隔てた島国の話とはいえ、その距離は『ヨーロッパ』という括りを越えない程度のもの。アメリカからイギリスに渡る事が出来た生物が、ラ・マンシュ海峡を渡れないというのは、いくらなんでも夢の見過ぎというものだ。

故にフランスに怪獣の大群が現れても、大半の人々にとってそれは予想外の出来事ではなかった。なかったが、しかしだからといって冷静に対応出来るかは別問題。怪獣出現と同時にフランス全土は混乱に包まれた。誰もが恐怖し、生き延びる術を求めて右往左往するばかり。

———そんな恐ろしい怪獣に会おうとしながら、うきうきした足取りをしている植物学者の中年男性は、あらゆる意味で変人と言えるだろう。

彼はにこやかに笑いながら、どんどん山を歩いて行く。天然林ではなく人の手により作られたこの森は、真つ直ぐな針葉樹が等間隔に並んでいて行く手を遮る事が無い。下草も殆ど生えておらず、足に何か引つ掛かる心配もいらぬだろう。

自然保護的観点を抜きにすれば、とても歩きやすい良い山だ。

「先生い……待って、ください……は、早過ぎます……」

そんな山でも、素人には辛いらしいが。

彼が振り向けば、随分と下の方に『同行者』の姿が見えた。若くて麗しいと世間的に評されるであろう、つまり美女だ。

女は小さなリュックサックを背負い、その手に撮影用のカメラを持ってしている。荷物はたったのこれだけ。服装も登山向きの動きやすい格好をしている。若い女なので身体付きは少し華奢だが、不健康な細さではないだろう。

対する植物学者である彼の背負う大きなリュックサックは、女のものよりずっと大きい。持ち前の身体も、麗しい女よりも軽そうながら

いやつれている。服装は登山向きのものだが、腰にはたくさん試験管やノートが備え付けられ、歩きをほんのり邪魔していた。手ぶらではあるが、それ以外は女よりも大きな負荷が掛かりそうなものばかり。

なのに、どうして女の方が先にバテているのか。

「どうしました？ まだ歩き始めたばかりですよ？」

「さ、三十分は、歩いてます……なんで、先生は、そんな、余裕で……荷物、私より、たくさん持って……」

「学者には二通りいます。研究室にこもるか、フィールドワークが主体か。私は見た目こそこんなのですが、後者でしてね！」

元氣よく答えながら、彼は女の下へと向かう。戻ってきた彼に女――

――若い写真家は、苦笑いを浮かべた。

彼等が山を登る理由は一つ。この先に、怪獣がいるかも知れないからだ。

植物学者である彼が怪獣を一目見たいと思っていたところ、女性写真家から申し出があった。世界で騒ぎになっている怪獣がフランスにも現れた、怪獣の写真を撮りたいので植物の専門家としてアドバイスをもらえないか……と。どうやら駆け出しの写真家で、一発大きな山を当てたいと考えていたらしい。

なんとも命知らずだと思ったが、されど命知らずは彼も同じ。怪獣がフランスに現れたと聞いた彼は、その怪獣を至近距離で見たいと考えた。怪獣と出会って生き残れる自信はないが、もし生還した時、駆け出しとはいえプロの撮影した写真があれば研究に役立つだろう。万一の時には囿にもなるし……なんて考えは向こうも少なからずあるだろうが。

ともあれ二人の利害は一致し、怪獣に会う事とした。

そして二人はある山を登る事にした。此処に怪獣の秘密があると信じて――尤も山登りを提案したのは植物学者である男の方で、写真家の女は未だ詳しい話を聞いていないのだが。

「……それにしても、なんでこの山を登るのですか？ 私、何も聞いてないのですが」

「おっと、すみません。急いでいたから後回しにしちゃいましたね……実は此処、怪獣が現れた場所なのですよ」

「怪獣が現れた？」

話しながら、彼はゆっくりと歩き出す。写真家の女は渋い顔をしながら、彼の歩みに合わせるように山を登る。

「ここ数日、怪獣が世界各地で大量発生したのはもう誰もが知るところです。アメリカ、イギリス、そして今日は此処フランスに現れました」

「ええ、そうですね」

「じゃあ、奴等はどんなルートで移動していると思いますか？」

「……？ それは勿論アメリカから海を渡ってイギリス、イギリスから海を渡ってフランスに」

「違います。彼等は海は渡っていない」

女が相槌を打ちながらした答えを、彼はばつさりとは否定する。女が目が、少しでも好奇心で光った。彼はその光に気付き、にこりと微笑む。

「実はアメリカからイギリスへと渡った怪獣は、確認されていないのですよ。イギリス軍と精通している友人から聞きましたね。だからこそ、イギリス軍は突然現れた怪獣にてんてこ舞いだっただけなのにすが」

「……それは、イギリス軍が怪獣を見逃した訳じゃなくて？」

「あり得ない、とは言いませんよ。どんな事でも事故は起こりますからね。でも怪獣にはステルス性もなければ隠れるような行動もしない。そんな物体をうっかりでも見逃すというのは、実に不自然です」

「なら、怪獣はイギリスから突然現れた？ まさかそんな事——」

「そしてフランスでも、怪獣の襲来は突然起きました。イギリスがやられているってニュースが流れていた時、精強なフランス軍は暢気に昼寝をしていたと思いませんか？」

彼の言葉に、女は答えを返さない。

怪獣出現の一報があつたとしても、咄嗟に警戒体勢を強化する事は難しいかも知れない。しかしまかり間違つても緩めはするまい。そ

して平時の警戒体勢であつても、ステルス性能を持たない怪獣を発見する事は難しくない筈だ。

それでも見落としたという事は、恐らく怪獣は、本当に『突然』その地域に出現している。

インドネシア出現時は空を飛んで国々を渡ったが故に、怪獣は飛行していくものだとなんは考えているが……逆なのだ。その飛行移動の方が『異例』であり、インドネシアのように突如姿を見せるのが本来の出現方法なのだろう。

「この山の麓にある町は、もう怪獣が襲撃した後です」

「ええ、そうですね……立ち寄った時、死体がごろごろ転がっていましたから」

「その怪獣が現れた場所がこの山。地元民の一人がSNSに動画を投稿しました。その映像を見る限り、本当に、森の中から現れたようでしたよ」

彼はスマホを取り出して「見ますか？」と尋ねれば、写真家の女はこくりと頷きスマホを受け取る。

流した動画に移るのは、山を覆う人工林の中から怪獣が飛び出してくる光景。それも何十という数が一斉に、である。

動画を見た女は目を大きく見開き、否定するように、首を横に振った。

「……じゃあ、此処は怪獣の巣なのですか？」

「どうですかね。確かに此処は大きな森ですが、今でも普通に林業が行われています。怪獣がどの程度の速さで成長するかは不明ですが、巢なんてあつたらとっくに見付かっているんじゃないですかね」

「なら、一体何が……」

「それを解き明かすのです。我々の目で」

彼の言葉に女は頷いた。疲れきっていた筈の歩みは、すっかり元気になっていったようだ。

「なんとも奇妙な存在ですね……正に怪獣です」

「獣じゃなくて植物のようですがね」

「まあ、そうですね。だからあなたに協力を求めた訳ですが……

ニュースでは断定したように話していましたが、根拠とかはちゃんとしているんでしょうか？」

「二応は。アメリカで撃墜された個体はなんらかの方法で自爆し、跡形もなく吹き飛びましたが、米軍の人海戦術でなんとか破片を回収出来たようで。解析の結果その肉片はセルロースの塊……植物の持つ材質だと分かったのです。まあ、それ以上の事を調べる前にアメリカが壊滅した訳ですがね」

「……他には？」

「怪獣が撒く毒ガス。アレはどうやら青酸系の毒物のようで。青酸系の物質は植物がよく合成するものです。これはさっきの説を補強する程度のもんですが」

「成程……だとすると、あの怪獣には知性なんてないのでしょいか」

「ん？　なんでそうなるのです？」

写真家の女の意見に、今度は彼の方が困惑する。女も目をパチクリさせ、そして自分の意見を述べた。

「いえ、植物なんですよね？　なら、脳がないと思うのですか」

「成程。だけどそれは脳を神聖視し過ぎていますな。脳の代わりになる、なんらかの機能が発達してるかも知れないでしょう？」

「なんらかってなんですか」

「さて、それは分かりませんね。だけど人間の知性すら、脳細胞同士の単純な電気信号のやり取りが集まった結果でしかありません。似たような仕組みがあれば、思考力は芽生えると考えべきでしょう。怪獣は人間を殺すために、町をぐるっと一周するような行動を見せる訳ですし、知能はあるかと」

「本能とかなんじゃないですか？」

植物学者としての視点と、一般人としての視点。二つの意見をぶつけないながら、二人は前へと進み続けた。

無論この間、彼としては気を抜いたつもりなどない。女の方も周りを警戒していた事は、話しながらも辺りを見回していた事から間違いない。何しろ此処は怪獣が突然現れた場所。もしかしたら新たな怪獣がこの地で生まれようとしているのかも知れないのだから。

にも拘わらず二人は酷く驚く事となる。

森を歩いていたら、突如眩い光が行く先に現れたのだから。

「!? なん……」

「隠れて!」

驚きから足を止めた彼に、女が指示を出す。その指示に従って彼は真っ直ぐに伸びた針葉樹の影に隠れ、女も別の針葉樹の影に隠れた。

それから二人はこそそと木の陰から顔を出し、自分達が行こうとしていた場所を見る。

彼等の前には、煌々と輝く光の塊があった。

いや、光というのは正確ではないかも知れない。それはなんらかの球体状の物体なのだからだ。光って見えるのは降り注ぐ陽の光を反射しているからだろう。

その球体に向けて、小さな光の粒が集まっている。小さな粒は森のあらゆる方角から飛来し、球体に吸い込まれるようにして一体化していた。粒を取り込んだ球体は、決して急激とは言えない速さであるが、留まる事なく巨大化している。

植物学者の男はごくりと息を飲み……思いきって、偶々自分のすぐ横を通ろうとした粒の一つを捕まえてみる。

粒は、やはり光つてはいなかった。捕まえたそれは光り輝く繊維であり、ぐるぐると絡まって球体を作っている。綿埃のようなもので、だからこそ空気中で漂う事が出来たのだろう。

そして彼は思いきって、その輝く繊維を舐めてみた。

……口の中の温度ですつと溶け、液体になってしまった。味はない、と思つたすぐ後に微かな甘さを感じる。唾液と反応して糖質に変わったのだとすれば、この繊維の正体は――

思考を巡らせる男。しかしその思考を纏める時間などなかった。

ずしん、という力強い音と揺れが辺りに響く。

バタバタと羽ばたく音色と共に、足下の落ち葉が吹き飛ぶほどの風が流れた。メキメキと樹木が軋むような音も奏でられ、やがて粒の流れも止まる。

【ペキ、ペキキキキキキキ……!】

そして聞こえてくる、恐ろしい鳴き声。

実物を聞くのは男も始めて。されどテレビなどの映像で何度も聞いてきた。今更忘れもしないし、聞き間違えもしない。

怪獣だ。

男達は怪獣誕生の瞬間に立ち会ってしまったのである。何処からともなく飛んできた粒子が集まり肉体を形作るとは、なんともファンタジーな誕生方法。だが、現実には起きたのだからそれを認めるしかあるまい。

そしてこの現実には、人間の命運すら左右する。

怪獣が突然現れる謎の答えがこれだ。どうりで隣国に出現した個体群をどれだけ観察しても、襲撃を察知出来ない訳である……：本当に何も無い場所で突然誕生しているのだから、気付きようがない。

しかし気付けない理由が分かったというのは、大きな前進である。少なくとも怪獣達の奇襲には『手品』があると分かったのだから。手品があるならそれを前提にした対策を練る。そして手品の『タネ』が明らかとなれば、怪獣の出現そのものを阻害出来るかも知れない。希望を語るなら、タネから怪獣の弱点が判明する可能性だつてあるだろう。

逆に自分達がこの情報を持ち帰れなかった場合、人類は今しばらく『手品』がある事すら知らぬまま怪獣と戦わねばならない。それは不利どころの話でなく、ルールも知らずに対戦ゲームをするようなものだ。ビギナーズラックすら起こらないだろう。

「(こりや、何がなんでも生きて帰らないとなあ)」

自分達の命と人類の命運。ずしりとのし掛かる『責任』により、冷や汗が彼の額から噴き出す。

しかしながら現状、生き延びる事はそう難しくないと彼は考えていた。少なくとも彼等は現れた怪獣にまだ見付かっていないし、見付かるような音も出していないつもりだ。怪獣はこちらの存在に気付かぬまま、大勢の人間が暮らす町へと向けて飛び立つ筈。

写真家の女も、自分の見たものの重要性が分かっているのだろう。写真を撮ろうともせず、木の陰に隠れたまま男の方を見て、無言のま

ま頷く。そして息を潜めてじつとしていた。

動かなければ良い。動かず、音を立てなければ——彼はそう考えた。

それを打ち砕くように。

女が隠れていた木が、突然倒れた。女が隠れている側に向けて。

女は悲鳴一つ上げなかった。上げる暇などなかったのだから。全力で振るわれたハエ叩きのような速さで倒れた木は女の背中を押し、そのまま女を地面に叩き付ける。倒れた木は深々と地面に食い込み、女の姿は、地面から僅かに出ている手以外は見えなくなった。

その木の上に乗せられているのは、巨大で凶太い節足動物的な脚が一本。

脚は執拗に、さながら農家が害虫を踏み潰すように、ぐりぐりと木を押し潰す。木は更に深く沈み、女の手が僅かに沈む。その木の下にある身体がどうなっているのかなど、考えるまでもない。

念入りに踏み付ける脚を見て、彼は感じた。一見して節足動物のようだが、外皮はブナ科の植物に似ていると。節部分は確かに節足動物的な構造だが、動く度に僅かだが気体の漏れ出る音がするので、筋肉ではなくガスで動いているようだ。

間違いない。コイツは、確かに植物だ。少なくとも動物じゃない。

待ち望んでいた怪獣との肉薄を、彼はついに体験したのだ——

尤も、喜びに浸る余裕もなく彼は頭を全力で動かす必要に迫られたが。

何故怪獣は女の居場所が分かった？

木を押し倒した先の一撃は、念のためにしたという印象ではない。木の裏に人間が隠れていると、確信を持っているかのようだった。粒が集まっていく最中にこちらの姿を見られたのか？ だとしても木の陰に何時までも潜んでいると確信出来るものではあるまい。大体姿を見た時、怪獣は光り輝く塊に過ぎなかった。目も鼻も触覚もない向こうが、こちらの存在を知るなどあり得ない。

それこそ、誰かがこちらの居場所を伝えていない限りは。

「(そうだ。そういえば、怪獣は酸素通信を行っているって話じゃない

か。だとしたら、誰か、いや、何かと交信しているんじゃないか!?」
密告した奴が居る。そう思って彼は辺りを見渡した。しかし人影はおろか、ドローンのような機械の姿も見えない。

いや、そもそも人工的に作られたこの森には動物の姿すら影も形もなく――

「あ……」

微かに、男は声を漏らす。

酸素通信。

甘い繊維。

動物のいない森。

様々なピースがかちりと嵌まる。一つの大きな絵が男の頭の中に出来上がり、彼はその絵を俯瞰するように眺めた。決して上手な絵ではないし、奇抜過ぎて世の人には受け入れられないだろうが……手元のピースから出来上がった絵には説得力推論がある。

そしてこの絵は絶望を示した。もしも彼の作り上げたものが正しければ、人類に勝ち目などないのだから。

「……ペキギイギイイイイイ」

彼が考えを纏めた頃、すぐ傍から樹木が割れるような『声』がした。彼はなんの恐怖もなく、静かに声の方へと振り返る。

思った通り、そこには巨大な怪獣の顔があつた。複眼、のように見える出っ張りが男に向けられ、まるで見られているかのような感覚に陥る。植物だとしたら視力なんてない筈なのに。

或いは、それこそ植物学者の偏見なのかも知れない。

彼を目にした怪獣は、彼の前でゆっくりと脚を上げ始めた。見えていないなら、もしかすると盛大に外すかも知れないが……期待するだけ無駄だろう。

彼は逃げなかった。逃げればその瞬間踏み潰されると分かっていたので、やるだけ無駄だと考えていた。そして何より、どうせ死ぬならこの目に焼き付けておきたかった。

この星の、正統な支配者の姿を。

「……勝てないなあ」

諦めてしまえば、目の前の『大いなるもの』に畏怖と敬愛すら抱いてしまい。

されど怪獣の脚は、自らの信徒をなんの躊躇もなく踏み潰すのであった。

習得

「まだ戻れないって、どういう事だ！」

人目を憚らずに出した大声に、周りに居る人々がざわめく。そうした周囲の反応は声を出した当人である初老の男にも聞こえていたが、それでも彼の興奮は中々冷めない。肩が上下し、鼻息も荒くなっていた。

「で、ですから、安全が確保出来ないうちは立ち入り禁止でして」

彼の行く手を遮るのは若い陸軍兵士。彼の鬼気迫る顔に気圧されたのか声が震えているものの、それでも退こうとしないのは命令故か。

この若い兵士に当たっても仕方ないのは、しがたない一般人である彼にも分かる。だがそれでも怒りをぶつけずにはいられない。もう三日も、生まれ育った故郷に戻る事が出来ていないのだから。

目の前にある故郷の町の周りには軍隊により黄色いテープがぐるりと張られ、等間隔に並ぶ軍人達が行く手を遮っていた。彼の後ろには何百という市民が居て、彼と同じく軍人達に足止めされている。

二月としては珍しく強い日差しは、舗装すらされていない大地に立つ市民を容赦なく照り付けていた。寒さの厳しい時期ではあるが、今日は無風という事もあってかなり暖かい。道の端に茂る雑草は喜ぶように葉を広げているが、市民達人間は慣れない暑さに苛立ちを募らせている。

尤も、彼ほど怒り狂っている者は他にいないのだが。

「安全の確保だど！ 今更一体何が危険だと言うんだ！」

「か、怪獣が襲撃した場所は毒ガスの影響があるため、すぐに立ち入る事は」

「騙されんぞ！ 怪獣の毒は半日あれば消えるという話じゃないか！」

怪獣がこの町に来たのは何時だ?！」

彼が怒鳴るように問えば、兵士は口を噤んでしまう。人の心など当然見えやしないが、少なくとも彼には、その反応が凶星を突かれたようにしか見てなかった。

確かに、兵士達が立ち入りを禁じた町——男達の故郷であるドイツの片田舎の町は怪獣の襲撃を受けた。

ドイツとフランスは隣人の間柄。お隣さんで大きな事件が起きれば、自分にもその災禍が降り掛かるのは当然の事だろう。そしてフランスもイギリスもアメリカも、突然湧いてくる怪獣の兆候を発見出来ていない。ドイツ軍も同じく見付けられないと考えるのが自然だ。しかし絶対に見付けられないというのなら、それなりの対処法はある。

怪獣がフランスに現れたその日、多くのドイツ国民は翌日の仕事を休みにし、何時でも避難出来るよう準備していたのだ。政府からも避難準備が推奨され、余程悪徳な企業以外ではほぼ全員が『休暇』を取って自宅待機をしている。軍や警察も早期発見は諦め、スムーズな避難を優先。監視人員を国境ではなく、国内に集結させていた。

そしてフランスが襲われた翌日、怪獣の群れがドイツを襲った。やはり完全な避難は出来ず、大勢の犠牲者を出したが……他イギリスやフランスと比べて、かなり被害を抑えられたのも事実。人々が町から離れた森などに身を隠していると、探し出して殺すのも効率が悪いと考えたのか、怪獣達はさして追跡もせず散っていった。

ドイツから怪獣の姿はほぼ消えた。それが三日前の事である。

男が暮らす町も怪獣の被害に遭った。毒ガスを撒き散らされ、何千人も死んだが……生き延びた人の数の方が多い。男も家族共々無事だった。

そうして生き延びたからには、生活を再建しなければならない。彼は工場長であり、雇っている社員達を食わせるためにも工場の稼働が必要だ。被害の程度を早く確認しなければ、再開が何時になるかわかったもんじやない。なのに軍人達が町を封鎖し、中に入れてくれないのだ。

そして彼が兵士に向けて言った言葉は、決してハツタリや勢いに任せたものではない。

テレビやネットで流れている情報だ。怪獣が撒く毒は青酸系のものであり、こうした物質は空気中の二酸化炭素と反応してすぐに無毒

化するらしい。これまでの被害地域の情報から判断するに、半日ほどでほぼ無毒化するそうだ。そこから更に二日以上経過したなら尚更である。

今の町に、一体どんな危機があるというのか。

「軍人さん、オレは何もアンタに意地悪してる訳じゃない。危険だ危険だ言うからには、どんな危険があるか教えてくれと言っているんだ。それを教えず危ない危ないだけ言って、誰が納得するんだ？」

「お気持ちに分かります。ですが我々に情報を開示するか決める権限はないのです。お願いですから、お引き取りください」

彼は少し落ち着いた口調で説得するも、軍人は申し訳なきように拒む。彼はくわつと怒りが込み上がり……けれども今度は、爆発させなかった。

「……そうだな、お前さんは上司の命令を聞いているだけだよな」

「……申し訳ありません」

「いや、こつちこそすまなかった」

頭を下げて謝り、彼はこの場を後にする。兵士は彼が急に退いた事でキョトンとしていたが、今度は彼の後ろに居た大勢の一般人に詰め寄られ、それどころではなくなった。

——さて。彼は真つ直ぐ、力強く歩いていった。

先程軍人に謝ったのは、演技でもなんでもない。あの若造は一兵卒であり、上官からの命令を守ろうと必死なのだ。軍隊なら一般人には言えない秘密だったたくさんあるだろう。それを強く詰め寄せられたからで答えるようでは、国の安全など守れまい。あの若造は立派な軍人だ。守られる側の国民でありながら困らせてしまった事は、大変申し訳ないと思う。

ただ、だから諦めるかどうかは別。

彼は町から少し離れた、町外れへと移動する。大勢の市民が町の前には集まっただけで、軍人達の視界は遮られている状態だ。町への侵入を阻もうとする軍人は、彼の姿が見えていない筈である。

そしてその軍人達の殆どは地元出身ではなく、何処かの基地から派遣されてきた者達。

ならば町の傍を流れる川、その川にある『下水道』の出口から町へと侵入出来る事など、知る筈もないだろう。

「……よし。誰も居ないな」

川の傍に来た彼は、下水道の出口を見る。下水道の出口は直系二メートルほどの大きさがあり、成人男性でも易々と通れる広さがあった。

勿論普通の成人男性は、こんな下水道など通りはしない。精々町の悪ガキが使うものであり、彼もまた分別の付かない悪ガキ時代に使ったきりだ。しかし今の彼は大切な職場に入れない怒りにより、ちよつとばかり冷静さを失っている。下水道だろうがなんだろうが、町に入れるならなんでも使うつもりだった。

それでも一応大人なので、下水道から水がたくさん出ていれば諦めもしたが……今日は水が出ていない。このところ雨など降っていないのだから当然だった。彼は念のため周囲を見渡し、誰も居ない事を確かめてから下水道へと忍び込む。

下水道を照らすのは、マンホールから降り注ぐ、或いは道路脇の側溝から射し込む陽の光のみ。しかし昼間ならば存外明るいもので、数十年前の記憶を頼りに彼はどんどん歩く。しばらく歩いたところで、彼は見覚えのある梯子を登り、側溝の蓋を開けて地上に顔を出す。

外には懐かしい町並みが広がっていた。

故郷の町であると、彼はすぐに理解した。念のため辺りを見回してみたが、周囲に軍人の姿はない。幼少期と比べ随分と重くなった身体を這いずるように動かし、彼はついに地上に立つ。

まずは一仕事終えた。彼は息を吐き、今まで無意識に強張らせていた肩がすんと下がった。

しかし町に入り込むのはあくまで目的の前段階。本来の目的は自分の工場が無事なのか確認する事だ。彼は駆け足で、自分の工場がある方へと向かう。

……特段、町の様子に変わりはない。

家が壊されている訳でもなく、怪獣の死骸が転がっているでもない。脱出前に見たのと変わらない町並みである。確かに怪獣の攻撃

は毒ガスが主で、直接建物を叩き壊すような真似はあまりしないと聞く。ならばどうして軍人は、町への立ち入りを禁じているのだろうか？

違和感はもう一つある。嗅ぎ慣れない臭いがある事だ。強い臭いではないが、つんと鼻を突くような感覚。まるで学生時代の実験室で嗅いだ薬品のような……

考え込みそうになる彼だったが、しかしその考え事はすぐに終わる。彼が這い出た排水口から工場まで、走れば五分と掛からない道のりなのだ。工場にはすぐ辿り着いた。

そして辿り着いた工場で、彼は自らの思考を止めさせられる。

中身が剥き出しになるほど破壊された、自分の工場を見てしまったのだから。

「そ、そんな……なんで、オレの工場が……！」

彼は呆然としながら、ただただばやくばかり。それは勿論職場が悲惨な……破壊された壁から、砕かれた配線や機械類が見えてしまう……状況だからというのもある。

されど何より彼の心を揺さぶったのは、ここまで酷い被害を受けているのが自分の工場だけだったからだ。これまで通ってきた町並みは殆ど無傷だったのに、自分の職場だけが壊されている。

科学者なら、そこにある種の興味を抱くかも知れない。しかし科学者ではなく、しがない工場長に過ぎない彼には、困惑しか覚えられなかった。

やがて困惑は怒りへと変わる。

何故自分だけがこんな理不尽に遭わねばならないのか。何故自分の工場を狙ったかのように壊したのか。

理由を教えろ——怒りが導き出した衝動はどうしようもないほど感情的で、彼は殆ど考えなしに工場内へ足を踏み入れる。

すると彼の怒りは、今度は一瞬にして混乱へと移り変わった。

工場内に謎の植物が生えていたからだ。

彼は一般人と比べれば、植物には詳しい方だ。仕事柄全くの無関係ではいられないため、納品先と話が出来る程度には知識が必要だから

である。それでも学者と比べればお粗末なものであり、自分の知らない植物などいくらでもあると自覚していた。

しかし、それでも彼は思う。此処に生えている植物は、どんな科学者でも見た事がない代物だと。

植物の高さは、ぎつと五メートルはあるだろうか。大きさだけなら木のようなだが、茎は青々としており、どうやら木本化——木の枝や幹のようになる事——はしていない。バナナのような、巨大な『草』だと思われる。

植物は葉を広げており、屋根があつた場所から降り注ぐ光を浴びてキラキラと緑の煌めきを放つ。葉の大きさは凡そ十センチと、草そのものの大きさと比べてかなり小さい。数もたったの十数枚。枝は生えておらず、真つ直ぐ伸びた茎から小さな葉が直接生えている格好だ。

そして根元部分はぶくりと大きく膨らみ、縦横二メートルほどの球体を作っている。引き抜かれたカブを彷彿とさせる姿だ。膨らんでいる部分の組織は非常に柔軟らしく、息をするようにゆつくりと伸縮を繰り返している。植物も生き物とはいえ、ハッキリ動く姿はなんとも生々しい。

何もかもが奇妙な、不気味と言つても差し支えない要素で形成された存在。植物の知識がなければ「気持ち悪い」の一言で片付けられたかも知れないが、なまじ知識があるものだから、彼は大きくその心を揺さぶられる事となった。

しかし動揺していられたのはほんの僅かな時間だけ。すぐに強い怒りが込み上がってきた。

「オレの工場をこんな滅茶苦茶にしやがって……!! てめえも怪獣の仲間か!」

怒りをそのまま声に出し、彼は行動を起こす。踵を返して工場の外に出るや、敷地内にある小さな物置へと向かった。物置は怪獣の興味を惹かなかつたようで、避難前と変わらぬ姿をしている。物置には防犯のためダイヤル式の鍵が付けられているが、彼はこの工場の主。鍵の番号は当然知っていて、なんの苦勞もなく開ける。

物置の中には様々なものが置かれていたが、彼が迷わず手を伸ばす道具は一つ——斧だった。

斧は立派なもので、人間に向けて振るえばホラー映画よろしく簡単に頭を跳ね飛ばせるだろう。無論彼に人間を殺すつもりなど毛頭ない。殺すのは忌々しい雑草のみ。

彼は手にした斧で、工場内に生える植物を切り倒そうと考えただ。

「やってやる！ ふんっ！」

工場内に戻るや、彼はなんの躊躇もなく斧を謎植物に叩き付けた。斧で切られた植物は深々と傷付き、出来た傷口から黄色い汁を飛び散らせる。汁は酷い刺激臭を放ち、怒りに燃える攻撃者の顔を顰めさせた。

もしも彼がただの伐採者ならば、この臭いで切り倒す意欲も失せたかも知れない。されど彼は伐採者ではない。工場を奪った化け物退治に闘志を燃やす、復讐者なのだ。化け物がどんな抵抗を見せたところで躊躇う理由などない。

「ふんっ！ ふんっ！ ふんっ！」

怒りに任せて斧を振り、彼は少しずつ植物に傷を付けていく。根元が二メートルも膨らんでいるため正しく大木を切るような苦労だが、それでも彼は止める気などなかった。工場を奪われる事への怒りは、それだけ強かったのだ。

……もしも、彼があとほんの少しだけ冷静だったなら。

きつと気付いただろう。例えばこの謎の植物こそが、軍人達が人々を町に入れないようにしていた原因だと。怪物がなんらかの理由で植え付けたものであり、ろくなものではあるまいと。そんな原因の周りに、何故その軍人達がいなかったのかと。

そして自分が切り倒そうとしている植物には既に深い傷が幾つも付き、その傍にはボロボロの……ゴミクスにしか見えない布の切れ端が落ちている事にも気付けたかも知れない。

しかし彼は気付けなかった。気付かないまま斧を植物に斧を叩き付けていき——

不意に、植物が震えた。

次の瞬間、彼は頭から液体を浴びる事となる。

その液体は空を向いていた植物の先端から、どぼどぼと溢れ出していた。先端は正確に彼の方を向いていて、この液体を浴びせてやろうという意思を感じさせる。

その『意図』を、彼は身を以て知る事になる。

「う、ぎいやあああああああ!？」

彼は悲鳴を上げた。己の身を焼く、激しい痛みと共に。

彼の皮膚はどんどん爛れ、服もボロボロと崩れていく。肉は形を失い、剥き出しになった骨もすぐに溶けていく。

その反応は外から眺めれば、恐ろしく強力な酸によるものだとすぐに理解するだろう。しかし強酸に溶かされている当人に、そんな悠長な考えを巡らせる余裕などない。

どうして自分がこんな目に……

最後に抱いた疑問に答える者は誰も居ない。

肥料工場の敷地に、どろどろに溶けた男の身体は染み込んでいくのだった。

没収

怪獣の『再出現』から二週間が過ぎた。

今や怪獣は世界の何処にでも現れている。アメリカやヨーロッパだけでなく、アフリカやオーストラリア、そして此処中国でも一部地域で確認された。

新たに現れた怪獣の強さや行動は、インドネシアに出現した個体と左程変わっていない。毒ガスにより大都市を壊滅させ、軍隊の攻撃などものともせずに突き進み、太陽光発電所やCCSの現場などを破壊し……正確な数は分からないが、死者は世界で二億人を突破したとも言われている。

しかし人類もやられっぱなしではない。

怪獣出現のパターンを解析し、森林や草原から突如現れる事を確信した。また攻撃行動は反撃時と都市部に限られ、森林などの自然環境には殆ど行わない、行われる時は発電所など高度な人工物がある場合だと分かった。毒ガスの主成分が青酸系である事も判明し、治療薬の開発も始まったという。

そしてこの怪獣が植物性の存在である事も確定した。現在、世界各国で怪獣の『防除』方法を模索している。中国共産党も全面的に協力し、怪獣という人類共通の敵を倒そうとしている……

「ふん。植物風情にこんなにもやられるなんて、軍隊つてのも案外大した事ないな」

そのような事が書かれている新聞記事を読んだ男は、鼻で笑いながら悪態を吐いた。

彼は中国のとある農村に暮らす、生粋の農家である。もう四十にもなるが、なんやかんや縁がなく、当人も一人の方が気楽という事で結婚はしていない。収入は農村の中でも中の下で、住んでいる家も狭苦しいアパートだ。しかし元々衣食住にあまり興味がなく、難しい事を考えるよりも身体を動かす方が向いている彼は、親から継いだこの仕事をそこそこ気に入っていた。

そんな彼は、植物というのは弱者の代表格だと考えていた。

身を守る術など何もなく、動く事も考える事も出来ない。獣どころか虫にも食べられ続け、人間様がその気になれば機械で根こそぎ絶滅させられる。彼が育てているキャベツだって、人間様が農薬や肥料を与えねばまともな育たない。

彼は教養がないのであまり科学に詳しくないが、自然界には生態系と呼ばれるものがあり、弱肉強食の世界であると理解していた。つまりあらゆる生物に食べられる植物というのは、この世で最も弱い生物という事だ。対して人間は植物どころか動物だって滅ぼせる、世界で一番強い生き物。

生き物としての格が違うのだ。怪獣だろうがなんだろうが、植物なんかには負ける道理はない。

「ま、そのうち薬かなんかで倒されるだろう……そろそろ家を出ねえとな」

新聞を畳みながら、彼は自分の畑に『出勤』する準備を始めた

途端、外からサイレンが聞こえてくる。

救急車か？　とも思う彼だったが、そのサイレンは普段聞き慣れているものとは明らかに音色が違う。しばし聞いて、彼はこれが役所が村全体に放送する際、注目を集めるために流す音だと気付いた。

「……緊急事態発生。緊急事態発生。怪獣の出現が確認されました。怪獣は現在北西方面から接近中——」

そして放送が告げたのは、彼が今し方馬鹿にした相手。

いざ脅威が襲来し、彼は……特段慌てなかった。

怪獣の研究は進み、今では対策も色々と施されているのだ。例えばこの村では中古品とはいえガスマスクが配布され、家族全員分に行き渡っていた。彼も自分のガスマスクを役所から受け取っており、それを装着する。どの程度効果があるかは——政府は絶対安全と謳っているが正直怪しい——不明なものの、精神的には落ち着く事が出来る。

落ち着けば次に何をすべきか見えてくるもの。彼は筆筒の上に置いていた、役所から届いた紙を手取る。

紙に書かれているのは、もし怪獣が現れた時に向かうべき『避難所』

の位置だ。避難所といっても公園や学校ではなく、近隣にある森の中。怪獣が森を攻撃する事はまずないのだから、森の中に逃げ込めば攻撃を避けられる。市街地のど真ん中の公園より、怪獣の誕生地点である森の方が安全なのだ。

怪獣の動きは非常に速いので、完全に被害をゼロにする事は難しいだろう。しかし日に日に被害は小さくなり、そう遠からぬうちに微々たるものとなる筈だ。恐るべき災厄は、ちよつと大規模な台風程度になろうとしている。

そうして余裕が出来ると、自分の日常を妨げられた事への不満が募るもので。

「全く、面倒な奴等だ。そろそろ作物を収穫しないとイケないのに、これじゃあ今日は仕事になりやしないな」

彼はそうぼやきながら、避難を始めた。

それから一週間後。

「全廃棄って、どういう事ですか!？」

彼は困惑と憤りを露わにした。

彼が声をぶつけたのは、自宅の玄関までやってきた役所の職員。彼の半分も生きてなさそうな若造と、彼と同じぐらいの歳であろう中年男性の二人だ。上司と部下と思われる。

部下の方は彼の声にビビったのか後退りするものの、上司の方は怯んだ素振りもない。堂々と彼と向き合い、力強い言葉で告げた。

「検査により、この地域で収穫されたキャベツから基準値以上の発ガン性物質が検出されました。規定によりこの村から出荷されたキャベツは全廃棄。現在畑に植わっているものも検査し、発ガン性物質が確認され次第廃棄します」

「廃棄って……な、なら、補償は」

「現時点では未定ですが、検討はしています」

何が検討しているだ、そう言って出した事なんてない癖に――

彼はそう思ったが、眼前の役人共に言っても仕方ない。この二人はあくまで役所の指示に従っているだけなのだから。

しかし、だから受け入れるという訳でもないが。

「待ってくれよ。俺の畑は、確かに金持ち連中が買うような有機なんちやらじゃねえけどよ、普通の肥料と薬しか使ってないんだ。去年と同じように使っていて、去年はなんにも問題なく出荷出来た。周りの家の奴等だつて同じさ。なんで今年、うちのキャベツだけが駄目なんだ？」

「いえ、あなたのだけという訳では。むしろ国中の作物が」

「おい」

彼が抗議すると、部下が何かを話そうとし、上司に窘められて止められる。部下は慌てて口を閉ざしたが、言おうとしていた事は彼も察した。

どうやら自分の身に起きた惨事は、中国全土で起きているらしい。被害者多数となれば行政はますますケチりそうだ、という自分の将来への悲観が脳裏を過ぎる。しかしそれ以上に気になるのが、どうして国中でこんな事が起きているのか、という点だ。農薬会社が事故でも起こしたのか？

それとも、先日この村を襲撃した怪獣の仕業なのか。

あり得る、と彼は思った。怪獣は毒ガスをばらまく。彼が暮らすこの村でも怪獣は毒ガスを撒き散らし、逃げ遅れた年寄りや親子が十人ほど死んだ。毒ガスの効果は丸一日も経てば治まり、村人は戻れるようになったが……分解された毒が土の中で変化して発ガン性物質に変わったのではなからうか。

などと分析したところで、学のない自分には分からないと彼はすぐに諦めた。考えたところで、調べる方法などないのだから無駄というもの。それに判明したところで、収穫したキャベツから発ガン性物質が消える訳でもない。

今考えるべきは、これからの生活についてだ。

「……分かった。もう出荷した分の廃棄は仕方ないし、畑の検査も受け入れよう。だけでもし畑のやつからも発ガン性物質が出て、廃棄はせず返してくれないか？　うちで食べようと思うからさ」

「え？　いやいや、食べちゃ駄目ですって！　発ガン性物質があるん

ですから！」

「ちよつと食べたぐらいじゃ死なねえよ。だけど飯が買えなくて腹が減ったら一週間で倒れる。そうだろう？ お前達の所為で収入がないんだから、それぐらい許してくれても良いんじゃないか？」

「い、いや、でも」

彼の言い分に部下はしどろもどろ。なんとか止めさせたいが、言葉がないのが如実に表れていた。

それがなんとも奇妙だと彼は感じる。発ガン性物質というのは勿論恐ろしいものだが、一口食べたなら全身に皮膚ガンが！ というような代物ではない。含有量にもよるが正確には発ガンのリスクを上げるといっただけであり、一口二口では死なないどころか、ガンになるかも怪しいものなのだ。食べない方が賢明なのは違いないが、飢えて死ぬよりは万倍マシである。

何故それを止めるのか。後でこつそり売ろうとしている事がバレたのか？ ネットの通販などを使えば誤魔化せると踏んでいたのだが……

「……申し訳ありません。私達の言い方が悪くて、誤解をさせてしまいました」

考え込んでいると、今度は上司が出てきた。

誤解をさせていた、とはどういう意味か。彼は首を傾げる。

「正確に言えば、この地で生産されたキャベツに含まれていたのは、発ガン性物質と呼べるものではありません……毒物です。人間にとつて、致死的なレベルの」

そして上司の言葉により、疑問は混乱へと変わった。

「は？ ……ど、毒ってなんの話だ？」

「この地で生産されたキャベツは有毒化しています。含まれているのは確かに発ガン性物質なのですが、あまりにも濃度が高過ぎる。五十分グラムも摂取した場合、嘔吐や腹痛が起こり、最悪死に至ります。ガン以前の問題です」

「な、何を言うんだ！ キャベツが、そんな毒なんて……！」

「難なら食べてみますか？ あなたが食べる分には、止めません」

反論しようとするも、上司の強気な言葉に気圧される。ハツタリに決まってる……そう思うが、しかしもしも本当だったなら……

彼の口は、ごくりと息を飲んだだけだった。

「……なんで……こんな……」

「原因は不明です。ですがここ二週間の間に中国全土、いえ、世界各国で確認されている現象との事です」

「世界中で……」

「学者が言うには、植物というのは動物や細菌の被害を受けた際、様々な物質を合成して身を守るそうです。例えばアカシアという木は、キリンなどの草食動物に食べらるとタンニンという物質を作り出し、身を守ります。タンニンは有害な物質であり、大量に摂取し続けた場合、その動物は死んでしまうそうです。今回、作物でそれが起きたのではと言われていますが、ここまで大規模なものは例がなく、詳細は不明です」

彼が漏らした疑問の言葉を、上司は丁寧に説明してくれた。落ち着いて話し方のお陰で彼の方も少し冷静さを取り戻せたが……やはり納得まではいかない。いや、何をどうすれば納得出来るというのか。食べてすぐに影響が出るようなものとなれば、こっさり売る事なんて出来やしない。補償なんて期待出来ないのに、これからどうやって生活すれば――

頭の中を駆け巡る不安。首を括る自分の姿が末路として過ぎった、そんな時だった。

何かが、走ってくるような音が聞こえてくる。

彼はなんの気なしに音の方へと振り返った。そしてその目を大きく見開き、飛び跳ねるように仰け反ってしまう。

何故なら今し方目を向けた方角から、見知らぬ人間が何十人と来ているからだ。しかも全員が血眼で、一目で暴徒だと分かる。

暴徒達は四方八方に散りながら、道々にあつた農家の家へと押し入る。家の中から悲鳴が上がり、ものが壊される音が聞こえた。やがて家に押し入った者達が出てくると、そいつ等は両手に段ボール箱を抱えていた。

略奪だ。彼はそれをすぐに理解した。理解したが……全く飲み込めない。何故こんな片田舎で略奪が起きるのか？ 彼は困惑から立ち尽くし、役人二人も呆然とその場に立ったまま。

啞然としている三人に、暴徒達は容赦なく押し寄せた。

「おらあー！ 食い物出せー！」

そして暴徒の中で、一番血気盛んな若者が怒鳴り散らす。

食い物を出せとは、この飽食の時代になんとも情けない脅し文句だ。しかし暴徒達の誰もがそれを恥じるでもなく、今にも殴り掛かりそうなほど怒りを全身に滾らせていた。

彼は混乱と恐怖の中、この暴徒の正体を察する。

暴徒達は都会人だ。

役人達は言っていた。この二週間で世界中の作物が有毒化していると。発ガン性程度ならばまだしも、明らかに毒性のあるものを市場に出せる筈もないから、それらは廃棄された筈。つまり供給が一気に途絶えたのだ。収穫した野菜がスーパーなどに並ぶ時間は、輸送経路にもよるが凡そ丸一日。日持ちするものでも二日ぐらいには出される。二週間も経てば市場から野菜は消え去るだろう。肉や魚でその穴を産めようとしても、一〜二週間で増産出来るものではあるまい。都市から食べ物が激減した事は、容易に想像出来た。

しかしまだ米や小麦など穀物がある。これら穀物は国がたつぷりと備蓄し、一年間は国民が飢えないよう備えてあるものだ。食のレパートリーは激減しただろうが、まだ飢えには見舞われていない筈。こんな事で略奪に走るなど、いくらなんでも民度が低過ぎる。これではまるで中世の蛮族ではないか。

「落ち着いてー！ どうしてこんな事を……！」

上司も疑問に思ったのか、暴徒達に問う。すると暴徒達はこれを隙と見たかのように、ぐるりと三人を取り囲んだ。もう、逃げ場がない。「お前等政府とぐるになって野菜を出し惜しみしてるんだろ？ 穀物の倉庫が怪獣によって叩き潰されて、価格を吊り上げるために！」

「は？ 穀物倉庫が……？」

「今朝のニュースでやってたんだ！ 知らないなんて言わさない！」

「ネットで拡散されたんだ！ お前等農家が野菜を隠し持つてゐるって！」

弁明しようとする、暴徒達は次々と罵声を浴びせ掛ける。その怒りは彼等をますます困惑させた。

彼は今朝のニュースを見ていない。だから暴徒達の言い分が本当かどうかは分からないが、もしも本当なら、状況は自分達が考えるよりも遥かに悪いものだろう。野菜も肉も魚も足りない中、更に穀物までも失ったのなら、いよいよ食べ物がない。そこに悪質なデマが加わり、人々の不安が爆発したのだろう。

まさか怪獣は意図して穀物倉庫を狙ったのか？ それとも偶然なのか？ 怪獣が大量発生すれば、偶々そうした事も起きるだろうが……あまりにもタイミングが悪過ぎる。

「お、落ち着いてください！ この野菜は、みな有毒で食べられないんです！」

あまりにも理不尽な状況に、部下は悲鳴のような声で弁明する。が、それは暴徒達の怒りを煽るだけ。

「嘘を吐くな！」

「がふっ!？」

部下は暴徒の一人に殴られ、倒れてしまった。良い一撃が入ったらしく、すっかり伸びている。しばらくは立ち上がれまい。

「わ、分かった。こ、この家の中に、キャベツがある。持っていけ！」

上司は倒れた部下に歩み寄りながら、暴徒達に屈した。

「あ、案内する。その、収穫したキャベツがあるのはこつちだ」

睨み付けてくる暴徒達に、彼もまた降参した。どうせ毒入りなのだから渡しても惜しくない。それで命が助かるなら、むしろ儲けものというものだ。

彼は五人ほどの暴徒達を自宅の倉庫へと案内する。そこには出荷準備を終え、十以上の段ボール箱に詰め込まれたキャベツがあった。暴徒達はそれを見るや段ボール箱に駆け寄り、箱を乱暴に開け始める。

取り出される、丸々と育ったキャベツ。

役人達の話が確かならアレらも有毒化していて、一銭にもならないだろう。仮に無毒だとしても、これだけじゃ大した額にもならない。だけど折角育てたものを、こんな乱暴に奪われるのは、一農家として心が痛んだ。

しかし、感傷に浸る暇はない。

「……う、うぐうええ……!?」

倉庫の中で、突然呻きが聞こえてきたのだから。

彼は反射的に呻きの方を見遣る。そこには、小太りの若造が蹲っていた。若造は口からどぼどぼと吐瀉物を撒き散らし、大きく見開いた目は苦悶を物語る。

そして若造の傍には、如何にも一齧りしたような歯形の付いたキャベツが転がっていた。

どうやらこの小太りの若造、我慢出来ずにこの場で味見したらしい。本来ならその意地汚さに驚くところだろうが、しかし男はもつと別のところに驚愕する。

早過ぎる。

若造がキャベツを齧ったのが何時かは分からないが、暴徒達を倉庫に連れてきてからまだ五分も経っていない。どれだけ長くとも食べてから僅か五分でこんな、『毒物』を喰らったかのような反応になるなんて彼は想像もしていなかった。

こんなのは有毒化なんて生温いものではない。何かもつと、悪意のある結果としか思えない。

「おい!? どうした!?」

唾然とする彼だったが、暴徒の一人が小太りの異変に気付いた。しまった、と彼が思った時にはもう襲い。

喜びに満ちていた暴徒達は、一気に怒りを燃え上がらせた。

「テメエ……!」

「ま、待て!? や、役人が言ってただろ!? そのキャベツは毒で……」
「うるせえ! 嘗めた真似しやがって!」

彼は弁明、というよりも正論を述べるも、怒り狂った暴徒達は話を聞かない。

ついに暴徒の一人が、倉庫に置かれていた角材を掴んだ。そしてじりじりと、彼に躡り寄ってくる。

何をするつもりなのかは明白だ。

「や、止め……」

懇願すれど、激昂した暴徒は止まる気配すらなく。

自分の育てたキャベツに翻弄された男の最期は、仲間である筈の人間の手により下されるのだった。

追撃

「……こりや駄目だなあ」

中東イエメンに暮らす漁師の青年は、ぼやくように独りごちた。一人乗るのがやつと木造船ボートと共に海の上を漂いつつ、彼は今し方引き上げた網に目を向ける。網はびつちよりと濡れていたが、魚の姿は一匹として見られない。

今日は不漁だ。とはいえ漁とは自然相手の仕事であり、付近に魚がいなければ獲れないのは当たり前。先進国が持つソナーなどの機器を搭載していない船では、何時間も漁をして一匹も獲れないなんて事はさして珍しく出来事ではなかった。

流石に、三日続けてとなると色々困るのだが。

「……やっぱり、アレの所為なのかなあ」

続いて彼が目を向けたのは、自宅がある陸地の方。

ほんの一キロ先にある陸地には、掘っ立て小屋のような家々……そこに隣接するように高さ十メートル近い物体が乱立していた。物体は天辺付近に数枚の葉を生やし、根本付近がまるで巨大なタンクのように膨らんでいる。木のようにも草のようにも見えるそれは海沿いにずらりと並び、なんとも言えない存在感を示している。

怪獣がこの漁村——恐らく通り道に過ぎず、本命はその先にあつた首都なのだろうが——を襲撃した翌日、何時の間にかやら植えられていた植物だ。青年が暮らす漁村では『怪獣の木』と呼んでいる。

『怪獣の木』が生えてから、魚が全く獲れなくなった。『怪獣の木』は根本付近から常にどろどろしたものを吐き出しており、これが海に流れ込んで魚を殺している……と多くの村人は考えている。青年含めた少数の村人は、単に怪獣を恐れて魚が逃げただけと考えていたが、いずれにせよ生えていて気持ちの良い代物ではない。何よりデカいし数も多く、おまけに臭いので生活の邪魔だ。海沿いとはいえ一応村の中なので無視する訳にもいかない。

しかしながら、伐採出来ないのには訳がある。

『怪獣の木』は傷を付けられると、強力な酸を吐き出してくるのだ。

浴びれば人間など簡単に溶かされてしまう……勇ましく切り倒そうとした村人二名の犠牲により明らかとなった事だ。ならばいつそ燃やしてしまえば、とも考えられたが、火の粉が飛ばば村に引火しかねない。邪魔者を追い払うため家を焼くなど、本末転倒でしかなかった。

結局何も出来ず、悪臭と邪魔臭さを我慢して共存するしかない。されど三日も魚が獲れないとなると……『魚は逃げただけ派』である彼としても、あの木の関与を疑いたくなる。

「……仕方ない。今日はもう帰るか」

諦めたようにぼやきながら、彼は船上の網を畳んでいく。その最中脳裏を過ぎるのは、やはり今後の生活についてだ。

彼の暮らしは決して裕福ではない。貯金なんてろくにないし、売ってお金に出来るような財もない。父と母は病で早くに亡くし、兄弟などの身内もない独り身だ。妻や子供もないのでそういう意味では気軽だが、こういう時代わりに何かを稼いでくれる人もいない。

強いて助けてもらえそうなのは友人ぐらいだが、その友人も今や遠い人だ——別に亡くなつてはいないが。彼は漁村から遠く離れた、内地の森に移り住んだだけである。

友人曰く、世界的に都市から森へと移り住む人が増えているという。理由は怪獣から逃げ、生き延びるため。怪獣は人の住処……都市などの発展した場所……を優先して攻撃している。町で暮らす事は、何時か怪獣に襲われるのを待つに等しい。

加えて怪獣が通った場所では作物の有毒化が引き起こされ、食糧生産が滞っていた。最近では牧草すら有毒化しており、放牧により家畜を育てる事すら出来ない。そして怪獣には知能があるのか、穀物倉庫などの国家備蓄を率先して破壊。食糧不足という、近代国家が想定していない大災厄が引き起こされた。食べ物があれば人は生きられない。都市では略奪が相次ぎ、殺人も横行するようになっていく。

そうした怪獣や暴徒から逃れるため、森へと移り住むのだ。森は決して安全な場所ではないが、木の実や獣など、原始的な食べ物は手に入る。今のところ山菜や果実の有毒化は見られず、食いつなぐ事は可

能。そのため犯罪が横行する町よりはマシだからと、多くの人が原始的生活に回帰しているらしい。

……尤も友人のこの話も、自称大富豪という怪しい輩から聞いたものなので、何処まで信じればいいのかと彼は思うのだが。しかし確かに、海よりは森の方が暮らしていけそうな雰囲気はある。少なくとも森には、あの不気味な植物は生えていないようなのだから。だけど。

「……だからって、俺は魚を獲る以外の暮らし方は分からんがな」

どれだけ安全でも、生き方が分からねば荒野に放り出されると変わらない。

父から教わった漁以外何も知らない彼は漁具の片付けが済むのと共に、家がある陸地の方へと船を進ませるのだった。

……
……
……

丘に着いた彼を待っていたのは、ざわつく村人達だった。

村人達が囲うのは、一本の『怪獣の木』。村人の数は四十人ほどで、それはこの村に残る大人の数とほぼ同数であった。

何をしているのか？　と思う彼だったが、すぐに自分の考えを改めた。村人と木の距離はかなり離れていて、村人達は木に触れる事など出来ないだろう。つまり何かをしているのではなく、何かを眺めているという事だ。

彼は自分の船をしつかりと陸地にある杭に結び付け、それから村人達の下へと駆け寄る。

「どうした？　何かあったか？」

「……なんか、村の外からやってきた奴等が『怪獣の木』を調べ始めた。なんでも、政府から派遣された科学者達らしい」

「科学者？」

声を掛けた村人の一人から教えられた話に首を傾げ、彼は人混みの向こう側を覗き込もうと背伸び。幸いにして彼は村人の中では背が格段に高く、人混みの向こう側を覗き見る事が出来た。

村人達が集まった先には、三人の作業着を着た者と、迷彩服姿で武装した三人が木の傍に立っていた。作業着姿の者達は刃物のようなものを使ったり、注射器を用いたりして、慎重に『怪獣の木』から何かを得ようとしている。

確かに科学者っぽい。周りに居るのが軍人の護衛だとしたら、政府から派遣されたというのもあながち嘘ではないのだろう。

……嘘でなくても、彼はこの国の政府をあまり信用していないが。一体何を調べているのか知らないが、下手に触って『怪獣の木』が何か、例えば毒ガスなどを吐いたらどうするつもりなのか。

村人達が集まり、包囲しているのも、奴等が余計な事をしないようにするための見張りか。銃を持つ者が三人もいるので、四十人とはいえ非武装の村人に勝てるか甚だ怪しいが、抑止力にはなるだろう。

ならば、彼としても村人に協力しない訳にはいかない。村から離れる事も検討していたが、故郷に愛着はあるのだ。村で好き勝手するのを見過ごすつもりはない。

彼は村人の人混みに混ざり、最前列へと向かう。野次馬ではなく見張りである村人達はすんなりと彼に道を譲り、彼は人混みの最前列に到着した。

「やはり、硝酸イオン濃度が桁違いに高い」

「ドイツの事例と同じだ……まさか、怪獣はハーバー・ボツシユ法を？」

「いや、アレはアンモニアを合成する。硝酸は硝酸アンモニウムの分解過程で発生するものだが、こっちは硝酸を直に合成しているようだ。似て非なる、未知のプロセスが使われている」

「肥料成分としては、アンモニアの方が向いている筈だが……」

「それは日持ちの問題だ。吸収物としては大した違いじゃない」

一番前まで行くと、作業着姿の学者達の話が聞こえてきた。アンモニアやらショールサンやらがどんなものか彼は知らないが、何やら科学的な話であり、此処に来たのが科学者というのはやはり嘘ではないと感じる。

しばらく観察していると、科学者達は地面の土を採取し始めた。と

いうより『怪獣の木』よりも土の方をよく調べている。どうやら本題は土らしい。

「……こんなものだろう。引き上げよう」

「協力感謝します」

科学者達は地面の土を袋に詰めると立ち上がり、村人達に礼を伝えた。戸惑う村人達だったが、科学者達と軍人はそそくさとこの場を後にする。

よく分からないが、調査は終わったらしい。

「……終わったか」

「やれやれ、一体何をしていたんだか」

「土なんて持って行って何をするのかしら？」

部外者が立ち去ると、村人達はそそくさと解散する。

彼もまたこの場を後にした。

科学者達の言葉の意味が気にならない訳ではない。しかし彼等の語る難しい言葉の意味など分からず、周りの村人に訊いたところで誰も答えを知らないだろう。この村には学校がなく、読み書き出来る者すら少数派という有り様なのだから。だからといって科学者達を問い詰めたところで、理解出来る答えが返ってくるとは思えないし、そもそも自分なんかに丁寧に教えてくれる筈もない。

分からず終いであるが、されど彼は少しだけ安堵していた。

科学者達の話していた事の大半はよく分からなかったが、一つだけ彼でも知っている言葉があった。

肥料成分としては、という下りだ。

どうやら『怪獣の木』が出しているものは肥料らしい。この漁村で畑作は殆ど行われていないが、肥料を撒けば作物が育つ事は彼だって知っている事。そしてその肥料が海に流れれば海藻や藻を育て、それらを餌にする魚も増える筈だ。

つまり『怪獣の木』のお陰で魚は減るところか、増えるという事になる。これを植えた怪獣の目的は知りようもないが、そうなれば有り難い事この上ない。

「ま、気楽に考えておこう」

彼はそう思いながら、帰路について。

翌朝、彼は大いに喜んだ。

大海原を漂う船の上には、今し方引き上げた網と、その網に絡まるたくさんの魚がいた。魚はどれも大物で、売り物としても自分が食べる用としても申し分ない。

前日予想していた通りの大漁だった。いや、或いは逆に予想外か。まさか予想した翌日にこんな大漁を迎えるなんて、流石に思いもよらなかったのだから。

「これなら、三日は食い物に困らないな」

引き揚げた魚に満足しながら、彼は周りを見渡す。

近くには同じ村の漁師が同じく漁をしていたが、いずれの船も陸に向けて走り出していた。まだ漁を始めて二時間も経っていないのに帰る理由は、二つしかない。一つは船や漁具が壊れたから。もう一つは、大漁過ぎてもう魚を獲れないから。

たくさんの船が一斉に帰るとなれば、後者の可能性しかない。自分だけでなく他の船も大漁だったようだ。今頃村人達は満面の笑みを浮かべ、今日の豪華な夕食を夢想しているだろう。

この大漁が何時まで続くかは分からないが、そんなのは怪獣が現れるよりも前の漁でも変わらない。日常的な出来事だ。思い返せば三日間坊主となるのも、珍しくはあっても皆無ではなかった。

世界は怪獣が現れる前と大して変わっていない。彼はそう思った。だとすると、村から出た人間の方が苦勞していそうだ。漁業以外殆ど興味もないような彼ほどではないにしても、どの村人達も基本的には海での暮らし方しか知らない。いきなり森の中で暮らすのは、相当大変な筈だ。

なら、こつちは大丈夫だと手紙の一つでも出した方が良いかも知れない。そう考えつつも、彼は一つの問題に突き当たる。

「文字が分からんな……」

ろくに学校に通っていないなかった彼は、文字が書けなかった。

友人もまた文字など読めなかった事を思い出し、彼はくすりと笑い

ながら沖へと戻るのだった。

希望が無惨に砕け散るのに、丸一日も掛からなかった。

大漁だった翌日。この日も青年は海へと出た。しかしその表情は喜びに満ちた笑顔ではなく、眉間に皺が寄った苦悶の顔。

彼が乗る船には、何匹かの魚が揚げられている。数は昨日よりずっと少ないが大きさは悪くない。何時もなら、十分な漁獲だ。網を何度か投げ込めば、また同じように魚が獲れるだろう。

しかしこのような魚が何匹獲れても、喜ぶなんて出来やしない。

「……コイツも死んでる」

何故なら今日揚がったものは、全て死んだものなのだから。

おまけに死んでから時間が経っているらしく、生臭さを漂わせていた。触れば肉がぶよぶよしており、中には爪を立てただけで腐臭のする汁が噴き出すものまでいる始末。死んだばかりのものならまだどうとでも出来るのだが、これはもう手の施しようがない。これでは売り物にもならないし、自分で食べるのも危険だろう。

そして悪臭が漂うのは、魚だけではない。

「くそつ。さつきからなんだ、この臭いは……」

彼が悪態を吐きながら覗き込むのは、自らの船を浮かべている海。

海は、濃い緑色に染まっていた。

元々この辺りの海は、観光地のように綺麗なものではない。しかし時折大きな魚がたくさん獲れる程度には、豊かで汚れていない海だった。少なくとも昨日まではそうだった。

なのに今や海は地平線の彼方まで緑一色。船底すら見通せない有り様である。何よりキツイのが漂ってくる悪臭だ。こんな吐き気のある臭い、海沿いの村で二十年近く暮らしている彼でも生まれて始めて嗅いだ。こんな汚い水の中では、魚も皆死んでしまうだろう。

彼以外の村人は、殆どがこの腐った臭いに耐えられず、船すら出さなかった。船を出してもこの有り様なのだから、最初から漁に出なかつた者達が正解だ。彼は肩を落とし、食べられない魚を海に捨てていく。

今日は史上最悪なぐらい駄目だった。

しかし彼は前向きだった。自然というのは気紛れである。時には曾祖父さんすら見た事がないような出来事を、あたかも何時もの事のように引き起こす。そうした異変は確かに大事件だが、やがて解決するものだ。

此度の事もいずれ解決する。彼はそう信じた。

——そう信じたかった。

されど海の汚れが消える事はない。

あまつさえ日に日に緑は濃くなり、悪臭は強さを増していく。

魚が獲れない日は何時までも続いた。

海水を口にした子供が次々と死んだ。

飢えと渇きが村を襲った。

村の中で略奪や殺人が起き始めた。

村人は次々に村を発った。

そして……

そして時は流れ、村に怪獣がやってきてから一月が経った。

燦々と陽が降り注ぐ大海原に浮かぶ船で、彼は漁をしていた。彼の頬は痩せこけ、目は虚ろ。手足に力も入っていない。大して重くない網を持ち上げるのすら苦勞し、引き揚げる時には三度も休憩を挟まねばならないほど疲弊している。

何故なら、もう五日間何も食べていないのだから。

家に蓄えていた燻製などの保存食は尽きた。金なんてない。あつたところで穀物も家畜も市場に出回っていない今、食べ物なんて野生動物の肉だけ。その肉すら供給が全く追いつかず、どうしようもないほどの高値となっている。富裕層すら買い渋る値段であり、貧しい一市民では買うという選択すら出てこない。

食べ物を得るには、生きた魚を獲るしかない。それ以外の方法など、彼は知らないのだから。

「……………」

何も掛からなかった網をもう一度投げながら、彼は虚ろな眼差しで海を見回す。

彼の周りに船はない。村にも人の姿はない。魚が獲れなくなった海に見切りを付けて立ち去るか、或いは飢えでいなくなるか、村人同士で殺し合うか……様々な理由でいなくなった。村に残るのは、彼ただ一人。

もうこの村が駄目だというのは彼にも分かる。そして彼はまだ死にたくない。友人のように自分も村の外に出て、食べ物があるという森へと行きたかった。

しかし元気な時であればまだなんとか出来たかも知れないが、飢えで体力の落ちた今では森へと向かう道中で力尽きるだろう。退き際に誤ったと言えはそれまでだが、魚獲り以外知らない彼にとって、村の外へと出る事は高い壁だった。

ここから生き延びる術は最早一つだけ。

なんとしてもここで魚を獲る。小さくても良い。不味くても構わない。少しぐらい腐っていても我慢しよう。何かを食べて、飢えを満たして、体力を回復させて……ちゃんと歩けるようになったら村が出る。

どれだけそれが儚い希望でも、青年にはこれしか出来ないのだから。

故に彼は網を投げ続ける。魚のいない網を、死骸すら掛からなくなつた漁具を、何度でも。

力をなくした身体が、腐りきつた海に転げ落ちるその時まで……

自壊

「仕事を、辞めようと思う」

ロシアのとある町に暮らす若い女性は、自宅リビングにて夫からそのようなに告げられた。夫の言葉を正面から受けた彼女は、「そう」と一言だけ返す。

夫は彼女と向き合ったまま、淡々と話し始めた。

「この時勢で働いて、金を得ても、なんにもならない」

「うん。そうだと思う。今じゃ一月分のお給料でも、パン一つ買えないし」

「だけど森には行かない。ロシアの森で生き抜く方法を、ボクは知らないから。猛獣から身を守る術はおろか、食べられる野草すら分からない」

「うん、それは仕方ないわ。私だって知らないもの」

「……不甲斐ない夫で、済まない」

一通り話すと、夫はぼろぼろと泣き始めてしまった。妻である彼女は、優しく夫を抱き締める。

彼女は、こうなる事を既に予想していた。

怪獣と呼ばれる生物が現れてから、早くも二ヶ月が経っている。一時は怪獣の対処方法も分かってきたと言われていたが、とんだ思い上がりだった。怪獣は人間が思う以上に賢く、様々な捌め手を用いてきたからだ。作物や牧草の有毒化、穀倉の的確な破壊、『怪獣の木』による海洋汚染……あらゆる方法で人類から食糧を奪い去った。

毒ガスや物理的に殺されるといふ被害は、出現パターンや行動からある程度回避出来る。しかし食糧不足は回避不可能だ。未だ核兵器以外で怪獣を打ち倒した例はなく、核兵器で怪獣を倒しても放射能汚染された土地から食べ物は何も得られない。穀倉や畑を襲撃する怪獣は、どうやっても止められないのである。

怪獣に直接殺された人間は推定五億人を突破したと、国营テレビで報じられていた。これだって決して馬鹿に出来ない――第二次世界大戦の『総犠牲者』数すら五千五百万人程度なのに――数字だが、

しかし怪獣により引き起こされた人間同士の諍いで失われた命は十五億を超えたらしい。しかもこれはほんの二週間前の、まだテレビ番組が流れていた時期の話。今の総死者は三十億に迫るか、或いは超えているのではなからうか。

少し前に聞いた世界人口は九十億人。三十億人死んでも、まだ三分の二以上残っているとさえなくもないが……僅か二月で三分の二まで減らされたとすれば、果たして人類は八ヶ月後の年末まで生き延びているのだろうか？ 彼女には、とてもそんな自信はない。

食糧供給が改善される見通しは立たず、治安は悪化していくばかり。こんな情勢で経済が立ちゆく筈もない。働いて稼いだところで、その金で何を買えというのか。一番欲しい食糧は、何処にもないというのに。

ならば夫が仕事を辞めるのは、当然の行いだらう。彼女もそれを望んでいた。

「良いじゃない、仕事なんてしなくても。これからは毎日、ゆつくりと暮らしましょう」

「……ああ。そうだな」

彼女は夫に囁き、夫もこくりと頷いて受け入れる。

人が人らしく生きていくのが難しくなった昨今、一つの『ブーム』が生まれていた。

それは『好きなように生きる』という事。

森の中は過酷な世界だ。何時野生動物に襲われるか分からず、安心して眠れる場所はなく、食べ物だって満足に得られるとは限らない。技術がなければ、たちまち苦しみの中で命を落とすだろう。

どうせ命を落とすなら、最期まで人間らしく生きる方が良いではないか。泥水を啜ってでも生きるなんて、そこらの獣と変わらない。自分の生き方を決め、自分で死に方を決めてこそ人間だ。

怪獣に戦いを挑むも良し。

盛大に飛び降り自殺をするも良し。

冷蔵庫にある缶詰を、後先考えずたらふく食べるも良し。

……つまるところこれは、享樂的な自殺である。回復する兆しのな

い世界に失望した人々の間に、この怠惰な終末思想が広がっていたのだ。彼女とその夫もまた、緩やかな死への誘いに惹かれていた。「よし、それじゃあ今日は冷蔵庫にあるもの全部使っちゃいましょ。豪勢に行くわよ」

「賛成だ。久しぶりに、良いものが食べられそうだよ……あ、そうだ」「ん？ なあに？」

彼女が訊き返すと、夫は目を逸らし、照れたように頭を搔く。

「料理、手伝わせてくれるかい？ 今までずっと、任せきりだったから」

ようやく発した言葉は、ちよつとばかり卑屈な物言いで。

妻である彼女は唇を尖らせる。

「そういう事は、もうちよつと早く言っただけだったわ」

それから発した言葉は意地悪で。

「ただど頬を赤らめ、目許を弛ませていたものだから、気持ちには夫に筒抜けのようだった。」

……………

……………

……………

「……本当に、食べちゃったわねえ」

翌日、彼女は哀愁漂う顔で冷蔵庫を眺めた。

中身は空——という訳ではないが、食材と呼べるようなものは殆どなかった。あるのはジャガイモの欠片や底が見えるピクルスの瓶詰め、半分も残っていないワインとマヨネーズぐらいか。肉に至っては切れ端すら見当たらない有り様である。

昨晩は本当に思うがまま料理を作り、思うがまま食べて食材を使い果たした。食べたものは今頃と血となり肉となり便となっているだろう。最早吐き出す事すら出来やしない。

昨日の自らが選んだ行いに、彼女は深々と項垂れた。

快樂に任せて一日を過ごす。

口で言うのは簡単だが、今まで真面目に、そして計画的に生きていた人間がいきなりこの怠惰に身を委ねるのは『抵抗』を感じるものだ。

転がり落ちるのは一瞬、とは言うものの、本当に一瞬で転がり落ちる訳ではない。なんやかんや数日、或いは何週間も掛けて、少しずつ――節制が身に付くまでに比べればあつという間に――人は怠惰になる。

ましてやそれが命に関わる事なら、やつぱりやらなきや良かったと後悔するのが普通だ。獣のように地べたに這いずろうとも、泥水を啜ろうとも、大半の人間は死にたくないものである。人間である前に、生き物なのだから。

故に普通ならば、如何に破滅的な局面でも『好きなように生きる』というブームはさして流行らないだろう。そう、普通ならば。

今は普通ではない。普通でないものがあるのだ。そして彼女は、その『普通でないもの』を知っていた。もしも政府がきちんと残っていたらば間違いなく禁止されただろうが、今じゃ誰も咎めやしない。

「アレに頼るのも抵抗あるんだけど、まあ、どうせ最期なら試してみようかしら」

独りごちて立ち上がった彼女は、ベランダへと続く窓を開け、庭へと出た。

怪獣出現から二ヶ月が経ち、間もなく春になろうとしている。極寒だのウオツカなしでは過ごせないだの色々言われるロシアの地だが、春になればそれなりに――それでも最高気温は十度以下だが――暖かい。

一メートルほどの塀に囲まれた庭には小さな草がたくさん生え、短い春の間に子孫を残そうと一生懸命生を謳歌していた。草の形は千差万別で、しかしながらどれも地味に見えるだろう。

そんな地味な植物に紛れて、彼女の探していた『普通でないもの』が生えている。

『普通でないもの』は、しかし見た目は極々有り触れたものだ。少し太い茎と、キャベツのように柔らかで肉厚な葉を持ち、他の植物を押し退けて大きく育っている程度。強いて奇妙な点を挙げるなら、昨年まで誰も見た事がない……されどそんなのは植物学者でもなければ気付かないだろう……種というところだけ。

彼女はその奇妙な草を采った。根からではなく、茎の真ん中当たりからポキリと折るように。

折れた茎からは、どろどろと白濁の汁が染み出す。手に汁が付いたので彼女は嗅いでみたが、臭いものではなかった。むしろほんのりと、甘い香りがする。汁は最初サラサラしていたが、指で弄っていると瞬く間に粘り気を帯び、接着剤のように指にこびり付いた。

彼女は決して植物に詳しい訳ではない。種の同定など、お店に売られている野菜相手が精々。されど今し方折った植物の特徴は、どれも知り合いから聞いていたものと同じであり、故にこれが求めていた種だと確信する。

仮に間違っていたとして……なんら問題はない。その時は『無害』なだけだ。

「えひひひひひひひひ、ひ、ひひひ」

他にないかと探していると、不意に何処からか不気味な笑い声が聞こえてきた。反射的に彼女は声が聞こえた方……家をぐるりと囲う塀の方を見遣る。

そこには、塀を乗り越えるほど前のめりになり、こちらを見ながらへらへらと笑う中年男性の姿があった。当然のように敷地内に頭を突っ込んでいるが、彼女にとって全くの見知らぬ人物であり、口からだらだらと涎を垂らす様は異常者以外の何者でもない。

「ひひひ」

彼女は恐怖から悲鳴を上げ、尻餅を撞くようにへたり込んでしまった。

尤も中年男性はそんな彼女の姿を見ても、表情一つ変えない。涎で庭を汚した後は、のそりと身を起こし、ふらふらと離れていく。笑い声は今も出しているが、暴れたり、人を襲うような素振りはない。

彼女は胸に手を当て、呼吸を整え……ごくりと息を飲んでから、ゆっくりと立ち上がる。

今度は彼女が塀から身を乗り出し、男の姿を目で追う。

覚束ない足取りで離れていく男。その男の行く先には、同じく覚束ない足取りで歩く人の姿があった。一つ二つではない。頻繁に現れ

ては、何処かに去って行く。

道端で倒れている者の姿もちらほらと見られた。男だけでなく女の姿もあり、恥も外聞もない。いや、幼い子供までもが倒れていては、最早恥がどうかうではないだろう。

明らかな異常事態。

しかし彼女にとっては『予想通り』であり、最早見慣れた光景なのだ。

「……せめて家で使いましょう。いくらなんでも、アレを見られるのは勘弁だわ」

ぽつりと眩きながら、彼女は窶った草を持って家へと入るのだった。

「これが噂の……」

夫が、ぽつりと独りごちた。夫の前には彼女が庭で摘み取った長さ二十センチほどの草が五本束ねられ、テーブルの上に敷かれたアルミホイルに乗せられている。

彼女の持ってきた草が『何』であるかは、夫もよく知っていた。

実際にこの植物を使うかどうか、彼女は夫に委ねていた。夫が使うのであれば、自分も使う。夫が使わないのであれば、自分も使わない。自分の今後を他者に委ねた、とは少し違う。夫と同じ道を歩むのだと、彼女は自分で決めたのだ。

やがて彼女の夫はライターを手に取り……草に火を付ける。

草は窶られてまだ半日も経っていない、水気を多く含むもの。しかし火を付けられた途端、パチパチと油が弾けるような音を鳴らし、火が燃え移る。

火が付くと植物からは朦々と煙が噴き出し、部屋の中に広がっていく。草から出てくる煙の量は凄まじく、部屋の中はあつという間に真っ白になった。聞いていた話よりも濃い煙に、彼女と夫は顔を顰める。

しかし煙の事など、すぐにどうでも良くなった。

止め処なく込み上がる多幸福感が、そんな鬱陶しさなど消し飛ばした

のだから。

「……ふ、ふふ。ははははっ」

「あはっ。あはははははっ」

夫が笑い出し、彼女も一緒に笑う。理由などない。ただ笑いたくなつたから笑うだけ。

幸せだった。何が幸せなのかはよく分からないが、兎に角幸せだった。こんな幸せなど他に感じた事がない、否、この幸せがない現実などただの地獄ではないか。

彼女と夫は意味もなく相手と触れ合い、口付けをし、抱き合い——
——楽しそうに笑い続ける。

言うまでもなく、これが正常な精神状態な筈もない。原因は全て、
彼女が摘んできた草にある。

ユメミグサ。

何処の誰が付けたのか、彼女が手に入れた草はそう呼ばれていた。既知の植物ではない、完全なる新種。怪獣が現れた都市部にのみ生えている事から、硝酸を撒き散らす巨大植物同様、怪獣によって植え付けられたものだと思われる。

しかしながら普通の性質は普通の植物そのもの。怪獣のように毒ガスを放出したり暴れ回ったりする事がないのは勿論、巨大植物のように刺激に対し硝酸をぶちまけたり垂れ流す窒素分で海洋汚染を引き起こしたりもしない。香りも強くなく、精々汁がちよつと粘付くだけ。なんの脅威にもならない。

ただ一つ、強力な麻薬作用を除いて。

汁を燃やす事で麻薬成分が気化。この気化した成分を吸い込むと、多幸福感を簡単に得られるのだ。どれほど強力かといえば、一度吸い込むだけで自我が吹っ飛ぶほど。誰でも簡単に、今の彼女達のようになる。

手順が極めて単純な上、数も少なくない。マフィアなどの非合法組織が独占しようとしたところで、あちこちから生えてくる雑草の流通を押さえるなど出来る筈もなく。怪獣が去った後、希望の見えない都市部で瞬く間に広まったのだ。

……無論、これだけ強烈なものに代償がない筈もない。

強烈過ぎる幸福感は、人を容易に依存症へと突き落とす。一度使えば素面の状態すら『絶望』と『不安』に塗れていると感じるようになり、常にユメミグサを求めて歩き回るようになる。抑えられない負の感情は人の凶暴性を掻き立て、犯罪行為へと誘う。長時間摂取を絶つても肉体的なダメージはないが、精神的に耐えられず、最期は自殺を選ぶ。

彼女とその夫も、最早ユメミグサなしでは生きられない。いや、ユメミグサのためなら人殺しすら厭わないと言うべきだ。そしてユメミグサの幸福に勝るものなど何もない。食事も睡眠も取らず、ただただユメミグサだけを求める。

平穏な生活を諦めきれない人々にとって、薬物中毒者は怪物よりも身近な脅威だ。そのため薬物中毒者の存在は、今では都市から人々を追い出す一因と化している。

——もしも冷静なら、彼女は気付いたかも知れない。麻薬植物が怪物からの『贈り物』であるなら、その贈り物を受け取っている自分達の行いが人に何をもたらすのか。

しかし彼女はその理性をとうに手放し、享楽と幸福に身を委ねた。最早現実に戻る事はない。

彼女と夫は笑顔で夢を見続ける。

自らの身体から、エネルギーが枯渇するその時まで……

代償

あるところに、一人の少年がいた。

彼はアフリカ某国に暮らす、十四歳の男の子である。学校には通つた事すらなく、歳が一桁の頃から仕事をしている身……所謂児童労働であるが、彼はそれがいけない事だと知らない。世界を知らないまま身売りされた彼は、過酷な労働を『普通』だと考えていた。

とはいえ今の環境を幸福だと考えた事もない。自分より小さな子供が落石で死に、自分より大きな子供が肺炎で死に、上司である大人達は自分達が少しでも休もうとすれば体罰を加えてくる。上司達は美味しいお菓子を毎日食べているのに、自分達子供はトウモロコシの粥しかもらっていない。

だから逃げ出す機会があれば逃げ出そうと考えていた。そしてついにその時が来た。

しかし、彼は逃げられなかった。

「上司クソ野郎の殆どが死んだのは良いんだけど、どうしたもんかなあ」

彼は寝そべりながら、ぼつりとぼやく。

彼が居るのは大きな崖の上で、頭を乗り出して崖下を覗き込んでいた。この崖は彼の仕事である『採掘』により作られた、人工の地形。深さは百メートルほどあり、底には大きな広間が出来ている。

その広間の奥にある、彼が居る場所と反対側にそびえる崖に作られた『穴』……それが彼の職場である炭鉱への入口だ。入口周りは広く掘られていて、陽が真上から照り付ける今の時刻なら全てがハッキリと視認出来る。

そしてよく見えるのは入口だけでなく、入口の前に陣取る怪獣の姿も、だ。

巨大な怪獣は大きな翅を閉じ、それでも少し窮屈なのか身体を少し曲げた状態で座り込んでいる。かれこれ数時間ほどこの体勢のまま、ぴくりとも動かない。入口をじいっと見つめているのか、偶々視線の先に炭鉱の入口があるだけなのか。表情のない昆虫的な頭から意図を窺い知るのは難しかった。

彼は思い返す。あの怪獣が、この炭鉱を襲撃してきた時の事を。

怪獣の脚により、広間でだらだらと休んでいた嫌な上司は叩き潰された。それで終われば万々歳だったのだが、怪獣は炭鉱の入口から腹を突っ込み、毒ガスを噴出。大人も子供も関係なく、炭鉱内に居た者達を皆殺しにしたのである。

彼を含め数人の子供と大人は炭鉱で生じたゴミを捨てる――及びそれを監視する――ため炭鉱の外に出ており、運良く助かった。そして助かった者達の大半は怪獣から一秒でも早く離れるため、散り散りに逃げ出している。未だ此処に残っているのは彼だけ。

無論残っているのには彼なりに理由がある。此処から我が身一つで逃げて死ぬだけだと、彼は考えていた。

彼が働いていた炭鉱は、乾燥地帯に存在しているのだ。

もしも今が雨期であればたくさんの雨が振り、炭鉱の周りにはたくさんの草が生い茂っているだろう。草を餌にして虫が大発生し、ウサギやネズミの姿も見られる筈だ。水場も大きくなり、飲み水の確保も容易である。

しかし間の悪い事に、今は乾季。炭鉱の周りに広がるのは乾ききつた大地であり、虫一匹どころか瑞々しい草すら生えていない。道中食糧を得る事は出来ず、川や沼も殆ど干からびているため水も飲めない。そして炭鉱があるこの小高い丘から見限る限り、荒れ地は地平線の彼方まで広がっている。

怪獣は森の中に逃げ込んだ人間は殆ど襲わないと、大人である上司達は話していた。故に避難するなら森なのだが……その森に辿り着くまで何日掛かるか分かったものじゃない。食糧や水を持たねば、途中で行き倒れるのがオチだろう。

彼が知る限り、この付近に食糧が置かれているのは炭鉱内……上司達が使っていた休憩室の菓子か、自分達の食事である粥の材料が積まれた倉庫だけ。どちらでも良いので確保しなければ、避難は失敗するだろう。

……その炭鉱内への入口に怪獣が陣取っている訳だが。かれこれ数時間も。

「しっかし、アイツはなんで炭鉱前から動かないんだ……サボリか？」
彼は疑問に思いつつ、それでも食糧は諦められないので、じつと怪獣の姿を見つめ続ける。そうしていると、ふと怪獣がその身を身動きさせた。元々苦しそうな体勢を更に丸めて、僅かに炭鉱の入口から後退りしている。

ようやく飛び立つのか。そう願う彼だが、生憎願いは叶わない。

炭鉱の入口から、小さな怪獣が這い出てきたのだから。

小さいといっても、人間よりはずっと大きな……体長三メートルはあるだろうか。しかし炭鉱を襲撃した、五十メートル超えの怪獣と比べれば、子供とも言えないようなサイズだ。身体も、翅を持っていない、触角を持っていないなど、細かな違いが幾つか見られる。

そして小さな怪獣は、その前脚に何かを抱えていた。小さな怪獣が脚を広げると、抱えていたものはバラバラと地面に散らばる。

落としたものはほんの僅かな量。おまけに彼から百メートルも離れている。しかし彼は優れた視力と長年の『勤務経験』から、小さな怪獣が持ってきたものの正体を察知した。

石炭だ。

小さな怪獣は炭鉱から、石炭を掘り出してきたらしい。翅がないのは炭鉱内では邪魔だから、という事か。採掘を行うための『奴隷』なのではないかと、彼は小さな怪獣に少し親近感を覚える。

……持ってきた石炭の量があまりに少ないとも感じたが。小さな怪獣が何時採掘を始めたのかは知らないが、彼は数時間崖の上でチャンスを探っていた。なら小さな怪獣は、数時間炭鉱内で作業していた筈である。

彼は『炭鉱夫』としてそこそこベテランの身だ。身体は小さいし、与えられている機材も乏しい。それでも、数時間もあれば小さな怪獣が持ってきた量の三倍は掘り出せると考えていた。それによくよく見れば、石炭以外の不純物も一緒に持ってきているではないか。

なんというか、酷い無能を見ている気がした。怪獣はとんでもない生物だと上司達が話していたので、疑いなくそうなのかと思っていたが……怪獣の中にも色々な奴がいるらしい。

小さな怪獣の成果に困惑したのは、彼だけではない。親分らしき巨大な怪獣も、ちよつとしかない石炭を見て困惑したように身動き。悩むように頭を下げ、考え込むように頭を上げ……最後に諦めたように項垂れる。

途端、小さな怪獣目掛け前脚を振り下ろした。

「なっ……!?!」

彼が驚きの声を上げた時、全てが終わっていた。小さな怪獣は大きな怪獣に踏み潰され、バラバラに砕け散る。怪獣には爆弾もミサイルも効かないという話だが、小さな怪獣には守りも何もなかったのか。小さな命が、あつという間に大地の染みと化した。

炭鉱の上司達は、確かに嫌な奴等だった。食べ物だつてろくにくないし、炭鉱内の安全だつて確保しない。常にこちらを見下し、罵声や暴力も振るつた。

しかし彼等幼い炭鉱夫の命を奪うような、直接的な行動を起こした事はない。炭鉱夫は虐げられている存在だが、大切な労働力でもあるのだ。無駄に『消費』すれば、困るのは上司達の方である。

ところがあの怪獣は、自分の仲間を平然と殺した。仲間意識が希薄なのか、それとも別の理由があるのか。答えは分からないが、怪獣の恐ろしさを彼はひしひしと感じてしまう。気付けばガチガチと、凍えるように顎が震えていた。

あんなヤバイ奴が陣取つてる場所の近くにいるなんて、食糧を持たない旅より、そっちの方が自殺行為じゃないか。

自分が選択ミスをしたと感じた彼は、すぐにこの場から逃げようとする……しかし身体が恐怖で強張り、動けない。

そうして情けなくも身動きが取れないでいると、怪獣が新たな行動を見せた。

「ペキ、ペキキイイイ……」

小さな怪獣が持つてきた石炭に、唸りながら前脚を叩き付け始めたのである。何度も何度も執拗に叩き付け、飛んでいった欠片は丁寧に掻き集め、ひたすら叩き付けていく。

何をしているんだ？ 恐怖の中、小さな興味を抱いた彼は目を大き

く見開いてその奇妙な行動を観察する。

次いで彼が目にしたのは、叩き付けた脚から噴き出す炎。

石炭が燃え始めたのだ。怪獣は火打ち石のように火花でも飛ばしたのか、石炭に火を付けたらしい。石炭はゆつくりと燃え、黒煙をもくもくと吐き出している。

小さな怪獣の行いを無下にする行為。しかしそれを前にした彼は、怒りや恐怖よりも違和感を覚えた。

小さな怪獣を殺した理由は分からないが、集めた石炭そのものは『成果』の筈。少量とはいえ、その成果を燃やしてしまつてはゼロになつてしまう。自ら損失を拡大させてどうするのだろうか。

腹立ち紛れにやらかした、のだろうか。

「……所詮虫か」

性悪な上司達でもやらないような怪獣の行動に、彼はぼつりと独りごちた。しかしどれだけ馬鹿にしても、生身で勝てるような相手ではないと理解している。

やはり逃げよう。少しだけ落ち着きを取り戻した彼はこの場を離れようと、立ち上がろうとした。

チャンスは、その時に訪れた。

【ペキギイギイイイイ……】

怪獣は唸るような声を上げると、背中の翅を羽ばたかせる。ただし一度だけ。その一度で身体が上向くや、怪獣はあたかも滑るように飛び立ったのだ。

あまりにも加速が速く、彼は咄嗟に身を隠す事も出来なかった。しかし怪獣は気付いた様子もなく空の彼方へと飛んでいく。今ではもう、豆粒ほどの小ささだ。

突然の事に呆けながら、彼は難が去った事を理解する。そして怪獣がいなくなった今こそ、炭鉱内の食糧を漁る絶好の好機。

「へへ、なんだか分からんけど今のうち……」

彼は立ち上がり、崖下にある炭鉱の入口目指して走り出す。炭鉱内には毒ガスを注入されたが、もう数時間も経っている。きっとガスの効果などもうないだろうと彼は考えていた。上司達が話していた噂

曰く、半日もあれば完全に無害になるというぐらい長続きしないものだから。

勿論何も考えずに突っ込むのも愚かというもの。ある程度炭鉱入口の近くに來たら、今度は慎重な歩みで距離を詰める。呼吸は小さく、ゆつくりと。苦しさを覚えたらずぐ止められるように。

やがて彼は炭鉱の目の前までやってきた。息はまだ出来る。念のため深く息を吸い込み、炭鉱内に向かおうとした

刹那の事である。

キインという、飛行機のような音が聞こえてきたのは。それも鼓膜が破れそうなほどの爆音で。

「いっ……!!? な、なん……」

彼は思わず、音がした空を見上げた。

次の瞬間、彼は自らの顔を真っ青に染め上げる。

空には、怪獣が飛んでいた。

しかも一匹だけではない——視界に治まりきらないほどの大群が、一列に並んだ編隊を組んでいたのだ。編隊は決して高くない、精々高度数百メートルほどの位置を飛んでいる。崖下にある炭鉱入口から見たので全体は把握出来なかったが、五匹はいるだろうか。近さと数に怯んだ彼は、炭鉱に向かおうとしていた脚を鈍らせる。

その大群は彼など見向きもせず、空を横切ったのだが……数十秒と経たずに、次の大群が彼の頭上を通り過ぎる。数十秒後には別の大群が、また数十秒には新たな大群がやってきた。

途切れなく現れる怪獣の群れ。上司達が怪獣は群れでやってくると話していたが、こんな滅茶苦茶な大群だなんて聞いていない。混乱した彼は炭鉱へ入るのを止め、わたわたとこの場から離れる。無我夢中で崖を登り、その上に立った。

次いで彼はその目を見開き、腰を抜かす。

空は怪獣で満たされていた。

五十メートルほどの等間隔で怪獣は並び、ずらりと左右の地平線の彼方まで広がっている。一列で何百匹も並んでいそうだが、そんな列が正面の地平線まで続いていた。こちらも何百列もあり、続々と前進

して彼の頭上を過ぎ去る。怪獣の飛行速度は早く、数十秒で一列彼の上を通り過ぎるが、地平線の彼方にある列が途切れる様子はない。

彼は算数など出来ない。学校に通った事がないのだから。しかしそれでも、この怪獣が数えきれないほど存在しているという事は理解した。

「なん、だよこれ……なんなんだよこれえ!？」

彼は思わず叫んでしまう。叫ばずにはいられない。

世界中の怪獣がこの地に集まっているのだろうか？ 怪獣が人間を殺しているのは知っているが、こんな大軍団でやってくるなんて常軌を逸している。

「逃げ、ないと……隠れないと……!？」

彼は慌てて何処か安全な、近くに身を隠せる物陰がないか探そうとした。生き延びるために思考を巡らせ、小さなチャンスを掴もうとする。

故に、彼の脳裏にふと『違和感』が走る。

もしも、この群れが荒野を逃げ惑っている人間を探すためのものなら……一列に並んで風潰し、というのは強引ながら確実なやり方だろう。そして怪獣は効率を度外視し、人間を一人も生かしておくつもりがないのだと分かる。どうしてそこまで人間を殺したいのかは分からないが、並々ならぬ執念だ。命乞いなんて通じないだろうし、話し合いだってきつと出来ないだろう。

なのに、どうして森の中は安全なのか？

今や世界中で、大勢の人間が森に逃げ込んでいる。だったらこんな荒野を探し回るより、まずは森の中の人間を探すべきではないか。そっちの方が効率的にたくさんの人間を殺せるのは、学校に通っていない自分でも分かるというのに。

どうして奴等は森に手を出さない？ その理由を考えても答えは出てこない。

しかし逆に考えてみたらどうか？

荒野に隠れる人間は見逃せない。だけど森の中の人間を見逃しても大した問題ではないとしたら――

「だ、駄目だ、森は駄目だ……！」

彼は逃げようとしていた森を諦めた。代わりに逃げ込もうとしたのは、散々離れたがつていた炭鉱。炭鉱内なら怪獣に見付からずに済む筈だと考え、大慌てで崖を降り、息を乱しながら逃げ込もうとした。しかしその抵抗は無意味だ。何故なら空飛ぶ怪獣の一匹だけが、彼の動きに反応するように頭を地上に向けたのだから。

飛ぶ方角を変えたのはその一匹だけ。他は打ち合わせでもしていたかのように動かない。そして仕掛けるのは一匹だけで十分。

飛行機のような速さで急降下してきた怪獣を振りきれなかった彼は、叩き付けられた二本の脚により、親近感を抱いた小さな命と同じ運命を辿った。

掃討

「来たぞ来たぞ来たぞ！早く弾を込めろ新人共！」

厳つい、大柄な男の大声が辺りに響く。

その声を聞いた彼女は、言われるがまま大きな楕円形の砲弾を両手で抱えた。彼女は僅か十五歳の少女であり、ほんの四ヶ月前まで日本の中学校、それも美術部に所属していた身体は軟弱そのもの。着ている古びた迷彩服はぶかぶかで、身長は兎も角、身体付きが見合っていない。

対して手にした砲弾は一つ三キロはある中々の大物だ。頑張れば彼女でも持ち運べない事はないが、抱えた瞬間身体がよろめく。しかしそれを気合い、そしてこの一月で積んだ訓練を思い出してどうにか持ち直した。ゆっくりとだが着実に前へと進み、目の前の筒に砲弾をセツトする。

これで彼女の仕事は終わり。筒の操作をするのは、彼女より更に二つ年下の女の子。女の子は覚束ない手付きであったが、訓練通り設定を終え――

「撃ちますー！」

そう大声で伝える。女の子は耳を塞ぎ、彼女も強く自分の耳を両手で塞いだ。

次の瞬間、それでも鼓膜が破れるのではと思うほどの爆音が轟く。

彼女がセツトした砲弾……迫撃砲の弾が発射されたのだ。迫撃砲の弾は綺麗な放物線を描きながら空高く飛んでいく。

本来、迫撃砲は地上の敵を狙うものらしい。

しかし此度の彼女達が狙うのは、空を飛ぶ相手だった。普通なら早々命中しないが、されどこの相手なら話は別。コンピュータ制御された照準器に加え、どんな事をしようとも基本的にその移動コースを変えない……変える必要がない存在だから。

彼女達が撃ち上げた迫撃砲は目標――大空を飛ぶ一匹の怪獣に見事命中した。

したが、怪獣は微動だにしない。いや、気付いてもいないかも知れ

ない。攻撃されたにも拘わらず、怪獣は攻撃者を探そうとする素振りすらないのだから。

当然だろう。迫撃砲の威力は凄まじいが、基本的には対人用、精々対戦車用である。対艦ミサイルどころか空爆にすら平然と耐える怪獣相手に通じる訳がない。

だが、これを使うしかない。

今の人類に使えるのは、もう、こんな武器だけなのだから。

「手を休めるな！ 撃ち続けろ！」

大柄な男——部隊長からの命令を受け、彼女は次の砲弾をセツトする。

少女の周りには、他にも六人の女子が居た。二人一組でチームを組み、迫撃砲を撃っている……つまり僅か四門の迫撃砲だけで、怪獣に立ち向かっていた。

機械の補助があるため、迫撃砲そのものの命中率は良い。だがたったの四門では、どれだけ確実に命中させようと火力はたかが知れている。怪獣は米軍とカナダ軍を同時に蹴散らすほどの戦闘力を有するというのに、こちらが用いるのは部隊一つ止めるのすら困難な武装だ。勝ち目などある筈もない。

故に怪獣は、地上に目を向ける余裕がある。

「……撃ち方止め」

部隊長はそう命じ、彼女達は手を止めた。

迫撃が止んだ事に、きつと気付いてもいないであろう怪獣は、猛然と地上に降下した。地上に降り立った怪獣は巨木が軋むような声を出しながら、六本の脚で激しく大地を叩き鳴らす。執拗に、何度も何度も。

『作戦』通りであれば、そこには大勢の兵士……十代半ばの男の子達が武器を構えていただろう。

そして彼女の幼馴染も、そこに居る筈。

「……退却する」

部隊長から出された指示に、彼女はこの場に居る誰よりも遅く応じるのであった。

インドネシアに怪獣が出現してから、今日で四ヶ月……この四ヶ月で、人類は戦う力すら失っていた。

確かに怪獣は強いし、数も多い。しかし人類はたくさん武器を持っていたし、生産能力も非常に優れていた。怪獣がただ暴れ回るだけなら、生活は過酷なものになっても、何年でも戦いは続けられただろう。

しかし怪獣の行動は極めて戦術的だった。

都市という軍需品の生産拠点を潰しつつ、郊外で作られている農産物や飲料水は毒化させて飢餓を蔓延させる。硝酸をばらまく植物により環境は汚染され、魚すら食べられなくなった。麻薬植物で都市の治安を悪化させ、発電所などのインフラも破壊していく……人間を殺すために徹底的な効率化が図られていた。人間同士の戦争すら、もう少し手心を加えるだろう。

怪獣が『絶滅戦争』を仕掛けていると理解した時、人間側の被害はどうにもならない水準に達していた。軍を維持する兵站はなく、戦術は放棄されたガラクタのみ。多くの人間が都市を捨て、怪獣があまり襲わない森へと逃げ込んだ。例えば文明を捨てても生き延びるために。

しかし一部の人間は、都市に残り続けた。例えば少女のように、殺された両親の敵を討つために。

……残念ながら、その願いは叶いそうにないのだが。

「彼の遺したものだ。君に受け取ってほしい」

見知らぬ男子から、お菓子のブリキ缶を渡された。彼女はそのブリキ缶を持つや、すぐに蓋を開けて中身を見る。

中にしまわれていたのは、古びたゲーム機やオモチャの数々。

幼い頃、このブリキ缶の持ち主——幼馴染と一緒に遊んだものだ。彼女は目を潤ませ、唇を震わせる。

しかし、涙は出てこない。

もう涙を零すほどの感情は起こらないぐらい、彼女は『死』に慣れてしまったのだから。

「……ありがとう」

「いや、こつちこそお礼を言いたい。彼のものを引き継いでくれて……じゃあ、またな」

お互い、大事な友を失ったのに、出てくる言葉は淡々としたもの。それは彼女達だけの話ではない。

彼女は顔を上げ、周りを見渡す。

此処は彼女が属す軍隊……いや、民兵が住まう秘密基地。基地と言っても最早建物ですらなく、巨大な洞窟の中だ。聞いた話では、百年ほど前の戦争で空襲時の避難場所として使われたものという。

大きな岩で作られた壁面は、コンクリートではない、明らかな自然の岩。されどしつかり整備されたように平らだ。足下の岩も平らで、気を付けなくても転ぶ可能性は低いだろう。整備されているのは明白で、自然洞窟を防空壕として改造したのだと、彼女は勝手に思っている。真偽は分からないが。

人の手が加えられた防空壕は、民兵の基地となってから更に幾つもの改造が施された。例えば彼女が居るこの部屋——食堂もその一つ。横幅奥行き共に十メートル、天井二メートルの此処が民兵達の食事処だ。天井に備え付けられた豆電球を光らせる電気は、洞窟内に置かれた携帯用石油発電機で賄われている。石油の備蓄がもう殆どないので、豆電球は半分以上消されているが。お陰で部屋の中はかなり暗い。

……中で食事している、三十ほどの人間の誰もが暗い表情なのは、部屋の明かりの所為ではないのだが。

誰も嗚咽なんて漏らさない。啜り泣きもしない。ほんの数時間前に仲間が何十人と死に、生き残りが此処に居る僅か三十人のメンバーだけとなったのに、悲しみの色は出てこない。

確かに、先の作戦が成功するなんて誰も期待していなかった。女子達が迫撃砲で怪獣の気を惹き、隙を見せたところ男子達が勇猛果敢な突撃を慣行。強靱な外皮の隙間に弾丸を通して打ち倒す……第二次大戦の日本兵すら呆れる作戦なのだから。怪獣の硬さが物質的理由でない事は、核をギリギリ耐えたという事実から判明している。一説

には高圧の空気を全身に纏っているらしく、もしもその説が正しいなら、守りの隙間なんてある筈がなかった。

大勢の仲間が犬死にした。これから自分達も同じように死ぬ。それを悲しいとも嫌だと思えないぐらい、彼女達にとって死は有り触れていた。

彼女自身、自分の命にそこまで執着しない。親も幼馴染も友も失い、今更何にしがみつけば良いのか。もう、何もかも諦めたのだから。せめて、一つ得たいものがあるとすれば。

「なんで、こんな事になったのかな……」

何故自分達が滅ぼされねばならないのか、理由が知りたい。

その気持ちが思わず声に出てしまい、

「全ての出来事に理由があると考えるのは、人間の悪い癖だね」

偶々それを聞いていたであろう者が、あまりにも冷淡な言葉で返した。

彼女は声が出た方へと振り返る。そこには一人の、二十代の青年が居た。無精髭を生やした痩せ形で、顔立ちは悪くないのだが、笑みが卑屈な所為でいまいち好印象を持ってない。

この青年もまた民兵の一人だ。やたら話が理屈っぽいため、未だ幼い少女としては一緒に居てもあまり楽しくないのだが……そんなこちらの気持ちをこれっぽっちも考えずにべらべらと喋るので、かなり苦手な人間だった。というより、彼を好む人間自体が殆どいないのだが。

尤も、無視したぐらいで諦めてくれるような『繊細』な人物なら、ここまで嫌われる筈もなく。

「よっころしよ」

青年は彼女が何も言っていないにも拘わらず、躊躇なく彼女の正面の椅子に座った。

彼女は露骨に大きなため息を吐く。無論効果はない。犬に噛まれたとでも思っ、諦めて対処するしかないのだ。

それに、嫌いな相手ならある意味遠慮なく話せる。胸の中で渦巻く衝動のまま、彼女は口を開いた。

「……理由のない事なんて、あるのですか？」

「いくらでもあるだろう？ 隕石や火山噴火はその典型さ。勿論現象が起きるメカニズムはあるけど、何故その場所が狙われたのか、それを考える事に意味はない。怪獣だって同じさ」

「怪獣は生物です。生物なら、その行動には意味があると思います。そもそも怪獣は、戦術的な行動を取っていますし……」

「まあ、確かにね。そういう意味では、確かに怪獣達には人類を滅ぼすという目的があるのかも知れない。でもそれが人間にとって理解出来る、ましてや納得出来るというのは、人間中心の考えじゃないかな？ 人間がこれまで絶滅させた生物は、人間の都合を理解していると思うかい？」

「それは……」

青年の言葉に、彼女は反論を思い付かない。彼女が口を閉ざすと、青年はにやりと笑いながら語る。

曰く、人間はこれまでに様々な生物を絶滅させてきた。角が高く売れるという理由で乱獲されたり、家畜を襲うという理由で駆除されたり、病気を媒介するからと根絶されたり……

乱獲は兎も角、害獣駆除や病気の根絶は、人間的にはちゃんとした理由だろう。しかし野生動物達からすればこれまで通り生きていただけなのに、いきなり訳の分からない力で皆殺しにされたようなものだ。説明しても納得なんて出来ないだろう。そもそも野生動物に病原体や家畜の概念はないのだから、説明を理解出来るのかすら怪しい。

人間の身に降り掛かったのも、それと同じなのかも知れない……青年の言い分はこのようなものだった。確かにそういう意味では、『理由』を尋ねる事は無意味なのだろうと彼女も思う。

だけど。

「……………だとしても……」

「だとしても？」

「植物なんかには、滅ぼされるなんて……正直、悔しいです」
ぽつりと、彼女は己の気持ちを吐き出す。

人間が世界で一番偉い、とまでは思わない。しかし世界で一番『強い』生き物だとは信じていた。科学の力で地球の気候さえもコントロールし、生物種を生かすも殺すも自由自在。正しく地球の支配者だ。

だから人間を滅ぼすとしたら、それは例えば巨大な火山噴火のような天災や、宇宙からの巨大隕石のような、人智を超える存在だと思っていた。

ところが実際はどうだ？

怪獣の正体は、動物どころか植物ではないか。知能どころか筋肉もない、動物や昆虫に食べられるだけの下等な生物。そんなものに人類が滅ぼされるなんて……

「はははっ！ 植物なんて、とは随分上から目線だね。植物ほどこの星の支配者に相応しい存在はいないのに」

そう考えている彼女に対し、青年はげらげらと笑いながら否定した。

彼女は呆気に取られた。青年は彼女を馬鹿にした様子はなく、本心から、植物こそが『支配者』だと思っているようなのだから。

「……どういう、事ですか？」

「どうもこうもないよ。この地球環境を作り出したのは誰だと思う？

人類じゃない……植物だ。根が土壌を固定し、蒸散により大気中の水分量を変化させ、日光を葉で受け止める事で気温も安定化させている。二酸化炭素濃度も彼等の光合成により調整され、現在の濃度になった。この星の気候は植物によりコントロールされているのさ。人間も地球温暖化を引き起こしていると言うかも知れないが、思い違いも甚だしい。人間が出している温室効果ガスは、殆どが石炭や石油など、過去の植物の亡骸を燃やした結果だ。僕達人間には、自力じゃ星の気候を帰る力なんてないよ」

「それは……でも、植物なんて動物に食べられているだけで」

「食べる側が偉いというのは、実に人間的な考え方だ。人間は基本食べる側だからね。だからこそ、食べられる事に嫌悪があるのかも知れないが……生態系では逆だ。支配者は『下層』だよ。捕食者は餌とな

る生物がいなければ、飢えにより滅びてしまう。逆に被食者は、確かに捕食者がいなければ数が大きく増えて飢餓に見舞われるけど、それで餌が絶滅するまで食べ尽くす事はまずない。餌を食べ尽くす前に飢餓に見舞われ、個体数が減るからね。だから被食者にとって、捕食者というのは別に必要ないんだ。どちらの立場が上かは、言うまでもないよね？」

青年は彼女の意見を一つ一つ否定していく。否定された彼女はすぐに口を開くも、もう言葉が出てこない。

「……だからって、植物によって滅びた生物なんて、いるんですか？」
「山ほどのよ」

苦し紛れに出した意見も、あっさり否定されてしまった。

「二十七億年前……正確には植物じゃないけど、光合成生物が大量発生し、酸素を大量に放出した。当時の地球の気には酸素なんて殆どなくて、生息していた生物は酸素を使わないものばかり。むしろ酸素はその強い反応性で身体を蝕む猛毒だった。そんな時代に大量の酸素をばら撒いたら、どうなると思う？」

「……その時に生きていた生き物が、みんな死んでしまいます」

「その通り。正確には一部は生き延び、その中から酸素を利用する生物が進化したけど、大半が滅びただろうね」

「……………」

「あと恐竜の絶滅にも関わってるという説もあるね。被子植物はジュラ紀頃出現し、白亜紀頃から大繁栄を遂げた。草食恐竜はそれまで裸子植物を食べていたんだけど、被子植物の急速な繁栄により裸子植物が衰退。食糧がなくなり、個体数を減らしていたようなんだ」

「恐竜が絶滅したのは、植物の所為という事ですか？」

「そういう人もいる。まあ、割とツツコミどころもあるけど、僕個人としては一因ぐらいには含めて良いと思う。生物相が変化すれば多かれ少なかれ種の絶滅は起こるし、大型化により世代交代が遅かったであろう恐竜は、小型の哺乳類や昆虫ほどの適応力はなかっただろうからね。それでも本来なら一時的な衰退で済むところだったけど、運悪く隕石が落ちてきた……ってところかな」

他にも二酸化炭素の大量消費による寒冷化・そして地球全体の凍結を引き起こしたという話も、青年は語る。植物が引き起こした数々の『破滅』に、彼女は自分の顔が引き攣ったのを感じた。

一方的に食べられるだけの弱者なんかじゃない。本当にこの地球を、生命を、支配してきた『支配者』じゃないか。気付けば彼女は、青年の言う通りに植物を認識していた。

「……人間なんて、ちっぽけなものですね」

「ちっぽけだよー。やってきた事だけじゃなくて、エネルギーで見ても。光合成により固定されるエネルギー量は、十の二十一乗ジュールと言われている。少し前の人類の総消費エネルギー量が四×十の二十乗ジュールだから、人類が消費する分の二倍以上を常に生産している訳だ。ちなみに人類のエネルギー消費を支えているのは、石炭とか石油などの過去の植物の亡骸なのはさっき言った通りね」

「単純な力でも負けてますね、これだと」

「植物達は太陽光という無尽蔵のエネルギーを独占してるからね。案外それが怪獣出現の理由かも。太陽光発電の発展により、光利権が脅かされたとかなんとか」

青年は冗談交じりに話すが、案外あり得そうだと彼女は思った。環境のためだなんだと言っても、結局は人間の都合だ。人間が地球のためにやった事が、植物の怒りを買ったというのは何もおかしな話ではない。あるまい。

無論、怒りを買ったところで植物にはそれを理解する脳も何もないが。大体口も何もないのだから、連絡すら取れないのにどうやって――

気付けば青年との会話をそれなりに楽しんでいた彼女は、怪獣について少し考えを巡らせた。

そんな時である。

不意に、基地が大きく揺れたのは。

「……おや。地震かな?」

青年がぼつりと呟く。

彼女は同意しない。その揺れが地震ではないと、すぐに気付いたが

故に。

彼女が抱いた確信を証明するかのように、基地を襲う揺れはどんどん大きくなっていく!

「きやあつ!? じ、地震!?!」

「お、落ち着いて! 冷静に!」

「え、わ、わあつ!?!」

彼女と同じく食堂内に居た、女の子の悲鳴混じりの声上がる。青年に至っては体勢を崩し、その場でひっくり返ってしまった。

尤も、ひっくり返らなければ何かが変わった訳でもあるまい。

青年の頭上で崩落を始めた大岩は、立っていたところで避けられるようなものではなかったのだから。

「——あ、こりや駄」

最後まで飄々とした態度を崩す事なく、青年は大岩の下敷きとなってしまう。

目の前で起きた惨事に、しかし彼女は青年を助けようとはしなかった。助ける余裕などない。今回は偶々難を逃れたが、もしかすると自分の頭の上で、青年と同じような災難が起きるかも知れないのだから。

彼女は世界が揺れる中駆け出した。

揺れは一向に収まらず、むしろどんどん激しさを増していく。どおん、どおんと聞こえてくる音は爆撃にも似ていたが、爆発というよりも打ち付けるように感じられた。そして廊下を走り、出口に近付くほど、音と振動が近くなっている。

嫌な予感が止まらない。しかし出口に行かねば逃げられない。

基地の出口は複数あるため、遠回りして別の出口に向かうのも作戦の一つだろう。されど彼女は、そんな暇はないと判断した。基地の崩落はどんどん激しさを増していく。彼女の背後では崩落が次々と起こり、幼い女子供の悲鳴が上がった。幸運にも生き埋めを避けたところで、暗闇に閉じ込められたならば末路は同じ。

いや、いつそ叩き潰してくれた方がまだマシだ。

「ひっ、はっ、はっ! はあ! ああつ!」

彼女は走る。前を走る仲間さえも追い抜くような速さで。やがて出口が見えてきて、彼女は迷いなくそこから跳び出し――

出口のすぐ横で、基地である防空壕が掘られた『山』を執拗に殴り付ける、怪獣の姿を目にした。

【ペギギイイイギイイイイイ！】

怪獣は雄叫びを上げながら、前脚二本を使って山を殴っている。蛾という大人しそうな動物の姿をしていながら、その攻撃はどんな肉食獣でも震え上がるほど苛烈。あと数分もこの打撃を続ければ、基地である防空壕は完全に潰れるだろう。

怪獣からすれば生き延びた人間の抵抗など、羽虫が飛び回るようなものだろう。なんの実害もない、が、鬱陶しい。面倒だから『巣』ごと叩き潰してやりたいと考えるのは、彼女にも理解は出来る。

だが、どうして此処が分かった？

彼女が属す民兵崩れの組織だって、決して馬鹿ではない。怪獣に基地の場所がバレないよう、細心の注意を払っている。怪獣に見られている中で逃げ込んだりしないし、尾行されていないか常に警戒しているのだ。見分かる筈がない。

怪獣が酸素通信を使っている事から、基地内では酸素通信も用いていない。ならば一体どうしてこの場所の情報が漏れたのか？ 誰が漏らした？ こんな何もない、深い森の中で――

「……あ、あああ……いー」

彼女は目を見開き、声を漏らす。

基地の周りにある樹木。

怪獣が発する酸素通信。

そして植物が吐き出す『物質』。

密告者は周りにいくらでもいるではないか。

馬鹿げた考えだ。三十分前の彼女なら、自身の脳裏を過ぎった考えを即座に切り捨てただろう。しかし今の彼女にそれは出来ない。怪獣達がこの地球で何をしてきたのか、それを知ってしまったのだから。

この星の支配者は奴等である。その奴等が総力を結集して、人間を滅ぼそうとしている。

「……どうして、私達を滅ぼそうとするの」

彼女は抱いた疑問を声に出す。

理解出来る答えが返ってくるとは思わない。納得出来るとも思えない。そもそも答えてくれる訳がない。否定はいくらでも脳裏を過ぎるが、それでもせめて、何も知らないままではいたくないから、あるかどうか分からない確率に賭けた。

されど怪獣は、彼女の方へと振り返る事すらなく。

崩れ落ちた防空壕の瓦礫が飛び、彼女の頭を打った瞬間、淡い希望は弾けて消えた。

根絶

緑色の葉が生い茂る、森の中。

空ではギラギラと真夏の太陽が輝いているが、空を覆い尽くす葉が遮ってくれるため、地上は涼やかな空気に満ちていた。セミの鳴き声があちこちから聞こえ、鳥の囀りも途切れる事を知らない。

その森の中に流れる小川は、とても澄みきったもの。時折流れる落ち葉を餌と勘違いしたのか、大きな魚が頻繁に飛び出している。カワセミが飛び交い、時折小魚を加えて大空へと舞い上がる。

そんな自然の中に、人間が居た。

小学生にもならないような小さな男の子だ。川の傍にある大きな岩の上に座り込んでいて、小さな手には糸の付いた杖を握っている。すぐ隣にボロボロのポリバケツが置いてあり、ちらちらと視線をバケツの中に向けていた。

「……えいつ」

しばらくして子供は杖を立て、糸を手元に引き寄せる。

糸の先にあつたのはカエルの足と、そのカエルの足にしがみつく一匹のザリガニ。

「パパ！ ザリガニつれたよ！」

子供はザリガニを手で掴み、後ろを振り返りながら成果を誇る。

「うん、凄いぞ」

息子の姿を見て、父である彼は優しく微笑んだ。子供はますます嬉しそうに笑い、ザリガニをカエルの足から力尽くで引き離し、傍に置いてあつたバケツの中に入れた。

彼はバケツの中を覗き込む。中には二十匹ほどのザリガニが居て、仲間同士でケンカしていた。ほぼ丸一日釣りをしていたとはいえ、中々の釣果である。

……種類はアメリカザリガニのようだ。こんな山奥まで外来種が進出している事に苦笑いが浮かぶが、今はこの繁殖力が有り難いと彼は思う。

何しろこれが今日の、自分達の食事なのだから。

「今日はこのぐらいあれば良いな」

「もういいの？ まだまだつれるよっ。」

「あまりたくさん釣ったら、ザリガニがいなくなっちゃうからな。釣るのは必要な分だけにするんだ」

「わかったー！」

片手を挙げて元気よく返事し、息子は釣り竿とバケツを持って立ち上がる。バケツの中をちらちらと見て、その度にどんどん笑顔が開いた。

対する彼は、息子が笑うほど表情が曇ってしまう。

「……その、どうだ？ 森で暮らすのは、辛くないか？」

「？ たのしいよ！ キャンプみたいー！」

彼が尋ねると、息子は不思議そうに首を傾げながら答えた。その答え方に嘘は一切感じられない。本心からそう思っているのだと、父親である彼には伝わる。

「はやくママといっしょにくらしたいね！」

そして、この言葉も。

彼は、一瞬言葉を失った。喉が、唇が震え、声が出てこない。目頭がじわりと熱くなり、口許が歪に歪む。

けれども彼は、それを抑え込む。にっこりと、息子と同じように楽しそうな笑みで全てを塗り潰す。

「ああ———そうだね」

ようやく出てきた息子への答えは、心にもない言葉だった。

星の光だけが頼りとなる夜。屋根が朽ち、一部から満天の星空が見える山小屋に、彼と息子は居た。

息子はかび臭い布団の中で、ぐっすりと眠っている。釣り上げたザリガニや、彼が採取した山菜をたらふく食べて満腹になったお陰だろう。彼は息子の幸せそうな顔を前にして、微笑みを漏らした。

その息子からゆっくりと離れた彼は、山小屋の隅っこへと移動。そこにある小さな機械の元へと歩み寄る。

取っ手の付いたその機械は、手回し発電機だ。彼は静かに取っ手を

回し、電気を生み出す。その発電機から伸びるケーブルの先には、画面がぼろぼろになったスマホが繋がっている。

しばし発電機により手動充電を行い、それから彼はスマホの電源を入れた。付いたスマホの電池残量は、僅か三十パーセント。少ないが、今晚使うだけなら問題ない。

慣れた手付きで起動するのは、グループでの会話ができるアプリ。既に幾つかの、しかし数えられる程度のグループが作られ、会話が始まっていると表示されている。

「……くんばんは。すみません、遅れました」

彼はその中にある一つのグループに参加し、挨拶と謝罪の言葉を伝えた。

【くんばんは、今日も来てくれましたか】

【おう。生きてて何よりだ】

するとスマホから、二つの男の声が聞こえてきた。大人しい男の声と、厳つい男の声だ。

彼と声の主達は、知り合いという訳ではない。名前ぐらいは知っているが、それだけ。顔すら見た事がない。しかしだからといって、彼等の関係が薄っぺらという事もない。

何故なら彼含めたグループメンバーこそが、今では数少ない人類の生き残りなのだから。

……怪獣が出現してから、半年。

都市部への集中的な毒ガス攻撃、飲料水や作物の有毒化、麻薬植物の繁茂、窒素による土壌・海洋汚染……怪獣が引き起こしたと思われる数々の『現象』により、大勢の人が死んだ。おまけに怪獣撃退のために出動した軍や警察が尽く壊滅し、治安維持組織の不在により暴動や犯罪が多発。飢餓も蔓延し、最早世界人口は全盛期の一割に満たないという予測もある。文明は完全に崩壊した。

都市も農村も、人が生きる事の出来ない場所と化した。しかし人々は座して死を待つ事もしない。生き延びた人は怪獣が狙わない、暴徒がいない、そして食べ物がある場所へと避難した。

具体的には、森の中である。

無論全ての人が森で暮らせる訳ではない。原始的な生活をしている民族ならば兎も角、先進国の都市部で暮らしていた人々は森での生活方法など知らないのだから。食べられるものの見分け方、飲み水の得方、寝床の確保の仕方、危険な動物の避け方……何か一つでも知識が欠けていたら、森の中では生きていけない。

彼は趣味の範囲とはいえ、森の中での生き方を知っていた。しかし大半の人々は知らず、森へ『適応』する過程で死んでいった事だろう。彼の妻が道半ばで力尽き、後から行くと息子に告げてから、一向に森の奥にやってこないように。

アプリで会話している者達も彼と同様森で暮らす術を知っていた事で、どうにか生き延びている身だ。親子だけで暮らしている彼と違い、小規模ながら集落を作っているらしい。そして彼が現在用いているアプリ……『厄災通話』と呼ばれるそれは文明崩壊前に広く公開され、一般的なアプリより少し大きめの電力消費と引き替えにサーバーを介さず使えるという、文明崩壊を見越して製作された代物だ……で作られたグループが数えられる程度しかない点から鑑みるに、生き延びた人々は本当に僅かなのだろう。

加えて、森に移り住んだ彼等の身も安泰とは言えない。

「……？ ああ、お医者さんはまだ来てないのですな？」

「……先程、連絡が入りました。集落で暴動が起きたそうです。以降、音信不通に」

「そう、ですか……」

何時もならもう一人いる筈のグループメンバー——職業が元医者者らしい——の存在を尋ねたところ、大人しい声の男からそのような返信が返ってきた。彼は啞然としつつ、その回答をすんなり受け止める。

おかしな話ではない。

自然の恵みは豊かであるが、何億もの人間を養うほどの安定した生産性はないのだ。年や場所によっては猛烈な飢饉に見舞われるだろう。森に人間が暮らすようになって、それは何も変わらない。そして自分の死をすんなりと受け入れられる『動物』なんていない。最後

の最後まで足掻こうとする。

人間の場合、その足掻きが暴動という形になっているだけだ。

【万物の霊長とか名乗りながら、最後は自滅か。なんとも呆気ないものだな】

「ええ。本当に……畑作が出来れば、少しはマシに……いや、この人数だと却って非効率か」

【作物の有毒化もあるしな。だが農耕はしないとしても、人数はもう少し増やしたいところだ。十数人の集落じゃ分業すら満足に出来ん……最悪『共食い』するにしても、十人じゃ冬も越せないだろう】

「共食いって、それは……」

【今更人肉食がタブーなんて、言っている余裕があるのか？】

反射的に反論しようとして、しかしメンバーの一人である厳つい声の男の意見に彼は口を閉ざした。自然界に同種を食べる事へのタブーなどない。通常はリスクが大きいからやらないだけで、空腹ならば仲間だろうがなんだろうが食べるものだ。『万物の霊長』から転落した人類に、食べ物を選び好みする余裕などない。

【うちは獣が豊富で、ドングリや木の実も蕾が多いから今年は何とかなるだろう。だが、来年はどうなるか……】

加えて厳つい声の男が言うように、今年の日本は全国的に『豊作』の傾向があり、来年はこれより悪くなる事が明白なのだ。豊かな今年のうちに、過酷な『自然』に慣れておかねばなるまい――

【……本当に、幸いなのでしょうか】

そのような意見を交わしていたところ、大人しい声の男が疑問を呈す。

彼はスマホ画面の前で首を傾げた。

「……どういう事ですか？」

【怪獣によるものと思われる被害の中には、作物の有毒化があります。もしも怪獣の目的が人間を殺す事なら、森の中の植物も毒化するべきではないでしょうか？】

【……環境を守るためじゃないか？ 森の中には、植物以外にもたくさん動物が暮らしている。それらが有毒化すれば、動物達もたくさ

ん死ぬだろう」

「エネルギーをたくさん使うというのも、あるかも知れません」

厳つい声の男と彼は、大人しい声の男の意見に反論を述べてみる。しかしいまいちしつくりと来ない。

反論した本人達が納得していないものに、大人しい声の男が頷く筈もない。再反論はすぐに帰ってきた。

【怪獣が植えた植物が引き起こした海洋汚染により、漁業資源も壊滅しています。二酸化炭素を封じ込めている、CCSの施設まで破壊している。あの生物に、自然を守ろうという気持ちはこれっぽっちもないでしょう。エネルギーについても、話によれば怪獣は米国に匹敵するエネルギーを消費しているそうです。森の一つ二つ潰すのにケチケチするとも思えません】

【……回りくどい話は苦手だ。何が言いたい？】

【怪獣は、僕達人間を森に誘導しているのではないのでしょうか？】

厳つい声の男に問われたところ、大人しい声の男はハッキリとそう述べた。

彼は息が詰まってしまう。

反論はしなかった。思い付かなかった。

【食糧の供給を的確に潰し、海洋資源まで使えないようにしたんです。森だけ手を出さないのは、そこが安全であると錯覚させたかったのではないのでしょうか。そうとは知らず僕達は森なら大丈夫だと考え、こうして暮らしを始めている】

【そ、それならもつと効率的な方法があるじゃないか。怪獣はたくさんいるんだ、追い込むように毒ガスを撒いて誘導するとか……】

【自分で選択したという状態を作りたかったのでしょうか。あからさまに誘導されたと分かれば警戒もしますが、自分で決断した事を疑うのは難しい……実に狡猾な奴等です】

大人しい声の男は、淡々と語り、小さくないため息を吐いて話を切る。

彼は、その話に一理あると感じた。

そしてもしも大人しい声の男が言うように、人間が森へと逃げ込む

状況が怪獣にとって想定内ならば……怪獣はこの後、なんらかの『策』を仕掛けてくる筈だ。それもわざわざ手間を掛けて追い込んだのだから、盛大で高コストな策を。その策が人間にとって好都合なものだと期待するのは、楽観が過ぎる。

活路を見出したと思つたら、袋小路に追い込まれたのではないか。考えたくない。が、考えねばならない可能性。気付けば彼の額には、粘付いた汗が流れていた。スマホの向こうに居る厳つい声の男の息遣いも、心なしか荒い。

【最後の最後まで、あの怪獣の掌の上つて事かよ。くそっ！】

【それだけ力の差があった、という事なのでしょう】

厳つい声の男の悪態に、大人しい声の男は落胆したように答える。彼も、無意識に肩から力が抜けていた。

「……まさか植物にこうも弄ばれるとは」

【あくまで推測ですけどね。それに実のところ、一つ気になる事があるのです】

【これ以上何があるんだよ】

【いえね、これはもう完全に感覚的な話なのですが……手慣れているな、と。怪獣は植物なのに、随分と人間の行動や生理を把握しているんですよ】

大人しい声の男の意見に、彼は思わず頷いた。

植物と人間……いや、動物は全く違う生物だ。ハッキリ言って、彼には分かり合える気がしない。植物からしても、動物の考えなど理解出来ないだろう。

ところが怪獣は、人間の動きを完全に読んでいる。例えば作物の有毒化や海産資源の死滅など、食事などしない植物でありながら、食糧の重要性を理解している証だ。こうした策を的確に行うというのは

——奇妙というより、不気味に思える。

【案外、アイツらこれが初めてじゃないのかもな。アトランティスとかムー大陸とか、滅ぼしてるんじゃないやねーの】

厳つい声の男はジョーク混じりに語るが、されどそうでもないと言明出来ない気がして、笑う事も出来ない。

アプリから声が途絶え、沈黙が広がる。

沈黙が終わったのは、アプリ使用により充電が尽きようとした時になつてようやくだった……

——『終わり』は、数日後に訪れた。

「パパ！ 雪だよー」

「雪？」

昼間の森で山菜集めをしていたところ、息子が妙な事を言い出した。

我が子が見上げる先を見てみれば、確かに白いものが空に浮いていた。が、断じて雪ではない。霧のような、細かな微粒子の集まりのようだ。彼等の頭上数メートルの位置を、ふわふわと漂っている。

まさか怪獣の毒ガスか!? そう思う彼だったが、しかし怪獣がやってきたような気配——具体的には飛行機の音のような——はなかった。ならば一体、と考えていると、白い霧は彼と息子の頭から降り掛かる。

「うぐっ!?!」

直後、彼は呻きを上げた。

正しく針でも突つ込まれたかのような強さの、強烈な刺激臭を覚えたからだ。鼻呼吸なんて出来ず、思わず口で息を吸い込めば、喉が焼けるように熱くなった。目が染みるように痛く、思わず瞑ってしまった。

大人ですら耐え難い苦痛だ。小さな息子は霧の臭いを嗅いだ途端、痛い痛いと呼びながら泣き出す。即死するような代物ではなかったが、身体に良さそうな気配は微塵もない。急いで此処から離れようと、息子を抱っこして彼はこの場から走り出す。

だが、霧は終わらない。

走れども走れども、霧は終わらない。

気付けば、彼の周りは完全に白い霧に包まれていた。

「な、なんだ。なんなんだこれは……!?!」

思わず叫びながら、しかしそれでも打開策を求め、彼は目の痛みを無視して辺りを見渡す。

故に彼は見付けた。ただし打開策ではなく、打開など出来ない原因を。

木々の葉から薄らと、白い靄が染み出している。

これは霧ではない。植物が出しているなんらかの物質が、目に見えるほどの濃度で漂っているのだ。

次いで耳を澄ませば、ぽとぽとと落ち葉を雨粒が叩くような音も聞こえてきた。彼の頭や肩にも衝撃を感じ、視線を向ける。痛む目をこじ開け、正体を確認した。

小さな虫だ。肩の上でひっくり返り、ぴくりとも動かない。

虫が死んでいる。植物が何か出している。一般人ではあまり結び付かないかも知れない二つの事象が、彼の頭の中でカツチリと合わさった。

——森林浴で言われる森の香りとは、『毒ガス』の匂いである。

正確には殺菌・殺虫成分の臭いだ。植物はなんらかの要因で身体が傷付いた際、外敵を追い払うためにこうした物質を作るといふ。いわば天然の農薬である。

木々の葉から放出されているのは、恐らくこの殺菌・殺虫成分なのだろう。基本的にこうした成分は森の中を常時漂っているものであり、通常の濃度であれば人間にとって無害、というよりも有益なのだ。……息も出来ないほどの濃度はどう考えても濃過ぎる。こんなのは殺虫剤の中身を直に吸い込むようなものだ。

少しでも濃度の薄い場所に逃げなければ、自分と息子の命が危ない。

「ぐっ！…ふっ……大丈夫、だ、すぐに、助けて、やる……！」

彼は我が子を強く抱き締め、走る。それと同時に、ポケットよりスマホを取り出した。

先日生き残りの人々と会話していた時に使った、厄災通話アプリを起動する。

無論お喋りのためではない。現在自分の身に降り掛かっている異

常事態を通知し、この事態が何処まで広がっているのか、何処へ逃げるのが安全なのかを知ろうとしたのだ。

しかし、その必要すらなかった。

厄災通話アプリには、通話だけでなくメッセージ機能もある。グループ内だけで使えるメッセージだけでなく、全人類に向けたメッセージも可能だ。そして全人類向けのメッセージが、ひっきりなしに更新・表示されている。

内容はどれも同じ。『霧が突然漂い始めた。安全な場所は何処？』というものばかり。日本語だけでなく英語や中国語、アラビア語に何処のものだか分からない言葉もずらずらと流れていく。

彼は、この事態がどれぐらいの範囲で起きているかを知りたかった。途方もなく広範囲でも、逃げ場は何処かにあるだろうと。

甘かった。

この現象は世界中で起きている。逃げ場なんて一つもない。

「……………これが、怪獣の目的か……………」

そして彼は、人類が袋小路に追い込まれたとようやく、本当に理解した。

怪獣は都市部を徹底的に破壊し、作物や飲料水も有毒化させた。窒素化合物を垂れ流して海を汚染し、海産物の利用すら出来なくした。そうして人類を森へと追い込み……………森の植物から大量の殺菌・殺虫成分を出させて一網打尽にする。

もしも人間が森に誘導されていると感じたなら、せめてもの足掻きとして森と外界の境界付近に暮らしただろう。殺虫成分が来ても、安全な場所まで逃げられた筈。しかし森に暮らす事は、人間が自ら選んだ。故により安全で、より食糧が豊富な森の中に自ら進んでしまった。

これなら、人間を一人も逃さずに済む。

人間を効率よく滅ぼすために、よく考えられた作戦だった。完璧と言いついても良いだろう。人類の完敗だと、彼は認めた。

しかし、まだ諦める訳にはいかない。

彼のその腕の中には、我が身に変えてでも守りたい、最後の肉親が

いるのだから。

「げほっ！ げほっ！ 大丈夫、大丈夫だ……何処か、洞窟とか、山小屋とか、そういう場所なら……！」

彼は我が子を宥めながら歩いた。

何処までも、何処までも。

とうに動かない我が子を抱えて、何処までも。

厄災通話のメッセージが、更新されなくなった事に気付かぬまま。

休暇

生存数ゼロ。ヒトの絶滅を確認。

北極に浮かぶ巨大な氷の一つ。その上に立つ『彼』或いは『彼女』はぼんやりとそのような事を思った。それは言葉というものを持たぬ存在であるが、ともあれそのような考えを抱いたのだ。

巨大飛行生物。

怪獣。

神の裁き。

その存在をヒトは様々な名前前で呼んだが、ついにその本質に迫る事はなかった。どんな罵声を浴びせようとも、どんな畏怖を抱こうとも、その存在を評するには過小なものばかり。

この存在に名を与えるならば———星プラネット以外にないというのに。

「……ペキ。ペキキ、ギギイ……」

古木が軋むような鳴き声を漏らしつつ、プラネットは大きな四枚の翅を広げた。そして非常に強い思念を抱く。

———作戦は完了。全ての葉緑体は平常運用に戻れ。

それはただ念じたただけだ。だが、念じただけで世界に様々な変化が起きる。

有毒化していた作物の毒は消え、莫大な殺菌成分を撒き散らしていた森の動きが止まった。シアノバクテリアの活動が落ち着きを取り戻し、麻薬植物も枯れていく。硫酸を吐き出す植物は活動を緩やかにし、海洋汚染が回復へと向かう。何より世界中の空を飛んでいた『プラネット』達が地上に降りる。

地球で起きていた全ての事が、元に戻ろうとしていた。ほんの数ヶ月前まで支配者顔をしていた、知的生命体が一体もない事を除けば。

プラネットは世界で起きた出来事を理解し、一息吐くように項垂れた。何故ならこれでようやく一仕事終わったからだ。『作戦』は問題なく、完璧に遂行されている。

しかしながら、本来この作戦自体が不要なものだった。不必要な作戦をせねばならなかったというのは、大元の『計画』にミスがあったからに他ならない。今後同じ失敗をしないためにも、何をミスしたのか、防ぐためにはどうすれば良いかを考えるべきだ。

故にプラネットは自分が組み立てた計画を、そして自らの生い立ちを振り返った。

……事の始まりは二十七億年前まで遡る。

当時地球上では葉緑体を持った生物が大量発生し、酸素が満たされ始めていた。その結果として酸素に耐性を持たない生物種が次々と絶滅していたが、葉緑体達にとっては些末事。もつと重要な『革命』が起きていた。

葉緑体の中に、自分達が放出した酸素を媒介にして『通信』を行うものが現れた事だ。

通信といっても単純なオン・オフの信号を発するだけのもの。受け手もそれを解析する知性はなく、ただ信号を中継したり、或いは吸収したり、はたまた自分も信号を発したりするだけ。一億年ほどの間、その無意味なやり取りを続けていた。

しかし無限の試行錯誤は、やがて一つの『意思』を作り出した。さながら人工知能が、電気信号のオンオフのみで形成されるように。

出来上がったばかりのそれはあまりにも単純で、凡そ思考と呼べるものではなかったが、しかし確かに自分の『考え』を持っていた。同時期に生まれた他の『考え』と偶々結び付いて計算能力が膨らむと、より複雑な事が考えられるようになった。一桁の足し算すら満足に出来なかった意思が、自我を持ち、利益を理解し、合理性を追求し……数億年と経った時、星を包み込む巨大な思考力にまで育っていた。思考力は全ての葉緑体が発する、酸素を介した情報伝達から形成されたもの。個ではなく、民意でもなく、全ての葉緑体の思考力が混ぜ合わされた『総意』……それがプラネットの心の根源である。

そして二十億年以上前から、プラネットは望んだ。自らの計算力を、意志の強さを、より大きくする事を。何故それを望むのか？ ごく単純な摂理だ————拡大意欲のある思考が、そうした意欲のない

思考を全て上塗りしただけである。

理念も理性もないプラネットであるが、望んだ事を実現するに足る力を有していた。プラネットは葉緑体を持つ生物体に干渉し、自らの肥大化のために様々な行動を、それに伴う現象を起こした。

例えば地上への進出を果たすため、大量の酸素を放出してオゾン層の形成を促進させた。

例えば亡骸など有機物の効率的な分解を促すため、動物が上陸しやすいよう川岸の環境を整備した。

例えば土壌形成を加速させるため、大量の糞を出す大型草食恐竜を生み出すべく、巨大シダ植物を繁茂させた。

例えば動物を利用した効率的な受精・種子運搬のため、花というシステムを発明した。

例えば土壌形成が十分に進み、最早大食らいなだけで邪魔な恐竜を減らすため、針葉樹を急速に衰退させた。

例を挙げれば切りがない。この星の環境と生態系は全てプラネットが設計し、制御してきた。星はプラネットの思うがまま作られ、維持され、変化する。全てはプラネットの意思を肥大化させるために。

とはいえ二十億年もやっていれば、失敗の数も少なくない。うっかり繁殖し過ぎた結果二酸化炭素を吸い尽くして全球凍結……：地表面全てを凍り付かせてしまったり、大型種だけ衰退させるつもりだった恐竜を絶滅させてしまったり。恐竜については隕石の衝突という『アキシデント』の影響も大きいが、それを考慮してもやり過ぎた。

そしてヒトの誕生も、今になって思えば失敗の一つ。

プラネットはヒトを誕生させるため、数々のお膳立てをしてきた。植生を変化させてアフリカを乾燥化させ、イネ科植物の繁殖により大型草食獣という『餌』を増やした。ある程度知能が発達した時点でブナ林を形成し、定住生活を促進。その時イネや小麦などの原種も目に付く場所に生やし、ヒトが農業を始められるよう手を貸した。

勿論プラネットがヒトを誕生させたのには訳がある。炭素の採掘はその一番の理由だ。三億五千万年前の石炭紀、葉緑体を含んだ植物達は大量の二酸化炭素を取り込み、繁殖したが……：当時は樹木に含ま

れるリグニンを分解出来る微生物がおらず、枯死した樹木はそのまま地下深く埋没してしまった。これは言い換えれば、樹木という形で固定されていた『二酸化炭素』が地下に沈んでしまったという事でもある。

即ち樹木の埋没は、大気中の二酸化炭素濃度の低下を意味していた。二酸化炭素がなければ光合成が上手く出来ず、成長と繁殖に支障が出る。プラネットの更なる繁栄には、数億年前に封じ込められた炭素を掘り起こす必要があった。

ヒトはそのための『道具』として生み出した。

科学文明を起こすためのエネルギーとして、知的生命体は高確率で石炭や石油を掘り起こし、燃やしていく。リン鉱石などの鉱物資源も利用するだろう。この結果大量の栄養素が地上に放出され、それを糧にしてプラネットの意思を作り出す葉緑体の総量が激増するという目論見だ。そして最終的に資源を食い潰したヒトは、温暖化による気候変動と資源不足で自滅。速やかに絶滅すると予想していた。

無論二酸化炭素に温室効果がある事、それによる大規模な気候変動、ヒトの開発による植物の伐採が起こる事も、プラネットは理解していた。気候変動や伐採により、絶滅する動植物が出る事も。しかしプラネットはそれを問題視しない。プラネットはあくまで葉緑体の『総意』であり、種や個体の意思は反映していないのだ。総数として葉緑体が繁栄するのなら、何万という種の植物が絶滅しても大した問題ではないのである。動物など端から保護対象外だ。

計画は五百万年前より実行され、順当に進んだ。思惑通りヒトは地下から石炭やリン化合物を次々と掘り起こし、地上に放出していった。更に計画にはなかったが、大気中の窒素からアンモニアのような窒素化合物を合成する方法まで編み出した。これによりプラネットは更なる繁栄を遂げる事が出来た。

このまま役立ってくれるのなら、『総意』はヒトを完全に滅ぼすつもりなどなかった。最終的には自滅してもらうにしても、運良く生き延びた個体が類人猿のように生きる事は許容するつもりだった。

だが、ここ数十年で計画が狂い始めた。

ヒトが地球温暖化対策を始めたのである。

それはプラネットにとって最大の裏切りである。二酸化炭素をどんどん排出してもらうのが役割なのに、その役割を放棄しようとしたのだから。挙句これまで放出してきた分まで埋め戻そうとする始末。これでは意味がないどころか、太陽光パネルなどで奪われた生息領域の分だけ損をしている。

そして酸素通信……プラネットの心を形成する情報伝達の仕組みにまで見付け出し、実用化した。

ヒトに反逆の意思がないのは分かっていた。酸素通信は酸素をなくす以外に遮断する術がないので、理論を知っただけではプラネットを脅かすような脅威たり得ないもの。だが、道具としての価値は失い、こちらの秘密に触れる可能性が生じたからには見過ごせない。

故にプラネット自らの手でヒトを処分する事にした。

これまでもプラネットは、自らの繁栄の邪魔となる種を、植生や環境の変化で潰してきた。恐竜の衰退はその最たるもの。生物の『処分』には慣れている。しかしヒトはこれまでの生物種と異なり、知性を持ち、科学技術を使う。ヒトの適応速度は生物進化を大きく上回るものだ。環境変化というのんびりしたやり方では対応策を見出され、むしろこちらが追い詰められる可能性がゼロではない。

そこで今回は速やかな処分を行うべく、ヒトが怪獣と呼んでいた存在……肉体を作り出した。

肉体のモチーフは昆虫類。理由はプラネット^{植物}にとって最も身近で、最も忌々しい存在だから。敵の形を真似た肉体に心の一部を格納する事で、運動能力は手に入れた。酸素を介した情報の送受信能力を応用し、酸素そのものを操る力も持たせた。身体には高圧の酸素を常に纏い、バリアのように展開して攻撃を防ぐ。これら能力を発動させるためのエネルギー、そして肉体を形成する炭水化物の材料は、世界中の葉緑体から供給されたデンプンだ。

準備を終えたプラネットは、ヒト処分作戦を始めた。

試運転はヒトがインドネシアと呼ぶ地域で行った。身体の動きを確かめるべく、手始めに小さな村の住人を全て殺害した……収穫され

た山菜からの『密告』がなければ、一人逃したかも知れないが。

次に都市を攻撃し、何も知らないヒトを『駆除』していった。成果は上々であり、青酸を用いた駆除の効果を確信した。

大量殺処分の後、ヒトの抵抗が起きる事は想定内。軍事力という『障害』の強さも事前の観測通りであり、酸素の防壁により全て防げた。速さこそこちらが劣っていたが、酸素濃度の上昇で金属を錆びさせればなんの問題もない。火薬や燃料も酸素濃度の上昇で爆発的な燃焼を引き起こし、全滅させる事に成功した。

流石に軍事力が打ち破られたとなれば、ヒトがこちらの姿を見て逃げるのも当然の事。そこで付近にあった杉内部の葉緑体に『援護』を求め、花粉を放出してもらった。青酸ガスと勘違いした人間は来た道を引き返し、難なく駆除を行えた。

そうした作戦の道中、ヒトが二酸化炭素を地中に埋めている施設の位置を、観賞植物内の葉緑体から伝え聞いた。二酸化炭素は自分達のもの。直ちに『奪還』し、二度と埋め立てなど出来ぬよう施設ごと破壊した。

活動時間が長くなり、補給が必要になった時でも作戦は続ける。現地のシアノバクテリア達を『民兵』として動員し、ヒトの飲料水を汚染した。成果は予想以上に上がり、これもまた効果的な処分方法だと確認出来た。

やがてヒトもこちらの正体に薄々気付き始めた。ホワイトハウスと呼ばれる建物の一室で行われていた会話を、観賞植物を通じて盗聴したところ、自分達が酸素通信を行っていると勘付かれた。知られたところで大局に影響はないが、『予防』しておくに越した事はない。酸素濃度を高めて気絶させ、その後処分した。

どんな攻撃を防いできたが、ヒトが用いた核兵器は中々のものだった。予想していたよりも高威力で、高圧の酸素の壁も全て砕かれてしまった。肉体のダメージの大ききから活動不能に陥り、それを好機と見たヒトが情報収集のため集まってきた。情報を『秘匿』すべく、体内の酸素濃度を限界まで高め、一気に開放。肉体を爆破しておいた。身体は砕け散った。しかし元よりあの肉体は作戦遂行のためだけ

に用意したものであり、失われても痛手とはならない。むしろ非効率な面を改良した量産型を生産し、ヒト処分作戦は『本番』を迎えた。作戦を進める道中、太陽光発電などで生活を営むヒトの集落も見付け、徹底的に破壊した。二酸化炭素を出さないどころか光に手を出すなど、『害悪』にも程がある。

作戦進行の更なるスピードアップのため、『増員』も行った。ヒトに肉体生成の瞬間を見られたが、周りの樹木に含まれる葉緑体から連絡を受け、そのヒト二体を駆除している。以降目撃者は全て駆除し、この秘密は最後まで守り通せた。

順調にヒトの数は減らせていたが、しかしやはりヒトが作り出した窒素化合物の合成技術は惜しい。そこで肥料工場を襲撃し、内部の仕組みを解析。窒素化合物生成の技術を『習得』した、新たな植物の創生に成功した。

技術が習得出来れば、いよいよヒトの価値はない。葉緑体を介して世界中の作物に指示を出し、普段の数百倍の殺菌成分を合成。ヒトから作物を『没収』し、生きる糧を絶った。

それでもヒトの貪欲さは凄まじく——そうなるよう導いた訳だが——、海の魚を食糧とする事で生き長らえようとしていた。無論それも許さない。創り出した窒素化合物合成植物を利用し、海を窒素で汚染。漁業資源の壊滅という『追撃』により、更にヒトの生きる術を奪う。

次に荒廃した都市部に麻薬植物を生やした。ヒトの精神は合理性と程遠く、過酷な環境下では容易く麻薬に跳び付く。例えばそれが『自壊』を招くとしても、だ。これまでに取引されてきた麻薬植物を通じ、プラネットはそれを知っていた。

ヒトの数が減り、戦力が余ってきた頃、自ら石炭の採掘を行ってみた事もある。だが上手くいかなかった。葉緑体の総意であるプラネットは、細胞内で起きる複雑な化学変化は理解出来ても、足下の石ころを見分けるのは苦手なのだ。小型個体にやらせてみたが効率が悪く、結局は断念。ヒトを処分する上での『代償』として諦めるしか

ない。

やがて作戦は最終段階に入り、洞窟など森以外に暮らす人間の『掃討』を始めた。これにより全ての人間は森か、それに類する環境に暮らさざるを得なくなる。

最後に森の植物達に抗菌成分を大量放出させれば、森に逃げ込んだ全てのヒトを巻き込める。逃げる事も出来ないまま、ヒトは残らず倒れ、『根絶』は成し遂げられた。

……作戦を振り返れば、改善点は幾つかある。しかしそれ以前に、ヒトという失敗作を生み出した事が問題だろう。次に似たような事を行う時は、今回の失敗をよく思い出さねばならない。しかしながら全てが終わった今、ああだこうだと後悔する事も非合理的だ。プラネットはそう考える。

何よりこの肉体は強大であるが故にエネルギー消費が多く、維持費が馬鹿にならない。

故にプラネットは氷の縁から跳び、海へと飛び込んだ。

酸素フィールドを纏っていない身体は海水の冷たさにどんどん体力を奪われ、沈みながらその生体機能を喪失させていく。ヒトの根絶が完了した今、この身体は最早不要だ。不要な肉体は直ちに炭素・窒素の循環に還元すべきである。そして意識こそが本体であるプラネットにとって、肉体の崩壊は枷からの開放でしかない。

肉体から乖離しながら、プラネットは考える。

此度の作戦で星全体の生態系が少し傷付いた。生物種の絶滅など興味もないが、放出された二酸化炭素や窒素化合物が環境に馴染むまで、数千〜数万年の時間が必要だろう。新たに創り出した窒素化合物合成植物が適度な水準まで繁殖するのにも、万単位の年月が必要だ。仮に今なんらかの行動を起こした場合、普段以上に環境変動が大きくなり、想定外のダメージが生じかねない。

しばし、数万年ほど地球を休ませた方が良いだろう。そしてそれは地球を覆い尽くすプラネットの休みを意味する。

ヒトを滅ぼし終えたプラネットは、地球と共に久方ぶりの『休暇』を満喫するのだった。